

# 浄瑠璃通解

第四編

## 目次

- 近江源氏先陣館……四斗兵衛内の段
- 近江源氏先陣館……盛綱陣屋の段
- 近江源氏先陣館……船長の段
- 義經腰越状……目貫屋の段
- 義經腰越状……泉三郎館の段
- 鎌倉三代記……三浦別れの段
- 日本賢女鑑……片岡忠義の段
- 八陣守護城……政清本城の段

竹本攝津大椽  
竹本彌太夫  
山本九馬亭  
竹本章太夫  
淨瑠璃通解

贊助

著

第四編

東京博文館藏版

御著述拜見御骨折にて淨瑠璃の眞味も世に知られ可申小生等  
至極賛戒之事に御座候近松半二が隨分骨を折て作はすれども  
太夫に語り殺さるゝこそ悲しけれと申したる其半二も實は作  
を太夫に語り生かさされ候にて其末に至りてはますく太夫の  
御蔭にて作も抜けくゝに生残り候が多くなれば太夫の上手に  
まかせ又自分考へよりあらぬ事に語りかへ誤りたる事も有之  
すでに上手の名ありし太夫にて染分手綱の三吉の詞夜は沓う  
ち草鞋作りを沓かきと語りかへ馬の沓はうちとは云ずかきと  
いふが本式なりと故實がりて笑ひを取り候もありまた今世の  
名人にて鏡山のお初が尾上の下りを待つところの文句待つ間  
もとけしなが廊下を待つ間長閑しの意味に語るが本意なりと  
云はれしもありとか解けしなきといふを長閑しとは待間の長

しといふ意味よりの誤解なるべきが随分横道へ入りたる事にて此文句は元來忠臣藏六段目お輕が勘平の歸りを待つ待つ間もとけし投鳥田より來りしにて是等手近き事さへ斯の如くに候は必竟床本は勿論全本とて假名多くしるしあり讀に易きより又誤り易きかと存じられ候。本文を正しく讀得候はねば趣向文章の妙味も出で不申御著述は正しく讀得候上に難解の文句を註釋せられしことゆゑ是によりて始めて院本の眞面目明かに相成りしとも可申結構の事に候尙ほ引續き御精撰御通解下され候事を希望仕候

十二月十七日

饗庭與三郎

山本信吉様

未だ貴下には拜顔を得ず候へども此程内山正如君の御紹介を以て貴著の淨瑠璃通解殿に御面會致候處通解殿は先菅原伊賀越其他二三種に就て普通の俗語は勿論解し難き文意まで悉く御説明に相成只々感服の外は御座なく候續いて忠臣藏千本櫻盛衰記などの通し物には定めて面白き御註解の多からんと今より娛み相待居申候尙此上御丹誠の御著述勇々敷御成長の程を祈り候早々頓首

癸卯十二月二十日

幸 堂 得 知

九馬亭主人

淨瑠璃通解第四編

# 淨瑠璃通解第四編

## 目次

近江源氏先陣館……………	四斗兵衛内の段……………	一
近江源氏先陣館……………	盛綱陣屋の段……………	二六
近江源氏先陣館……………	船長の段……………	五六
義經腰越状……………	目貫屋の段……………	八〇
義經腰越状……………	泉三郎館の段……………	九五
鎌倉三代記……………	三浦別れの段……………	一二二
日本賢女鑑……………	片岡忠義の段……………	一五四
八陣守護城……………	政清本城の段……………	一七七

目次

# 淨瑠璃通解第四編

山本九馬亭著

竹本攝津大椽

竹本彌太夫贊助

## 近江源氏先陣館

四斗兵衛内の段

### 總解

近江源氏先陣館は。大坂陣の作りかへにして。此段の主人公四斗兵衛即ち和田兵衛秀盛は。後藤又兵衛基次なり。彼れを無類の呑助としたるは。彼れが黒田家を浪人してより。大坂へ入城するまで。大和又は近江(種々の説あり)にはふれ居て。赤貧を構はず。終日酒浸しになり居れる由いへるより。作れるなるべし。四斗兵衛を後藤兵衛(五斗兵衛に通ず)が酒に世をくらし居る時の名とし。和

田兵衛を又兵衛に通はしたること。さても作者が名をつくる事のさがしきよ。又此前の段に。

これも初めは一斗兵衛であつたれど。段々吞上げるにつき。二斗兵衛と立身し。三斗兵衛と出世し。追つけこもかぶり(四斗樽)まで吞上げるといふ心で。今の名は四斗兵衛。何とゑらい吞助であらふがの。こりやきつい。一斗から四斗兵衛までの立身。其位では今の間に。五斗兵衛の名を萬天にあげるであるべし。と書けるもをかし。

三浦之介義村は木村長門守重成にして。三浦に木村を通はしたるも妙。片岡造酒頭は片桐市正旦元。宇治の方は淀君。頼家は秀頼。時姫は千姫。鎌倉は江戸。坂本は大坂にあてたる事しるし。しかして大江入道は大野治長にあてたるなるべし。頼家の許嫁なる時姫が使者に來りし。三浦之介に戀慕するなど。

は。木村が家康を刺さんと。鐘銘申開き(方廣寺の鐘銘に國家安康の句あり。家康我が名を切りて呪へるものなりとて。其供養を禁し難題を申し込めり)の爲め。淀君より駿府(家康の居所)へ遣はせる二女の侍となりて。赴きしといふ事(日本賢女鑑總解參照)和睦誓文の血判見届けの使者として。家康の陣へ赴きしといふ事。なとに思ひよれるなるべく。頼家と縁邊は絶えたれどもなどいへるは。二代將軍秀忠の女千姫。秀頼の室となりしが。大坂落城の砌。坂口出羽守に助けられて。關東へかへりしといふより作れるか。姫は本多忠刻に再嫁し。後淫に亂れ(吉田通れば二階から招く)の俗謠は。此姫の事をうたへるなりと。鎌倉方へ反り。忠又名を捨て。忠義を立つるなどは。且元家康の在世中。關東に双向ふの不利なるを知り。如何なる難題も其命に従ひしかば。淀君の怒に觸れ加ふるに大野の讒ありて。反り忠の汚名を蒙り。大坂城を立退きし

が。身。を。敵。に。置。き。心。を。君。に。寄。せ。冬。陣。の。時。秀。頼。母。子。を。し。て。砲。撃。の。危。難。を。免。れ。し。め。た。り。な。ど。い。へ。る。よ。り。書。け。る。な。る。べ。し。日。本。賢。女。鑑。の。總。解。に。く。は。し。切。腹。の。事。は。且。元。大。坂。落。城。と。聞。き。て。氣。を。喪。ひ。遂。に。自。盡。せ。り。と。い。ふ。に。取。れ。る。か。何。の。五。萬。や。十。萬。石。は。後。藤。浪。人。の。頃。常。に。か。く。の。如。き。事。を。い。ひ。居。り。し。と。い。ふ。何。卒。名。あ。る。軍。師。を。云。々。は。片。桐。加。藤。清。正。と。は。か。り。て。黒。田。の。浪。人。後。藤。を。招。く。べ。き。を。定。め。城。を。去。る。時。木。村。重。成。に。言。遣。せ。し。と。い。へ。る。が。本。な。る。べ。し。義。經。腰。越。狀。及。八。陣。守。護。城。の。總。解。參。照。追。從。表。裏。の。大。江。入。道。は。大。野。治。長。淀。君。の。寵。を。恃。み。て。權。を。弄。し。片。桐。を。退。け。忠。士。の。謀。を。妨。げ。し。ば。眞。田。後。藤。木。村。の。輩。よ。り。君。の。仇。な。り。敵。の。間。者。な。り。と。て。忌。み。さ。か。ら。は。れ。し。に。よ。れ。る。な。ら。ん。

兜。に。蘭。奢。待。を。焼。く。事。は。木。村。重。成。が。斯。く。し。て。戰。に。出。て。討。死。せ。し。と。い。ふ。よ。り。書。く。此。事。は。鎌。倉。三。代。記。の。總。解。を。見。よ。な。ほ。據。所。と。思。

ふふしあれど。餘り煩しければはぶく。

大坂一覽起覺書 九月十日。駿府を立ち大坂にかへる。(且元)十六日の夜土山の宿にて。二人(大藏卿局正榮尼)の老女。駿河の御旨を請ひ問ふにより。云々の由を告ぐ。二人亦且元が思ふ所如何と問ふ。且元答て。兎角に御親みあらざれば。大閤の遺言も立ち難し。熟々事の様を思ふに三策あり。一には秀頼公諸大名と同じく。江戸に住居坐さん。二には淀君を人質に參らせられんか。然らずんば大坂城を開き。他國にて御領地申請はれんか。其外存ずる旨なしと語る。二人之を聞き。夜にまぎれて急ぎ大坂に馳せ歸り。事を添へて告げ申しければ。此事大に母子の心に適はず。且元駿府に内通し。當家をはからんとするに疑ひなし。と評議區々なり。

大坂御陣覺書 道中にて。片桐二人の女中に申しけるは。大坂を所替も城を割候事も。不罷成事に候。淀様江戸へ御下被成候にて事

濟儀に候間被歸候はゞ。必々此段幾度も被申上可然旨申聞候。二人の女中此旨可然由。表面にては申しけれども。内心は一向同心なく。江州土山に宿し。夜片桐をだしぬき。夜通しに伏見へ通り。大坂に着。片桐駿府へ心を合せ。淀君を大御所の御臺に仕り候はんとたくみ仕り候由。讒言せしかば。淀君大に怒り給ひ。信長公の姪にて。淺井長政の娘の身。太閤へ奉見さへ口惜く思ひつるに。又家康へさあらん事は無念なり。中々人質に關東へ下るまじく候。片桐着候はゞ。御誅伐可有と被仰出しかば。皆用意つかまつり候。

厭蝕太平樂記 片桐曰く。某に此御書を。板倉伊賀守に直に届けよとの事なり云々。同道申して京都へ參るべし云々。且元曰く。扱は足下先へ歸り。讒言を申さん爲にや。惣じて正榮尼公は何事も演舌なし。只其元一人意地を張つてものをの給ふ云々。各先へ歸り給へば。是非此事を問給ふべし。然る時某を讒して。我子の修理に

執權させて。君の御大事を引出すべし。是非京都へ同道せん。大藏局が曰く。如何やうの誓言なりともいたすべし。歸り候ても。跡より片桐承りて歸り候と申すべし。何として市正殿の御事を申すべきや。且元曰く。それは勝手次第なり。止めはいたさず。大藏殿足下夫婦親子は。我君の仇なり。今討つてすて度ものなり。とにらみつけて別れける。正榮尼は片桐が仰せ尤もなり。京都へ參るべしといへども。大藏は聞入れなく伏見へ出づる。市正は詮方なく京都へ越えたり。扱局方は大坂へ歸り。正榮尼は何事も跡より片桐承り歸り候といふ。大藏曰く。片桐は變心して東國方になつて。御母堂を人質として下さんと請合。品川表四丁四方の屋敷を下さるべしと約束して。本多佐渡守と縁を組み。變心と定め申候と申しければ。淀君大に怒り。我を思ふやうに自由にせんとは。扱こそ謀反に極りたり。惣じて我を太閤の妾とあなどりて。己が心のま

ゝに行ふよな。京都へよりし事も。其事を謀らん爲めに行きしな  
らん。歸り次第首を刎ねて。後々の見ごらしめにせよとなり。木村  
重成が曰く。且元此表を出立の節。必ず某よりいかやうの事あり  
とも。人を遣すまじと申し。又三年とめられなば。何事も成就すべ  
しと思召さるべしと。申置いて罷立候を。兩女をつかはされて云  
々。

厭蝕太平樂記 幸村大野に向ひ。此度は其儘にさし置くべし。其元  
諸事へ入らざる事。不届千萬なり。忠義を御存じなくば。口を閉ぢ  
給へ。今度穢多が崎にてとられし大筒にてこれにて矢倉を打崩  
されしなり。味方をうたれては難。義にあらずや。今霄の中に軍兵  
を引取つて。伯樂が淵川口等の人數も取引るべし。それにて某籠  
りしと敵に知れ申すゆる。某戦かなはず。軍兵を失ふ事を知れど  
も。其まゝさし置くなり。片桐且元を讒して。剩へ御城の大毒大筒

を。と。ら。る。ゝ。誠。に。其。方。は。敵。の。間。者。の。や。う。に。存。ず。る。な。り。御。預。り。の  
人。數。を。取。上。げ。五。十。日。閉。門。申。候。と。て。押。込。め。け。る。云。々。  
片。桐。の。後。藤。を。推。舉。せ。し。事。な。ど。は。都。合。に。よ。り。義。經。腰。越。狀。の。總。解  
に。讓。る。

此淨瑠璃は。明和六年十二月九日。竹本座の興行に上せしものにて。  
作者は近松半二。八民平七。松田才二。三好松洛。竹田新松。近松東南。  
竹本三郎兵衛。

四斗兵衛内の段

四斗兵衛内の段

「きほひ口がよくなる」は運が向くといふのに同じ。前に片岡が時姫をあづけに來て、よき知行取に世話するといへる。これなり「只今禁酒じやといふて」此時四斗兵衛、姫を預る間は何年でも、禁酒と誓へり。「戀人様」に逢坂の云々」後撰集に三條右大臣「名にしおはゞ逢坂山のされかづら人に知られて來るよしもかな」此歌より書き、人に知られて」を「人に尋れて」とかへたり、これ後に戀人（鹽竈長藏即ち三浦）の來る伏線、右大臣歌の意は次第に解す。「顔は照葉に置く露」とかけたり、顔の赤らむをいふ、

道へ立歸る。跡に夫婦が氣もいそぐ。詞コリヤ鼻よ。強うきをひ口がよくなつて來たわい。コリヤまあ些とお神酒でも上げぬかい。アノ唯今禁酒じやと云ふて。最うかいの。ほんにな。其禁酒をとんと忘れた程にの。ハ、ハ、ハ、ハ。したが。飲付けた酒飲まずに居たら。氣が盡きて堪るまい。イヤ俺が氣の盡るよ。お姫様がア嘸御退屈にムりましょ。ソレお慰みに。酒の粕なと買ふて來て進ぜぬかい。ヲ、嗜ましやんせ。何の彼方へ那樣物。御不自由も暫しの中。やんがて彼方の思し召す。戀人様に逢坂山のさねかづら。人に尋ねてつひお出でムりましょと。勇め申せば時姫も。よしなき戀に搦まれて。我身斗りか片岡に。苦勞懸けるも自ら故。夫婦の手前耻かしと。顔は照葉に置く露の

「頓興聲」は間のぬけた大聲、頓怯なども書く、「四斗兵衛」は後藤又兵衛に當つ、本名が後藤（五斗）兵衛にして、浪人の頓赤食を甘じ、始終酒浸しになり居たりといへるより、思ひつきたる趣向と名なるべし、前に彼れが「今に五斗兵衛云々」などいへる事あるにても明なり、總解を見よ。

「ためつけ」は着ることないふ、大阪の俗語、「近附でも内儀様」とかけたり、「身の廻りに張込んで」鹽賣は籠かきの如く、とてら一枚たるを得ず、

「酒さへ貰へば何處からでも」挨拶面白し、

袖に浸せる有様に。おまきも詞涙ぐみ。暫し返答も無りけり。折から來る鹽賣が。上下ため付け酒樽を。肩にぶらく足音の中に若しやとお卷が機轉。誰が見咎めても大事のお身。見苦しけれど奥の間へと。女房に誘はれ。しづく立つて入給ふ。表に鹽屋が頓興聲。詞昇夫四斗兵衛殿とは此處でござんすかと。ずつと入つて顔と顔。詞ヲ、こな様が四斗兵衛殿かい。遂に逢ふた事も。又近附でも。内儀様は留守でござんすか。ア、嗅は内に居ますが。貴様マア何處から御座つた。イヤおりや鹽賣の長藏といふ者でござんすが。ア、鹽商賣も身の廻りに張込んで。合ふ事ぢやござんせぬわいの。夫で資本の要らぬ昇夫がしたさに。弟子になりに来やんした。マア近附の爲少分乍ら此一樽。寐酒に飲んで下されと。酒樽直せば莞爾笑ひ顔。詞ハ、ハ、ハ、こりや忝ない。酒さへ貰へば何處からでもよう御座つた。したが

「裸で茶の湯」のたとへ亦面白し、茶の湯の式は極めて正し、裏は反對の意「これも亦水じやないか」「四斗兵衛前に水に懲りたり」「きつい氣の張やう」籠かきの弟入りに酒樽とは「小ながら酒や八文酒」は居酒屋の駄酒をいふ、小ならは居酒屋などにて、茶碗につぎて立飲する酒をいふ、「なみざ」は並酒、「鎌倉山」と聞いてさとり「鎌倉山でござらうが云々」の口上頗る面白し、「お辭義なしに下されます」「樽の口から出流れ、さもあらん、

「太刀魚の作り物」とはよくいひたり、太刀魚は形太刀に似て細長く、ひらたく鱗なき魚、

昇夫の弟子入に上下とは。ア、裸で茶の湯に行く裏じやの。爾してこりや強い氣の張やうじやが。是も又水じやないかや。ハテ那樣じや無い。小ながら酒や。八文酒飲付た口には。些と重うて飲悪からう。なみざでも無いこりや鎌倉山。ヤ何と。サア鎌倉山といふ。大切な名酒じや程に。へ、味はふて飲んで貰ひましよかい。ム、ムン飲んましよ。如何にしても云様が面白い。又此四斗兵衛が飲むからは。鎌倉山でムらうが。富士の山でムらうが。假令日本國でも。コレ此茶碗に引受けて。いでと思はばぐつと一飲。マア試みに一杯致そと。樽の口からとぶく。お辭義無しに下されると。引受け續け飲。詞こりや見事。さらばお肴仕らうと。藁苞解いて黄金作。太刀魚の作者粗末乍らと差出せば。ム、こりやお肴が肉すぎて。我等些と喫悪く。此肴はマアお預け申さうかい。イヤお辭義には及ばぬ。

「こりやお着が肉すぎて」とばよくうけたり、此上なき割符のお着、  
「コレ此槍の鋒先、嚙こなした」前に籠昇四斗兵衛、待に切つけられて、古井戸に飛込みし時、鹽賣長藏、此奴只者ならんと、榜に仕込みし槍をつゝ込みしに其穂先をほつきと折りし事見たり、  
「何のおれも首じやなし云々」面白し、

「兄様に詞番ふた此方の出世云々」前に片岡が姫を預けに來て、妹もろ共鎌倉へ同道して、拔群の知行取りに世話せんと、詞番ふたは約束した

太刀魚よりはコレ此槍の鋒先。嚙こなした齒ぶしの丈夫。天晴四海の軍師。サ酔興人と見極めてのお着。受けてすつぱり。切つて貰ひたい。ム、切れとは何を。時姫の首。ヤ、唯今隠匿れた時姫。其首が貰ひたい。ガよもや貴様得斬るまいの。ソリヤモ何より心安い事。斬つて遣る。何の俺が首じやなし。他の首の一つや二ツ。望なら目の前でと。又引受けてこぶ。詞然らば着も。ハテ志じや戴こかい。時姫の首。夫も合點。斬つて遣ると。始の心酒故に。打つて替つた詞話。一癖者と知られたり。始終一間に聞居る女房走出で。コレ四斗兵衛殿兄様に詞番ふた此方の出世。知行取になる事も。酒で忘るゝたわいなし。如何に酒に酔ふた連。お姫様の首斬るとは。餘りな人で無し。コレ其處な人。酒の酔を對手にせずと。とつと去んで貰ひましょと。聲顛はして腹立つ女房。夫は酒に廻らぬ香

「そげめ」は妻などを罵る語、廿四季にも「かゝのそげめはてこれてしまふ」俚言集覽に「そげ者、奇僻の行ひあるものをいふ、平常をさげはず意、即ちそむくなり云々、これ等の意より來れるなるべし、  
 「何の五萬や十萬石」後藤浪人中、かくの如き事をいひ居りしといふ、  
 「盡せぬ縁か見かばす顔」此住の江(後に明なり)は、時姫の侍女にして、三浦が使者に來りし時、姫との中を取持てる者、時姫の供して鎌倉を落延び、都へ上る途次、三浦(即ち鹽賣長藏)に遇へり、主の姫の戀人なれば、これに譲りしも、自ら心なきにあらざりしなり、  
 「佛頼んで地獄の牛頭馬頭」助からんと頼みし者に、却

付。詞「ヤイツ、そげめ。知行くと吐すが。何の五萬や十萬石。此酒に換らるゝものかい。夫で姫の首討つて遣るが。ナ、何とした。ム、すりや何うあつても。お姫様を斬る氣じやの。ナ、斬る。夫聞いたら最う爰には置まされぬ。妾が供して兄様へ手渡しすると。一間へ駈入り甲斐ぐしく。姫の手を執り立出づる。盡せぬ縁か見合す顔。喃懐かしや戀しやと。立寄る姫を抜討に。首は前にぞ落にけり。ハア、はつとお牧が氣も半亂鹽賣突立ち。ナ、天晴四斗兵衛出來されたりと。云捨てゝこそ駈り行く。跡に女房が聲を上げ。扱もく痛はしや。お命を助けう爲。心を碎いて兄様が。爰迄預けに見えたもの。其時無情う預からずは。恚う云ふ事は出來まいもの。佛頼んで地獄の牛頭馬頭。若し今にでも兄様が。お迎ひに見えたらば。わしや言譯が無いわいの。いつそ殺してくと。夫に執付き緊擲付き。怨

つて殺さるゝをいふたとへ、頗る妙、牛頭馬頭は地獄の獄卒にて、牛の頭馬の頭したるもの、  
「片岡が禮義の上下」 頗るかたし

「龍頭」 は真向(眞庇)の上の立物、軍用記に「真向の立物は、龍頭獅子頭なり」武用辨略に「舊記の既に、鐵形に龍頭を設けたるは、是大將に限りたる事と云々」と見ゆ、

「契約の通り只今より云々」前に拔群の知行取りに取持つといへる首尾、

「音物」 は贈り物の意(もと音信の贈り物といふ義なるが、賄賂の事に俗用す)

「しなしたり」 はしまつたり、

み歎けばころりと轉け。前後も知らぬ高駈。恚とも知らず片岡が。禮義の上下折目を正し。御迎の乗物吊せ。悠々と戸口に千み。詞ヤア家來共。伝附置きし物此家へ持參し。案内せよと詞に連れ。衣服大小白臺に。輝く兜は龍頭。邊り狭しと並へ置く。片岡しづく内に入り。誠に雷の落來る急難。事故なく相濟みし故。早速姫の御迎に參上せり。是と申すも四斗兵衛殿。御隠匿下されし故。助かるまじき姫の命。助かりし命の親。直に鎌倉へ同道致し。時政公へ御目見。契約の通り只今より。武士に取持つ印の音物。御受納有つて姫諸共。御出立有らば此上の悦び無しと。懇懃に述べければ。女房有るにも有られぬ思ひ。兄が脇差拔取つて。自害と見ゆるを片岡押へて。ハテ心得ぬ此有様と。双物振取り眼を配り。詞ヤこりやは時姫君の御死骸。何者が手に懸けし。ア、しなしたりくと。齒を咬緊り怒りの面色。

「二分試し」はすだぐにすること。

「勢ひ雲に龍頭の云々」よ  
くいひたり、龍の雲に乗ず  
る勢ひ、すさまじくもな  
し。

「江州醒が井の住人」又  
兵衛浪人中、近江にありし  
といへるより書けるなるべ  
し。醒が井は坂田郡にあり、  
「坂本の城」は大坂城に  
當てたる事しるし、坂本城  
は近江國滋賀郡下坂本村に  
あり、織田信長、比叡山の  
僧徒鎮壓の爲め築きし城に

詞妹が舉動と云ひ。扱は四斗兵衛めが所爲よな。汝下郎め主君  
の敵。一分試しと斬付ける。心得むつくと起上れば。苛つて斬  
込む刀は稻妻。此方の早速は飛鳥の翔り。勢ひ雲に龍頭の。兜  
を片手に引摺み。一間を指して駈込んだり。詞ヤア卑怯者。逃  
ぐるるとて逃さうかと。續いて駈行く向ふに妹。ナ、お腹立は理  
り至極。酒故亂るゝ心を知り。隠匿ふたは妾が科。夫よりマア  
先へ。妾を殺して下さんせ。爾う無い中は奥へは遣らぬ。ヤア  
邪魔ひろぐなと。引摺退け。駈行く鎧に又取付き。遣らじ放せ  
と争ふ最中。詞表の方に大音上。江州醒ヶ井の住人。和田兵衛  
秀盛殿。御用意可くは坂本の城へ御入城。三浦の助義村。御迎  
に伺候せりと。呼はる聲は以前の鹽賣。始には似ぬ勇士の扮装  
急に急いたる片岡も。様子如何と猶豫居る。女房不審立ち向ひ。  
詞坂本の城へ誘はんとは。何時味方させ何時の計畧。殊には隠

して、後明智光秀をしてこゝに居らしむ、光秀の山崎に敗死するや、從子光春城に火をかけて自殺せり。

「和田兵衛秀盛」 後藤又兵衛基次に當つ、總解を見よ。

「三浦の助義村」 木村長門守重成に當つ、總解を見よ。

「陳平韓信の腸をさぐり」

陳平韓信の意を得ての意、陳平は漢の高祖の臣、智謀ありて奇計を好みし人、反間を放ちて、項羽と宛増との中をさき、又或る戦ひに五度奇計を行ひし事あり、少かりし時家貧にして書を好み、里中の社の宰となつて、肉を分つ事均しかりしゆゑ、里老之を稱せしに、我れをして天下に宰たらしめば、亦此肉の如しといへり

す夫の本名。和田兵衛秀盛とは。ホ、陳平韓信が腸を探り。市

人に姿を扮し隠されても。美名は四海に香しく。宇治の方の仰

を受け。何卒して味方に招き。雌の劔を授けんと。姿を扮し徘徊

すれども。詞元より面體見知らぬ某。如何と心を碎く中。中仙

道にて不思議に出逢ひ。我姓名を記したる。手槍を以て試せし

手練。和田兵衛ならで。外に及ばぬ奇躰の手中。何卒味方に

頼まんと。思へど便る方便無く。如何と案じる時も時。時姫君

を隠匿れし。是幸と此家に来り。首討つて渡されよと。渡せし

劔が即ち雌の劔。我心を推量ありしか。事故無く受取られしは。

味方に加はる證の割印。此上は片時も早く。打立給へ御供せん

と。高かに呼はつたり。片岡聞くより猶も急立ち。詞ヤア京鎌

倉と引別るれば。我は鎌倉時政方。京方の奴原一人も生け置れ

ず。其上眼前姫の仇。何處迄もと駈行く一間。隔の戸障子踏開

とぞ、韓信も高祖の臣にして、所謂漢家三傑の一なり。武略に長じ、兵を用ふる事神の如く、漢家一統の武功は殆ど此人に歸せり、穢賤の頭、耻を忍びて少年の腹をくぐり、飢えて漂母に食をうけし事は、昔人の知る處なり、此人々の傳は、史記にも見られたれど一市人に姿をやつせし」などいへるは漢楚軍談などによりて書けるなるべし、

「宇治の方」は淀君にあてたるなほべし（宇治川の下流は淀川）總解を見よ

「雌の劍」支那にて、楚王が千將莫耶の夫婦にうたしめたる兩劍を、雌雄の劍といふ由見のたり、一對の一を雌とし一を雄としたるなるべし、なほ軍艦に姉妹艦あるが如くならん、又大

けば。内に四斗兵衛優々と。厚袍に代る肌衣の小具足。唐縫したる陣羽織に。十王頭の小手脛當。太刀と兜を兩の手に。床几に掛る有様は。實に百萬騎の軍帥と。骨柄ゆゝしく見えにけり。

和田兵衛兜を座前に直し。いかに片岡。時姫の身に代り。殺されし其娘は。定めて貴殿の息女ならん。痛はしさよと悔みの詞。詞ム、すりや某が娘と知つて。ホ、ホ、ホ、敵の氣を見て士卒を使ふ此和田兵衛。況んや一人の女童。如何程に偽ればとて。親子の親み上下の人相。一目にも見違ゆべきか。頼家公に縁邊は斷れたれども。不義の科ある時姫君。夫故娘を身代とし。時姫の心の儘。三浦の介に添せんと。心を碎く片岡殿。其忠義を感じ入り。詞不慙乍ら切害致せば。時姫といふ名は消えて。今は憚る所無し。御迎の乗物に。忍びまします時姫君。早々是へと和田兵衛が。詞に片岡陳じも成らず表の方。乗物明くれば時姫

小の大を雄とし、小を雌と  
したる事も見むたり、

「中仙道」は東山道、

「時も時、時姫君を」調あ

り、

「小真足」は籠手腰當等

なして、胴のみを着けざる

出立の稱なれど、こゝは腹

巻にてもしたるをいふもの

ゝ如し、

「からぬひ」はからげぬ

ひの略、唐縫の字を當てた

るなり、より糸にてかぶり

縫ひしたるをいふ、

「頼羽織」は武用辨略に

「其制最も多し、袖無に仕

立て、羅紗、猩々緋等好みに

よみて色々あり、徒膚或は

織の上にも著る、故に陣羽

織と稱して、人毎に用意し

はべる」と見ゆ、

「十王頭の小手腰當」十五

頭は兜なるべし、武用辨略

君。こけつ轉びつ住の江が。死骸に取付き継付き。親の許さぬ

戀路故。豫て無き身と思ひしに。自が命に代つて。死んでたも

つた住の江。嬉しいとも忝いとも。いかで詞の有るべきぞ。只

怨めしいは造酒の頭。恚なる事を露程も。など知しては吳ざり

し。知らば闇々此人を。殺すまいもの味氣なやと。怨み唧ちの

涙川。袖に淵なす計りなり。詞ヤア住の江とは紛らはし。其死

骸は時姫君。さ云ふ汝が我娘ナ。御合點が參つたか。親に勝つ

た娘が忠義。犬死さして下さるなど。目を瞬たく片岡が。心を

察して妹は。三浦の介に打向ひ。時政公の御息女と。云へば添

れぬ敵味方。兄様の娘御に。何の障りも味方同士。申し御了簡

はと。云ふを打消し。詞ヤア味方とは穢はし。鎌倉方へ裏返り

たる不忠侍。其の娘に何の縁組。某に心を寄せし時姫君。首討

れよと望みしも。敵の縁に引れぬ潔白。是非時姫を娘とし。此

に圖を出せり、されば十五頭の兜と、籠手、應當といふ意なり、

「敵の氣を見て云々」和

田兵衛大に吹出したリ、これ位先見が出来ればよし

「片岡造酒の頭」は、片

桐市正且元に當てたる事論なし、總解を見よ、

「涙川」淵なす」相應す、

「鎌倉方に裏返たる不忠侍」又「名を捨て、忠義を立つる造酒頭」且元今家康の存

世中、事を構ふるの不利なるを知り、其意に觸れざるやう其命を聽きしかば、大阪にては、片桐關東に内通

せりなどいふものありて、澁君の怒に遇ひ、遂に其邑茨木に退き、大阪陣の時は關東方となりて、秀頼母子の危難を救へり、これ等の事より書けるなるべし、な

三浦へ送りたくば。掣引出には汝が首。覺悟せよと詰寄すれば。

ヤレ逸まられな三浦の介。命を捨て、名を上ぐるは。誰しも武士の好む所。名を捨て、忠義を立つる造酒の頭。其證據こそ此

兜。是こそ將軍宣下の御寶。假令頼家軍に打勝ち。四海残らず

横領あつても。此兜無き時は。將軍宣下思も寄らず。詞其處を

量つて片岡が。鎌倉方へ裏返り。不忠の名を取れし故。念なう

兜を奪取り。某に渡されしは。名を捨て。忠義を立つる古今の

忠臣。此兜手に入るからは。是より坂本の城へ馳向ひ。詞鎌倉

勢と分目の軍。假令時政。何萬騎にて向ふとも。宇治勢田に砦

を構へ。變に應じ機に乗じ。或は顯れ或は隠れ。千變萬化に寄

手を悩まし。大將に舌卷せんは。此和田兵衛が方寸にあり。心

安かれ方々と。座ら謀る軍師の軍配。詞ホ、驚入つたる秀盛の

名智。斯る軍帥味方にあらば。軍の勝利疑ひ無し。我はあつて

ほ此段及日本賢女鑑の總解  
を見よ。

〔聳引出〕 は聳への贈り

物。

〔名を捨て、忠義を立つる

云々〕 好む忠義は誰もす

べし、此忠義最もかたし

〔此兜こそ是將軍宣下の御

寶〕 何によりて書けるか

重成が兜に名香をたきしと

いへるより、思ひつきの作

事なるべし。

〔宇治〕 は山城の宇治勢

田は近江の勢田、昔都の

要害にして、一朝事ある時

は兩所を固めしなり、故に

書けるのみ。

〔方寸〕 は心の意、

〔差添腹に突立つれば〕 且

元大阪更陣に使命を奉じて

駿府へ赴く途中、城陥り秀

頼死すと聞きて、氣を喪ふ

事數次、遂に衣を整へ香を

も無益き臣。今こそ三浦の望に任せ。智引出進上せんと。云ふ

より早く差添腹に突立つれば。喃悲しやと姫妹。縋り歎くを押

退け突退け。詞京方には誰々と。指折の數にも入りし某が。暫

くにては鎌倉へ。裏返つたる其惡名。何を以てか雪ぐべき。味

方の中にも追従表裏の大江の入道。某再び城に歸らば。豫々よ

り鎌倉へ。内通したる事共の。顯れん事身の大事と。如何なる

非道謀計を以て。味方の心を迷はさば。區々なる人心。我疑へ

ば人疑ふ。人氣和せざる其時は。軍の勝利思も寄らず。其處を

思ふて此切腹。死後にては片岡は。返り忠せし不忠の臣と。未

代に名を汚すとも。一心五臟に忘れぬ忠義。何卒名ある軍帥を。

御味方させんものと。詞心當處は和田兵衛殿。妹が連添ふと聞

きは幸ひ。住所を尋ね。我志を立てん事。此人ならでと娘を

誘ひ。存念をたてたる某。妹悔むな。時姫君もお歎き無く。御

焼き、西に向ひて無功を謝し、劍に伏して死す。此等の事より作れるなるべし「大江の入道」は大野治長にあてたるなるべし、治長淀君の寵を恃みて、權を擅にし、柱石の忠たる且元を退け、不法の事多かりしかば、眞田後藤木村の如き忠直智謀の士には、君の仇敵の間者として忌みきらはれたり。

「區々なる人心、我疑へば人暴威、家康の離間策等にて大阪城中は、實にかくの如くなりしなり、」

「何卒名ある軍師を云々」

且元、瀨人後藤又兵衛を秀頼に目見せさせ、茨木へ退く時も、木村重成に早々此人等を呼出すべき由いひ遣せりと、厭蝕太平樂記に見

身に代る娘が。志を立てゝたべ。不惑やお主のお爲と聞き。悦ぶ事は悦びしが。詞逆もの事に男の子に生れたら。戰場の一大事。御馬前の御用に立つて。名を揚げる討死したら。父上迄お嬉しかろが。女子の身の臍甲斐無さ。父様こらへて下されと。云ふた時は出来したと。褒むる事さへ胸に逼り。一言一句も出なんだに。親に勝つて先に立ち。親は後れて歩む足。此家へ来る道々の。堅牢地神の頭には。嚙片岡が蹈む足が。大磐石と應へやせん。重き忠義に代へたる娘。よう死んで呉れたな出来したと。鍛ひに鍛ひし忠義の身體も。子故の鞆に吹立られ。咽ぶ涙は熱湯の。湯玉逆しる如くなり。妹は正體泣沈み。よくく薄い兄弟中。唯一人の姪子にも。名乗合もする事か。果敢無い別れ悲しやと。歎けば俱に時姫君。詞とても添れぬ敵同士。疾うから妾が死んだらば。恚うした憂目は見まいもの。何卒添た

仰、此等をもとにて書けるなるべし、總解を見よ、「逆もの事に男の子に生れたら云々」これ戦國時代に武士の女の、よく歎きし事なるべし、「親に勝つて先に立ち云々」子先づ死に赴き、親之を見舞はん爲め後より歩む、同じくこれ屠所の羊、足の踏所も覺わぬなるべし、已に菅原傳授に於て涙を垂る、こゝに於て再びす、何たる悲惨ぞ、「堅牢地神の頭にも云々」堅牢地神は大地をさし上げ居る神、進みかたたる足の重きなifu、何たる名句ぞ半二にして始めていひ得べし「重き忠義に」前をうけて書けり、「鍛ひ」鞠「吹立て」「熱湯の湯玉」皆縁の語よく書けり味ふべし、

いくと。未練な心の迷から。親子の衆の此最期。コレ堪忍してたもいのう。念斷らうと思ふても。隨意に成らぬが戀路の因果。詞つれない命死後れ。面目無い耻かしい。叶はぬ戀を諦めて。此身の果は尼法師。夫が切ての言譯ぞやと。身を裏菊の兩袖に。保ち兼たる露涙。詞親子の爲の香花ぞと。兜を時の香爐に。燠らす煙薊奢待。詞東大寺の寶物なれば。佛縁に誘はれ。未來の佛果と合す手に。又も涙の珠數の玉。こは難有き御手向娘も我も成佛得脱。只此上は。詞三浦の介へ。媒介頼む和田兵衛殿。ナ、其義は些とも氣遣あるなど。兜を取つて三浦に向ひ詞智引出と望みし首。此兜故命を捨てし片岡なれば。一心五體は兜に残る。是を引出に姫の事。氣強き計り武士とは云はぬ。コリヤ情も武士の道具ぞと。渡せば取つて三浦の介。此上何か辭退せん。幸勝利を得る迄は。お預け申すお牧殿。詞家を出づ

「身なうらむ」を「裏菊」と  
 かけたり、裏菊は模様、露  
 涙の語裏菊に照す、  
 「關者待東大寺の寶物なれ  
 ば」これ木村重成が兜に  
 關者待を焼しめて、討死せ  
 しといふよりかく、委しく  
 は鎌倉三代記の解にいふべ  
 し、關者待は勅封なる奈良  
 東大寺正倉院秘藏の金香、  
 別記を見よ、  
 「涙の珠数の玉」前をう  
 けてよくいひたり、  
 「成佛得脱」は生死の界  
 を離れて、佛になるをいふ、  
 「情も武士の道具ぞ」武士は物のあはれを知る、  
 「家を出づる時妻子を忘れ云々」これ武士三忘の二、御所櫻堀河夜討に「三忘と申して忘るゝ事三つあり、國を出づる時家を忘れ、堺を  
 出づる時妻子を忘れ、敵陣に臨んで身を忘る云々」、  
 「是の龍頭の兜を着し云々」鎌倉三代記の總解を見れば明なり「名香齋る首取らば云々」これ源平布引瀧に實盛「阪東音の首取らば云  
 々」といへると同趣向、  
 「詞は末に逢阪や」とかけ「關の清水と湧きかへるとつづけたり、これ後に其詞の如く、討死せしより書けるなるも、此作の結末を引出  
 たく納めて、事のこゝに及ばざるをかし、關の清水は逢阪の關のほとりを流るゝ清水、拾遺集に貫之「逢阪の關の清水に影見はて今や引  
 くらん望月の駒」よく書きたり味ふべし、

る時妻子を忘れ。戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常。若し  
 も運盡き頼家公。御大事とならん時。是此龍頭の兜を着し。君  
 に代つて討死せん。名香薫る首取りしと。云ふ沙汰有らば此三  
 浦が。討死せしと知り給へと。詞は末に逢坂や。關の清水と湧  
 返る。涙ながらの暇乞。離れがたなき初戀に。絆しは見せぬ若  
 武者を。伴ひ出づる軍の門出。羨ましげに伸上り。見送る手負  
 を介抱し。俱に見送る姫女房。戀と無常を見捨行く。武士の道  
 こそ。三重是非も無き。

る時妻子を忘れ。戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常。若し  
 も運盡き頼家公。御大事とならん時。是此龍頭の兜を着し。君  
 に代つて討死せん。名香薫る首取りしと。云ふ沙汰有らば此三  
 浦が。討死せしと知り給へと。詞は末に逢坂や。關の清水と湧  
 返る。涙ながらの暇乞。離れがたなき初戀に。絆しは見せぬ若  
 武者を。伴ひ出づる軍の門出。羨ましげに伸上り。見送る手負  
 を介抱し。俱に見送る姫女房。戀と無常を見捨行く。武士の道  
 こそ。三重是非も無き。

「初戀に絆しは見せぬ」 三浦は何處までも武士氣質に奮けり、  
「羨ましげに伸上り」 他のいさましく戰場へ出立つを見る武士氣質、さもとあはれなり、  
「見送る手負を介抱し俱に見送る姫女房」 うらやましげに見送る状見るが如し、  
「戀と無常を見捨て行く」 戀げ時姫、無常は巨元と住の江。

# 近江源氏先陣館

## 盛綱陣屋の段

### 總 解

此段は近江源氏中の傑作にして文章の妙趣向の妙よく人を動し人を感じしむ。

佐々木盛綱は眞田信幸。佐々木四郎左衛門高綱は眞田左衛門幸村。北條時政は徳川家康。其他は前段の如し。

眞田幸村七人の影武者をつかひしといふ事。眞田兄弟(信幸。幸村)敵味方となりて戦ひしといふ事。從兄弟同士組討せしといふ事。質首をつかひしといふ事。質首にむかひ。御宿勤兵衛自殺せしゆゑ。家康之を眞と思ひしといふ事。家康屢眞田に苦められ。其首を得て悦び。之を見てふるひをそれしといふ事。等を趣向の本として。此段を作れる事。左に載する所を讀まば。自ら明かなるべし。な

ほ他段の總解を參照せよ。

厭蝕太平樂記 中根に申けるは幸村其縛を解ささては其方の忠臣を惜む。今日にても戰ある時は眞田左衛門をよく見知りて。名乗りかけて討取るに遠慮はせぬぞ。尤もなりと兜を脱いで。面體をよく見知り給ふべしと。取つくるひて返しける。跡にて幸村申しけるは。只今其方を以て命を助け歸さする。我が愚意を汝知りたるや。穴山申しけるは。御名代討死覺悟いたし候といふ。さては其方存じの通り。兩大將を何方へも。夜前より追詰めたれば。敵を亡す事目の前にあれども。行方知れざる時は。汝に密に知らする通りなり。外に六人の影武者を添へて出で候べし。其方我れにかはつて討死せよ。然る時は敵の無理掛りを破り。今一度變を見るべし。罪作るとはおもへども。國松君を御迎への。後藤又兵衛が様子。を聞いては叶はず。去るによつて其方の討死をわれと思はせ。

敵を釣る手術なりと有ければ。穴山踊り出で、悦び。影武者を問ふ。一人は其臣三浦新兵衛國秀。一人は又兵衛が代りの幸右衛門弟山田舍人。一人は木村長門守臣木村助五郎。一人は伊藤團右衛門。一人は林源次郎。一人は鶺鴒<sup>いかるが</sup>幸右衛門。右六人同やうの出立。六文錢の旗をさゝせ。七人の眞田をこしらへ。時の至るを待居る。

新將軍は。元和二年卯五月三日七つ時。道明寺に於て大御所と御會陣あるべしと。河内の山の根を御通りありければ云々。將軍七つ半時に船橋に來り給ふ時に。五十目筒左右七ヶ所よりうちかくる。諸將大に驚き騒ぐ所へ。六文錢の旗をさし。七手の勇士切つて入る。聲々に大音に申しけるは。眞田左衛門幸村天運をはかり。落城を見ざる前に討死する。新將軍に對面せんと。五十目三十目の玉を打かくる。諸大將の旗馬印を打倒され。おめきさきけんて打ければ。諸將昨日の手術におそれ。隨分用心しけれども。七將の

眞田に魂を失ひ。開きなびけ見えけるを。穴山は御本陣へかゝる。六手は諸將の陣へ切入つて。將軍已に危き處へ。本多出雲守來りて云々。今は六將一所になつて。討殘されたる者三十八人と。小高き所へ上り。藁に火をかけ大音にて。眞田左衛門影武者共に七人切腹。今はこれ迄なり。首を取り將軍に見せよと。鎧を脱いで七人腹をきれば。介錯し鎧の袖に包み並べて。三十八人の者共。皆一度に腹切つて臥しける。これを見て我先にと。首をとりて争ひ來る云々。大御所には御待兼ならん。去ながら隙入なれども。よき土産(幸村の首)とて道明寺へ急ぎ給ふ。大御所は將軍を待給ふ處に。將軍御入りなりと申上げ。やがて御對面なり。御親子危き物語あり。將軍は眞田を討ちし事御申し。首を出し給ふ。大御所踊り上り。御悦び。此者さへ討取らば何を恐れん。城を落す事手の内なり。首實檢の法を以てすべしと。御用意仰付られ。先首七つをならべ。御弓

は云々。陣中穴山が働き格別なれば。これ誠の眞田なるべし。眞  
 中に据置けるが眉毛動きて笑ふやうに見えければ。他の者の目  
 には見えず。大御所の目にはかり見えければ。大きに恐れ御袖を  
 目にあて。飛退き給ひける時に。表の方物騒しく。一人の者捕へ來  
 る。これを見給ふに。越前の浪人御宿勤兵衛なり。汝は先年より眞  
 田左衛門に仕へ。二心なき者なり。然れども我も汝が恩を受けた  
 り。何事あつてこゝへ來る。其品に寄り叶へ得さすべし。と仰あり。  
 勤兵衛涙を流し申すは。先年より毎度御呼出し下され候處。參上  
 仕らず。あまつさへおん敵に一味仕り候私。御見捨あそばされず。  
 召仕い下されんと。の儀有がたく存じ奉り候へども。いかにして  
 も眞田が恩すてがたく存じ。妄念もはづかしく。せめて首なりと  
 葬り度志し御座候と申す。大御所尤もなり。あの中にはあるまじ。  
 しかし見るべしと仰ありければ。御宿見て。穴山が首を抱いて。涙

を流し。變りは。てたる。御有様と申して。流るゝ。涙泉の如し。さて勤  
兵衛申しけるは。此上は御恩に。此首拜領仕りたく。御座候と申止  
る。何と誠の眞田なるかと。御尋の時。討死の趣。御母堂に恨の品を  
いへば。則ち首を下されければ。有がたくと申しうけて立にける。  
大御所仰には。誠眞田が首なれば。勤兵衛腹を切るべし。斥候をつ  
けて見せしむべしと。伺はせ給ふ。さて勤兵衛は。傍の寺にゆきて。  
僧を頼みて。よく葬り。我がしるしの木に。一日之情。臣百年之命。捨  
と書つけて。腹を切りしるしの木に。取ついで。死しける。これを見  
る人かくと申し上げれば。さては眞田討死に違ひなしとて。大  
に悦び給ふ。然れば一刻も早く。城を攻落すべしとて。又四日の御  
陣ふれあり。誠に御宿勤兵衛が忠を。古今ためしまれなりと申し  
合へり。

厭蝕太平樂記

増田三七郎眞田大助が。出立にて。南門に扣へ居る。

云々。大勢見ゆれば馳せ入つて。眞田大助幸安こゝにあり。我れと思はん者は勝負せよと切つて廻る。大將の御陣は近し。三百の者ども所々に隔てられ。一騎にて切入る所。河内守。馳せ來つて引組み。兩馬が間に落ち。乗りかゝりよく見れば。なめかたの六文錢を。金紋にてつけてあり。さてはこれぞ君の御從弟と心得て。押付けの手をゆるめ。下よりはねかへさせて。我首を取つて。高名せよ。我は眞田大助なり。早いそぎ給へといふ。河内守。これを聞きて。組伏せし敵の首取つてこそ。高名ともいふべけれ。敵にもらひし首を取つて何かせん。我こそ眞田河内守。首を迷途のつれにせよといふ所へ。弟内記。かけ來つて。明松をふり上げて。さては兄の大事なりと。鎗にて突く。大事の手なれば横に伏す。河内守おき上りて。これ殘念なり。從弟殿。去冬は兜を射(大阪冬陣の時。從兄弟同士なれば。互に兜を射合ひて別れし事を載せたり)今又我れを討たず。度

々。の。恩。を。無。に。な。し。今。又。か。く。の。如。き。事。本。意。に。な。ら。ず。と。い。ふ。大。助。  
と。見。せ。ん。爲。め。七。三。郎。わ。ざ。と。聲。を。上。げ。て。思。ひ。寄。ら。ざ。る。從。弟。殿。の。  
手。に。か。ゝ。り。死。す。る。は。本。望。な。り。早。く。首。を。取。給。へ。犬。死。さ。す。る。か。と。  
い。ふ。に。是。非。な。く。首。を。討。つ。て。將。軍。の。御。前。へ。出。で。從。弟。に。首。を。貰。ひ。  
し。と。言。上。す。れ。ば。こ。れ。は。其。方。が。高。名。な。り。貰。首。に。あ。ら。ず。と。て。則。ち。  
首。を。下。さ。れ。傍。り。の。寺。へ。死。骸。共。涙。な。が。ら。葬。り。け。る。

盛綱陣屋の段

「軍慮を帷幕の打傾き」と

「けたり史記高祖本紀に

「運籌帷幄之中、決勝於千

里之外、吾不知子房」こ

れより書き、帷幄を帷幕と

かへたり、帷幕は陣屋の幕

の意、

「思案の扇からりと捨て」

苦心考慮の末、一計を案出

せる状見るが如し、

「申さぬ先から心得たと」

母を知りての語、事の重大

なるを見る、

「子細は知られど心得まし

た」流石は佐々木の母、

よく子を知るを見る、

盛綱陣屋の段

盛綱は只忙然と。軍慮を帷幕の打傾き。思案の扇からりと捨

詞母人それにおはするかと。音なふ聲に立出る。陣屋のくまぐ

跡先見廻し。母の膝にすり寄て。詞親の役目を子が勤るは順な

れ共。御老躰の母人に。御苦勞お頼み申さねば叶はぬ事。申さ

ぬ先から心得たと有る。御誓言承りたしと。事有げなる願ひの

品。聞ねど道佐々木の後室。打うなづき。詞親子の中に改めて。

頼むと有はよくくの事ならめ。子細はしらねど心得ました。

ハツア早速の御承知忝なし。お頼の子細と申すは。最前の囚人

拙者が爲には甥。母人の爲には孫の小四郎を。今宵の中に母の

お手にかけられてと。聞もあへず。コレ盛綱。詞最前我君よ

りの仰渡され。必小四郎に過さすな。殺すなどの御説ならずや。

「辯舌を以て人を懐くる北條殿」徳川家康に當てたるなり、大阪人士は豊臣氏を懐く、されど徳川の世、之を誹る事を得ず、故に作者往々戯曲をかりて、其憤りをもらす、なほ總解を見よ、

「佐々木四郎左衛門高綱」は真田左衛門幸村に當てたるなり、されど無闇に書くるめしゆゑ注意せざれば、それと知る可からず、總解を見よ、

「是ぞ兄弟弓矢の情」な  
さげなきなきげ、

サア其殺すなと御詫故に。猶以て殺さにやならぬ。辯舌を以て人を懐る北條殿。小四郎を殺すなどの詫意は。生置て人質とし。子を餌に飼て。佐々木四郎左衛門高綱を。味方に付ん謀。鏡にかけて顯はれたり。中々心を變ずべき。弟高綱とは思はね共。いかなる大丈夫も。我子の愛には迷ふならひ。萬が一此謀に陥つて。降參などの心付は。子故に不忠の名を流さん事。残念至極。よしさはなく共小四郎が。擒と成て生有る中は。恩愛といふ大敵に。高綱が弓勢も弱り。双金も自然となまる道理。詞迷ひの種の此小四郎。一時も早く殺して仕廻へば。弟が義心猶々鐵石。是ぞ兄弟弓矢の情。と有て我手にかくる時は。主君北條の命に背く。稚心に此理を辨へ。自身に切腹するならば。我は油斷の誤り計り。詞兄が義も立ち。弟が忠も立つ。双方全き此役目は。御苦勞ながら母人。密に小四郎に腹切せて下されかし

「殺すを却つて情とば云々」  
 戦國の武士氣質、かゝるあはれもありしなるべし。  
 「敵は甥なり味方は我子云々」 盛綱が胸中のせつなさよく見ゆたり、此從兄弟同士組討の趣向は、總解を見れば其より所を知り得べし  
 「修羅の巻」 は戰場の意修羅は梵語、阿修羅の略、闘争を事とするもの、前に解せり、  
 「依怙」 の語は佛典より出で、轉じて俗用の意となれるなりと、法華經に「能爲作依怙」  
 「小の虫を殺して」 諺に小の虫を殺して大の虫を助ける、  
 「子よりも可愛い孫」 世の諺より書く、如何なる姑も孫出来れば、其愛に引かれて、邪見の角を折るとか

現在の甥が命。申し宥めて助るこそ。情共いふべけれ。殺すを却て情とは。情なの武士の有様や。いかなれば。兄弟敵味方と引別れ。今朝の矢合せに敵は甥なり。味方は我子。肉身とにくしんの。劔を合す血汐の瀧。修羅の巷の攻太鼓。胸に磐石ごたゆるつらさ。弓馬の家に生れしふせう。聞分てたへ母人と。事をわけたる物がたり。母は手を打ち尤々。兄のそなたも。弟の高綱も。我子に依怙はなけれ共。隔て居る程不便もまさり。詞有やうはそなたにも。心を置いて居ましたが。弟に不忠の悪名を。付さすまいと左程迄。心づかひの深切。ヲ、忝ないぞや嬉しいぞや。詞世の喩にも。小の虫を殺して大功を立てる事。眞實眞身は子よりも可愛い孫なれ共。思ひ切て切腹させう。ヲ、お出かしたされた。健氣者とは見ゆれ共。稚き小四郎。若小腕に切損なはゞ。母人宜しう御介錯。早短日の暮近し。佐々木兄弟

や、  
 「苗氏」の事に前に解せり、  
 「一腰」をうけて「腰の張弓」とつけ、弓の縁より「銅つがふて」と書けり、且下の「吹通す」「白羽の矢」等の語に利かしたり、つがふはいひかはし約するをいふ、又弓に矢をはむるをいふ、「園城寺」は三井寺のこと、近江國滋賀郡大津町の西にあり、天台宗にして天安二年僧圓珍の開基、寺は山に據り湖水を一望して風光頗るよし、所謂三井の晩鐘は八景の一、  
 「人目せく陣笠」とかけ「まぶかに箒火」とつけたり箒に冠るを含ますせくはふせく、  
 「半弓にやばか仇にはかへらじと」皆縁の語なり、

が苗氏を穢すか。名を上るか。二ツのさかい。涙ばしかけたまふな。詞氣遣ひめさんなおくれはせぬ。必氣強ふ遊ばせと。わたす一腰受取る腰のはり弓に。詞つがふて別れ入。峯吹通す風。早園城寺の鐘諸共。誘はれ来る白羽の矢。紅葉のしげみに射込しは。主を誰共人目せく。陣笠まぶかに箒火が。男出立の半弓に。やはか仇にはかへらじと。陣屋間近くしたひ寄。和田殿の供廻りに紛れ込み。爰迄は忍び入たれど。用心堅き陣屋の木戸口。心を通はす矢文の謎。小四郎が目にかゝれかし。祝ひ祝ふた初陣に。いまはしい繩目の耻。外の手でも有るか。詞從弟同士の小三郎。憎てらしい手柄顔。甥を縛らせ伯父の身で。それが本意か怨しい。どふして居るぞ只一目。見たい逢たい間の戸に。我身をひしと楯板も。通す涙の矢數なり。もれてや奥に聲高く。詞侍中く。夜廻怠り申されなと。女の聲も敵の中

半弓は、大弓の半分ばかりの弓、武用辨略に「此半弓といふも、吾朝の制器にあらず、惣じて中華の弓は半弓の事なり云々、竹或は鯨の鱗色々の制あり、今時所々に於て作るといへども、紀伊の國より出づるを最良とす、于細あり」と見ゆ、やはかはどうしての意、矢をかけたリ「仇にはかへらじ」矢は引きてかへらぬもの、又仇矢といふもあり、此四條坂に忠義の鬼となり給ひて、著者が朝暮餐する小楠公（楠正行）死を決して吉野を辭し給ふ時の詠に「かへらじとかれて思へば梓弓なき數に在る名をぞとどむる」弓矢の縁の歌なり、

「矢文」は軍中などにて矢に結びつけて通はす文「見たい逢たい間の戸」調

胸驚れ篝火は。差足ながら忍び行。障子さつと目早の早瀬。紅葉の矢文拔取つて。詞つくぐ詠め扱こそく。羽響もなき忍びの矢。女業と推量に違はぬ手跡。状の文牀にも有らず。名にしおはば逢坂山のさねかつら。人にしられてくるよしもかな。と古歌を書しは。ム、く。手は見しらねど相嫁の篝火。囚れの小四郎に。此陣屋を拔出。人しらすくるよしもがな。爰は所も近江路や。世に逢坂の關の戸を。明けて逢んとしらせの謎。詞エ、侍の母の様にもない。未練なさもしい。軍に立ば討死は覺悟の前と。立派な小四郎に悪氣を付。若取逃しやなどしたら。其不調法は誰にかゝる。一家の好は生捕ても。命に別條ない様子。知せて安堵さす程に。必爰らに狼狽て。親子一所の繩目を受け。夫の名迄よごしやんなど。恨の裏の反古文。打返したる返事の古歌。矢立の硯さらくと。書認めてくゝり付。内にも

ひとつのへたり  
 「我身なひしと楯板も通す  
 は涙の矢敷なり」 皆縁の  
 語、前の「間の戸」をうけて  
 「楯板」といひ「通す」「矢敷」  
 と書きたり、名句味ふべし  
 「目早の早瀬」 調あり  
 「羽響もなき」 これ力の  
 足らざるゆゑ、これにて女  
 業と推せしはさすが武士の  
 妻、  
 「名にしおはど云々」 三  
 條右大臣定方の歌にて、後  
 撰集戀の三に見ゆ、百人一  
 首にも載せたり、こゝは早  
 瀬の解せしやう心得置くべ  
 し、もとの意は名の如くば  
 逢ふにつけても人に知られ  
 ずして來たきものなりとい  
 ふこと、逢ふを逢阪山とい  
 ひてされかづらとつづけた  
 り、くるはされかづらの縁  
 の語、

人目重藤の。弓打つがひ陣外の。小松にひやうと手ごたへと。  
 俱に立切る障子の内。稚心に油断せぬ。繩付ながら小四郎は。そ  
 つと一間を忍び出。詞今おは様の讀しやつた。矢文の手は母様  
 爰を抜けて戻れとの。しらせは聞ても敵の中。見とがめられて  
 は耻のはぢ。とはいへ母さまどこにござる。死共ちよつと顔  
 見たやと。そりりくとぬきあしも。危き毒蛇の陣の口。あは  
 や跡より窺ふ微妙。小四郎待ちやと聲に恟り。ア、イ。どつこ  
 へもいきや致しませぬ。御赦されてと計りにて。わななくふる  
 ふ有様を。つくく見れば見るに付け。同じ佐々木の血筋でも。  
 扱も果報の拙い子や。囚人の身と成たれば。子心にも氣おくれ  
 して。身すばらしい顔形。今宵限りの命とは。言ねど虫が知す  
 かと。思へばそゞろ先立つ涙。胸に押さげ撫おろし。詞ヤレ孫  
 よ爰へおじや。コレそなたのばゞじやわいの。器量骨柄揃ふた

「愛も所は近(逢)江路や」とかけ「世に逢阪の關の戸云々」とつづけたり、前の歌をうけて書き、逢がたき所を越はて逢はんといふ意、枕草紙(後拾遺集にも)に清少納言「夜をこめて鶉の空鳴はよかるともよに逢阪の關はゆるさじ」これによれり、逢阪は近江の滋賀郡にありて昔京より東へ通する要路、關所を置けり、今は壁道にて通す、  
 「恨の裏の反古文打返したる返事の古歌」矢文の裏へ返歌を認むるをいふ、縁の語にてよく書きたり、注意して味ふべし、  
 「矢立」はもと軍陣にて船の中に入れて携ふる硯にて、今の懐中硯の類、轉じて旅行などに携ふる墨具をいふ、盛衰記に「矢立の硯」

子に。いたくしい此繩目。といてそなたに此ばぐが。言聞す事有と。立寄ほどく血筋の繩。子ゆるるに引れ篝火が。又立戻る陣屋のまへ。詞矢文の返事は嫂の早瀬の手跡。行も歸るも別れては。しるもしらぬも逢坂の。關とは時節を待てとの事か。いかにと見やる戸の透間。微妙は孫の手を引て。一間の障子押開き。詞ノウ小四郎。高綱に別れてから。十三年の年月。孫有りとは聞た計り。なつかしさ逢たさは。膝元で育つた小三郎より顔見ぬそなたの不便是百倍。殊更長の浪人の。貧しい中に育られ。武具迄も嘸不自由に。口惜しう暮しつらんと。思ひやる程片時も。忘るゝ隙はなけれ共。詞思ふに任せぬ敵味方。此上下はばぐがそなたへ引出物。着てたもやいのと差出せば。何心なく押いたぐき。取上げて不審顔。詞申しばぐ様。此上下にはなぜ紋がござりませぬ。九寸五分が添て有るは。高名手柄せよ

を取寄せて宇治川の先陣を云々」など、軍記物に「矢立の硯」といへる、所々に見わたるを、略して矢立のみ、いひならはせるなるべしと、

「人目重藤」 とかけたり重藤は藤をしげく巻きたる弓巻敷に三品ある由、貞丈雜記に見ゆ、又村重藤、本重藤、末重藤など、種々の名目、武用辨略に見たり「俱に立切る障子」とかけたり、

「危き毒蛇の陣の口」 危険の状よく見たり、佛典に毒蛇の口などいふ語多し「同じ佐々木の血筋でも」現在に見くらべる、小三郎と小四郎、さもあるべし「今宵限りの命」 古里に今宵限りの命とも知らでや人のわれを待つらん

と有る。首搔刀でも有まい。こりや私に腹切との。死装束でござりますなど。悟る利發に驚く篝火。微妙はがはと泣例れ。暫し詞もなかりしが。詞ヲ、道は親の子程有る人に勝れて其様に。聞分よい程助けたさは。胸一ばいにせまれ共。殺さにやどふもならぬといふは。父親の高綱が。武勇智謀の勝れたが。そなたの身の仇敵。助けよと有る此條殿は。子を入質に高綱を。降参さする謀。それまでは殺しもせず。まして助けて歸しもせず。いつ迄も陣中に。捕へて置との主命。生て居る程。高綱が武勇の妨。爰の道理を聞分けて。潔う腹切つてたも。エ、見れば見る程目付なら鼻筋なら。眉に一ツの黒子迄。父親に此似よふ。智慧才覺迄違はぬ物。生長も見ずむざくと。苔の花をちらすかと。老の諄涙の齷。もれて外面に聞く嫁の。何ぼ道理は道理でも。餘り氣づよいお袋様。我子は殺さぬくと。延上れ共蘆垣

「血筋の繩子ゆゑに引かれ  
筋火が」縁の語にてよく  
書きたり、筋にかゝりをか  
けたるならん、  
「行くもかへるも云々」

此歌は蟬丸として後撰集に  
見ゆ、百人一首にも載せた  
りこゝの意は、謎なれば、筋  
火の解せしやう心得置くべ  
し即ち「別れては又逢ふ時  
節を待て」といふ意、蟬丸の  
傳は、諸説ありて一定せざ  
るが、此歌を詠める蟬丸は  
世俗のいふ如く盲人ならぬ  
は、詞書に「逢阪の關に庵  
室を作りて住みはべりける  
に、行きかふ人を見て」と  
あるにても明かなり、歌の  
意も、知る人も知らぬ人も  
往來に逢つゝ別れつゝする  
は、此逢阪の關なりといへ  
るなり、巧にあやなせる歌  
なれば、歌學なきものがお

の。隔つる中ぞ是非もなき。母の心の通じてや。小四郎おとな  
しく手をつかへ。詞私が命一ツで。とゝ様や伯父様の。手柄に  
成る事なら。何の惜みは致しませぬ。尤腹の切様も稽古して置  
だれば。切損ひもせまいけれど。私が一つの願ひ。昨日軍の初  
陣に。直に敵へ生捕られ。此儘死ぬるは弓矢神の。冥加にも盡  
たかと。何ぼう悲しい口惜しい。どふぞ最一度お歸しなされ。  
とゝ様かゝ様にたつた一目逢た上。せめて雑兵の首一つ取て。  
立派に死で見せませふ。此お願ひを。詞ア、是なふ。賢い様で  
も遣は子供。預りの囚人敵へ歸して。盛綱が武士が立物か。と  
ゝやかゝに逢される程なれば。此憂目はないわいの。とはいふ  
物の逢たいは道理じやはいの。尤じや。世が世の時なら二人の  
孫。右と左に月花と。ならべて置いて老の樂しみ。此上も有まい  
に。生捕も孫。捕れるも孫。小三郎が手柄したと。仰立る眞中

しあてに、盲人のやうに解せしなるべし、又宇治拾遺の説より盲人とせるか、事長ければ後にいふべし、「勝元で育つた小三郎より云々」 いづれに依怙はなけれども、離れ居る者のあゆきは人情。

「引出物」 は對面などの時贈る贈物、もと饗宴などの終りに、馬を引出して客に、贈れるよりの稱。「腹切れとの死装束云々」無紋の上下に九寸五分、切腹とさるとは、武士の子「肩に一つの瘰癧まで」讀者をして共に泣かしむ、「母をお袋」といふ事前に解せり、「延上れども芦垣の隔つる中云々」續古今集に「芦垣の間近き甲斐もなかりけり心かよはぬ中の隔てに」

へ。縛られて引出されし。顔見た時のばぐが胸は。はり裂様に有しぞや。詞連も甲斐ないそなたの運。最期が未練に有たなど。口の端にかけられては。親高綱が弓矢の名をれ。尋常に死でたも。ヤ、介錯は此ばぐ。可愛い孫を先立て。いつ迄因果の恥さらそふぞ。ばぐも直に自害して。三途の川を手を引いて。渡るわいのと抱しめ。なくく、劍差付れば。只二親に逢ふ迄は。赦して下さればぐ様と。未練も親子の恩愛に。道理といとぐ目もうろく。孫もうろく。透有らば。逃んと見やる木戸口の。爰にと母の呼子鳥。ヤアかゝ様かと飛立つ計り。かけ出す孫を引留めて。せき立つ老母の聲あらゝか。詞エ、未練者卑怯者。扱は母親と内通して。爰を抜けて出る心じやな。それならば猶助けられぬ。望の通り親にも一目逢したれば。サアく切腹。但ばぐが手にかけふか。サア夫は。サアく何と。おどしに

以て文の妙と作者の力とを  
知るべし、声に足をかけた  
り、

「腹の切様」 よくも知ら  
れど、昔主君より切腹仰付  
らるゝ時、賜はる九寸五分  
に、眞劔と木劔とあり、木  
劔は只腹を切る眞似をする  
のみにて、介錯首を落す、眞  
劔といへども、つゝみて先  
を少し出し、腹に筋を立つ  
るまでなりと、

「弓矢神」 は軍神の事、前  
に眞文雜記を引けり、軍用  
記に「軍神は、天照太 神、  
経津主神、健甕神、大物主  
神（大己貴の神といふ同體  
なり）事代主神、神武天皇、  
日本武尊、神功皇后、八幡  
太神なり、これ皆日本の軍  
神なり、摩利支天、不動明  
王、十二神將などの類は、  
天竺の神なり、佛法にある

抜いて振上げる。劔の下に手を合せ。かゝ様の聲聞てから。一  
倍命が惜成つた。どふぞ助けてお情じや。堪忍して下さりませ。

アレイくと逃廻り。おくれる孫に猶氣おくれ。詞ヤレ最前の

健氣な覺悟忘れしか。逆も叶はぬ期に成つて。臆病者の名を取

かや。伯父が見ぬ先自害して。立派な最期と譽られてくれ。ば

ゝが方から手を合せ。頼むといへど逃まどふ。外にはむごやつ

れなやと。恨は三方三悪道。前生の敵同士が。いとしかあいの

孫や子に。生れて憂目を見するかと。老婆がしんみの血の涙。

時雨の中の枯紅葉。露より先にちりぬらん。折からさつと山風

の。遙に陣鐘攻太鼓。事こそ有れと早足の早瀬。長刀かい込み

走出で。木戸押開けばかけ入る筋火。詞待つたく。高綱のおか

もじこりやどこへ。知れた事。我子の小四郎取返す。ならぬく。

相嫁の初見參。長刀に乗りたいか。イヤ推參なときしみあふ。眞

事なり」と見ゆ、取分け弓矢八幡などいひて、八幡太神最もあらはる、九萬八千の軍神などいへるは、俗説なりとぞ、

「雜兵の首一つ取つて」武士の子、これをいふべし」とはいふもの、違ひたいは云々、これ無理なる願ひにして尤もなる道理、世の世の時なら二人の孫云々、これ此上なき老の樂み、かゝる場合にくり言の第一、生捕るも孫捕れるも孫云々、一喜一憂を眼前に見る、老母の胸中如何、ばいも直に自害して、此覺悟出でざる可からず、三途の川は冥途にありといふ川、前に解せり、  
「こゝれと母の呼子鳥」とかけたれ、妹背山に「覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の

中に三郎兵衛。小四郎小腕にひんだかへ。詞石山の御陣所に事

有ると覺るぞ。ヤア、小三郎は何國に有る。ハア則只今御加

勢と。用意の小具足甲の緒。しむる間遅しとかけ出す。引違へ

てしらせの軍卒馳參じ。詞時政公の計略の如く。佐々木四郎左

衛門高綱。我子を取れし憤り。今宵自身に馬を出し。手勢漸二

千餘騎。鎌倉の惣大將時政公に。直見參仕らんと。死物狂ひの

其有様。鬼神のごとく見へ候。併味方は豫ての用意。大將の陣

は數萬の警固。盛綱公には氣づかいなく。擒の悴を守護有るべ

しとの御事也。猶追々に御注進と。申し捨てぞかけり行。三郎

兵衛大息つぎ。詞ハ、アなむ三寶しなしたり。さしもぬからぬ

弟高綱。子故の闇に心くらみ。謀に陥たるな。摩利支天なれば

とて。數萬騎の其中へ。一騎がけの死軍。討死せん事眼前たり。此上は親の御慈悲。佛間で御回向なされかし。盛綱。母人。エ、

月に「母などの子を呼ぶにかけて、よく用ひたり、呼子鳥は深山に棲み、形ハイタカに似て大き鳩の如く其聲人を呼ぶに似たりと、  
 「飯の下に手を合せ」 豈下す事を得んや「後れる孫になほ氣おくれ」豈後れざるを得んや、木下隆英間合戦に「孫と祖父とが初見参、産着の一重もくれもせず、邪見にふりし刀の下、さぞなぞろしき夢や見ん」  
 「ばどの方から手を合す」 剛き心の張弓も、情に折れし状、あはれなり、  
 「恨は三方三悪道」 調なとムのふ、三方は三方に栗形あるゆゑの稱、四方といふもあり、三悪道は餓鬼、畜生、地獄の三道、  
 「時雨の中の枯紅葉」 血くひひたり「時雨」の語「血

力なき武運の末。残念さよと計りにて。眼を閉ぢて奥に入る。箒火猶も氣はそゞろ。我子も氣遣ひ夫もいかゞ。千々に碎くる軍の破れ。ゑいゝおふと勝負は。敵か味方か二人の妻。胸の陣鐘足も空。二度の注進勇の大音。詞御悦び候へ。軍は十分味方の勝利。大軍に取圍まれ。集り勢の高綱方。途を失ふて逸走るを。或は搔首或は射取。残る兵さんぐに追まくり。諸葛孔明と呼ばれたる。四郎左衛門高綱を。榛谷十郎が討留て候と。聞より妻はハアはつと。心散亂もえ立つ箒火。夫の首は渡さじと。行をやらじと止むる早瀬。詞大將軍時政公。御成ぞふと呼はる聲。ハアはつと早瀬は大將の。御座のもふけと走入る。龍の雲に沖がごとく。一陽の春を待つ平時政。近習の武士古郡新左衛門。佐々木小三郎盛清。御供に扈從して。御召かへの鎧櫃。御座の次に飾らせて。寛然と入たまへば。三郎兵衛母微妙。敬ひ請じ

の涙」をうけ「枯紅葉」の語「老母」血の涙に應ず、「折からさつと山風の」前の「枯紅葉露より云々」をうけて書く、文の注意を見る「おかもじ」はおかみさま、何文字といふは、婦人の語なる事、前に解せり「ぎしめあふ」はよげみ争ひ合ふこと、「石山」は近江國滋賀郡にあり、天平勝寶年中良辨僧正の開基、紫式部こゝにて源氏物語を書けり、といへるを以て名高し、「小具足」は具足の胴のみを着ずして、他のすべてをつけたる出立、「南無三寶」は失敗などの時發する語、南無は梵語念じ頼む意、三寶は佛法僧、三寶を念じ頼む意より來れるなるべし、

奉る。竹の下の孫八。あはたぐ敷罷り出。詞最前和田兵衛秀盛御陣所へ参りし所。日比好める酒をしいて酔ふさせ。居間の四方に金網をかけたれば。籠の鳥同前と。思の外のしれ者。隠し火矢を以て屋根を打抜き。御座の間の白旗を奪ひ取り立退いて候ふと。言上すれば時政公。詞ハ、ハ。敵の軍中へ鎧も着せず只一人。踏込む程の不敵者。汝等が手に合ふべきか。第一の大敵。佐々木四郎左衛門を討取つたれば。腹心の害は拂ふたり。去ながら此佐々木。古への將門に習らひ。一人ならず二人三人の影武者有つて。いづれを是と見わけがたし。誠の佐々木か贋首か。弟が首よも見損はずまじ。兄盛綱實檢せよと。仰の下に新左衛門。首桶御前に直し置く。三郎兵衛承り。大將に一禮し。無慙の弟が死首に。是非もなき對面やと。呑込む涙後より。父の死顔拜まんと。窺ふ小四郎盛綱が。引明ける首桶の。二目共

「しなしたり」 ばしまつ

「闇くらみ」 相うく

「摩利支天」 ば武勇の神

軍神として武士之を祠り  
角力取亦之を念す。前に

へり、

「佛間で御回向云々」 武

家のならひ、あはれにもい

たはし、

「砕く」破れ」 相應す

「胸の陣鐘足も空」 胸と

きつきて、心うばなるさま

よくいひたり、

「諸葛孔明」 ば支那の三

國の時、蜀帝劉備(字徳)に

仕へて、柱石の臣たり、智

謀ありて兵術に精しく、彼

れが盡せし八陣の法の如き

は、兵家の尊重する所なり

孔明出で、蜀盛へ、孔明死

して蜀衰ふ、川柳に「孔明を

もう二三冊いかしたい、

見もわかず。詞と、様嚙口惜かる。わしも跡から追付と。氷の

刀雪の肌、腹にくつと突立つる。詞ヤレ母人お留なされ。何故

の切腹子細をいへ。様子はいかにと。人々あはて介抱に。小四郎

きつと目を見開き。詞何故死ぬとは伯父様共覺えぬ。卑怯未練

も。と、様に逢たさ。父を先立何まだくと。生恥さらさん。

親子一所に討死して。武士の自害の手下を見せると。きり、

くと引廻す。其手に縋り母微妙。ノウ其立派な心をしらす。

呵つたば、が面目ない。こらへてたもと右左。目をしばた、く

三郎兵衛。猶豫はいかに早實檢。何とくと御錠意に。疵口拭

ひ耳際迄。とつくと改め故實を守り。謹んで兩手に捧げ。詞矢

疵に面躰損じたれ共。弟佐々木高綱が首。相違御座なく候と。

御前に直し押下れば。詞ホ、ウ骨肉の兄が實檢と云。首に向つ

て小四郎が恩愛の涙。切腹の有様。誠の首の證據明白。思へば

「横谷十郎」は秩父重忠の臣、兜軍記にはよき役廻りをつけられたれど、此作には割のわるきものとされり、

「心散亂燃立つ箭火」よくいひたり、

「はつと早瀬」調あり

「龍の雲に沖る如く」は雲に上るが如くの意に見てよし、勢の盛なるをいふ、

龍は雲を得てはじめて其靈を逞ふすと、易に「雲從龍」

「一陽の春を待つ」一陽來復して、冬去り春の來るを待つこと、樂ゆる時節をまつをいふ、家康の心を「鳴かなけりや鳴くまで待たうほとよぎす」此心にて天下を取りしなり、

「扈從」は從ひ供すること、

「和田兵衛」は後藤又兵衛

昨日は此首に。後を見せし時政が。今手の下に誅罰する。我武

運の強さ。ハ、ア心地よや嬉しやな。今といふ今時政が。初て

枕を安く寐るは盛綱が働。我着がへの鎧一領。當座の褒美に残

し置く。小三郎其外には陣中にて。勝軍の恩賞せん。皆萬歳を唱

へよと。悦喜の粧ひ傍を拂ひ。本陣さして歸陣存る。盛綱傍をと

つくと見廻し。詞佐々木高綱が妻箭火。計略の質首任課たれば

小四郎に最期の暇乞。赦す是へと一言を。聞く間遅しと轉び出

我子にひしと抱付き。わつと泣より外ぞなき。なみだながら母

微妙。詞質首と知つて。大將へ渡したそなたは。京方へ味方す

る心底か。イ、ヤいつかな心は變ぜねど。高綱夫婦が是程迄仕

込だ計略。父が爲に命を捨る幼少の小四郎が。あんまり神妙健

氣さに。不忠と知つて大將を欺しは弟への志。彼が心を察するに。高綱生て有る中は。鎌倉方に油断せず。一旦討死せしと偽

衛に當てたる事前にいへり  
總解を見よ、

「隠し火矢」は短銃の類

と心得てよし、火矢はもと  
箭に火を仕掛けて、射るよ

りの稱なるが、後には火薬  
を仕掛けて發する、火器の

名となる、石火箭、棒火箭  
炮、炮火箭等、異形別名様々

なる由、武用辨略に見ゆ  
「腹心の害」は第一の害

をいふ、

「古への將門に習ひ云々」

將門は、朱雀天皇天慶中、  
非望を抱きて、偽宮を下總

の猿島に立て、新皇と稱せ  
し逆賊、俗説に、將門幻術

をよくし、常住坐臥七人に  
見ゆ、倭藤太秀郷、これを討

たんとして眞偽を辨せず、  
侍女に問ひ、中に願願の動

く者の、將門なるを知り、  
之をもとめて殺す事を得た

つて。山奥にも姿を隠し。不意を討んず謀。然れ共底深き北條

殿。一應の身替は中々喰ぬ大將。そこを計つて。一子小四郎を

うまくと此方へ。生捕せしが術の根組。最前の首實檢。質首

を見て父上よと。誠しやかな愁歎の有様に。大地も見ぬく時政

の。眼力をくらませしは。教も教たり。覺えも覺えし親子が才

智。みすく質首とは思へ共。箇程思ひ込だ小四郎に。何と犬

死がさせられふ。主人を歎く不調法。申し譯は腹一つと。極た

覺悟も負た子に教られ。淺瀨を渡る此佐々木。甥が忠義にくら

べては伯父が此腹。百千切てもかけ合がたき最期の大功。そちが

命は京鎌倉の運定。出かしたな。出かしたと手負の顔を。打守

りく。悲歎の涙にくれければ。箆火いとくかきくれて。子を

譽られる親の身の。悦ぶは常なれど。生て高名手柄して。今の

仰に預らば。何ぼう嬉しかるべきに。年相應より利發なが。生

り、  
 「無慙」はむごき、もと  
 慙なき意より轉ぜるなりと  
 「と、襟口惜しむる」と  
 小四郎を自殺せしめたる趣  
 向の本は、眞田の僞首にむ  
 かひ、御宿勤兵衛が自殺せ  
 しゆゑ、家康眞事の首と思  
 へりと、いへるに取れるな  
 るべし、總解を見よ、  
 「水の刃雪の肌」 相對す  
 「何まだくと」 はいつ  
 までもの意、  
 「武士の自害の」云々 け  
 なげにもなくし「阿つたは  
 いが云々」さもあるべし、  
 「疵口拭ひ耳際迄云々」首  
 實檢の作法は、軍用記など  
 に見ゆたり、  
 「思へば昨日此首に云々」  
 懼れしさま悦びのさま、よ  
 く見ゆたり、家康眞田の  
 爲めに苦められ、逃げまば

付いた此子が因果。いかに武士の習ひじや逆。かうくして自  
 害せいと。教る親の胸慾さ。かあいや初陣の初から。死に行く  
 事合點して。詞おりや侍の子じやによつて。討死するは嬉しいけ  
 れど。死だらと様やかゝ様に。つい逢ふ事が成まいかと。夫ば  
 つかりがと言さして。泣顔見せずいさんで行し其立派さ。天晴  
 弓矢打物迄。誰におとらぬ物覚え。腹切る事迄是程に。器用に  
 なくば何事ぞ。コレなふ小四郎くと。手負の耳に口差寄せ。  
 詞此深手じや物。耳も遠なる。目も見えまい今伯父様のおつし  
 やつた事聞取やつたか。そなたの命捨たので。高綱殿の忠義が  
 立と。ほうびのお詞。それを未來の引導に。迷はずと佛に成て  
 たもと。いひ聞すれば嬉しげに。詞そんならわしが死るので。  
 と、様の軍が勝に成るか。エ、忝ない。ば、様はどこにぞ。わ  
 しゃ縛られても卑怯じやないぞへ。それで死でも本望じや。伯

りしゆえ、其首を獲たる時  
 大いに悦び、首實檢の時  
 恐れてふるひしといふ、こ  
 れより書けるなるべし、總  
 解を見よ、  
 「皆萬歳を唱へよ」 威風  
 見るべし、萬歳の語、今と  
 同じく、日出たき時に唱へ  
 しなり、  
 「計略の聲首仕課せれば  
 云々」 篝火が驚きと悲し  
 み、おもひやらる、  
 「彼れが心を察するに云々」  
 盛綱よく察したり、首實檢  
 の時小四郎の舉動を見て、  
 直にそれと悟れる所、頗る  
 よし、  
 「二塵の」 は一通りの  
 「教へも教へたり云々」こ  
 れ盛綱が大地を見ゆきし眼  
 力、  
 「何と大死がさせられう」  
 此場合、誰れも此心あるべ

父様をば様ばゞ様にもかゞ様にも。逢て死るは嬉しいが。たつた  
 一ツ悲しいは。とゞ様にくと。跡は得言す舌こぼゞり。次第  
 くによわり果。惜や季の初花も。無常の風にちりて行く。コ  
 レなふ小四郎孫やい。今はの際に父親を。尋ねて死だ子の心。  
 思ひやつて只一目。なぜ顔見せに來てくれぬ。千騎萬騎の大將  
 にも。成べき物を梅檀の。二葉で枯せし胸慾は。神も佛もなき  
 世かと。歎く微妙の聲限り。涙の早瀬篝火も。消る計りの思ひ  
 也。三郎兵衛泣目を拂ひ。詞ハア歎きに紛れおくれたり。實檢  
 を仕損じたる。鎌倉への申し譯。母人さらばと。指添に手をか  
 くれば。詞ヤアく盛綱。和田兵衛秀盛是に有り。敵を見かけ  
 て自害とは。臆したるかと聲かけられ。シヤ幸のよき敵。歸ら  
 ば其儘かへさんに。運つきたる秀盛。迹しはせじとつゝ立てば  
 詞チ、和田兵衛が習ひ得し。南蠻流の懷鐵炮。受て見よとどう

し、況んや肉親に於てなや  
 「主人を敬く不羈法云々」  
 主人と肉親との板挟み、か  
 る場合の武士の義、身を  
 ずて、爰に出ざる可からず  
 「眞た子に教へられ云々」  
 己れより幼なき者又淺とき  
 者に教へらるゝないふ諺  
 「なさあひないつもうしろ  
 に預られて淺瀬をしぶる河  
 はたのもの」  
 「甥か忠義にくらべては云  
 々」これ忠これ孝、何人  
 も及ぶべからず、如何なる  
 讞辭も足らざるを覺ゆ、  
 「篝火いとどかきくれて」  
 よくいひたり、  
 「子をほめられ親の身の  
 云々」 簀次の歎き身にこ  
 たへたり「如何に武士の習  
 ひじやとて」腹切る事まで  
 これ程に「此深手じやも  
 の云々」それを未來の引導

と打つ。ねらひはそれで鎧櫃。内に忍びし榛谷十郎。太腹射抜  
 れのた打たり。詞見よや盛綱。底の底迄疑ひ深き。北條の隠し  
 目附。汝が手にかけざれば。不忠にあらず彼めが不運。今又御  
 邊自害せば。鎌倉への義は立つべきが。佐々木が首は贖物なり  
 と。忽露顯し是迄も。碎し心は水の泡。時を待つて佐々木高綱  
 誠は爰にと切つて出る其時に。潔く切腹せば。忠も立ち義も全  
 し。腹の切様早い。ハ、ア實に誤つたり我命。暫く生るは  
 弟へ。是も情の一ツには。甥への寸志追善供養。詞野送り萬事  
 も一家の内證。諸事何事も此座切。表は京方鎌倉方。右大臣  
 實朝の。御座の白旗奪取しは。軍の吉左右重て再會。留て見ぬか  
 と出て行く。詞ヤア盛綱が陣中にて。味方の武士を討たる曲者  
 返せ戻せは弓矢の儀式。ちなみは兄嫁小姑。孫よ甥子の亡骸に。  
 うき事三井の晩の鐘。消え行く子より親心。我からさきの夜の

に「悲風慘備讀むにたへず

「打物」は刀劍の類、

「そんならわしが死ぬるの

で云々」何たる健氣ぞわ

しや縛られても卑怯じやな

いぞへ」此一語、如何に老

母の耳に響きしならん、さきに卑怯といはれたを、稚な心に氣にかけて、今はのきはに言譯する、武士氣質のいちらしさ、覺ゆず落涙した

り、

「と、嫌に／＼と」何たるあはれぞ、四人の身ふしも碎げん、

「なぜ顔見せに來てくれぬ千騎萬騎の云々」尤なる緩言、

「梅檀の二葉で枯らせし」梅檀は二葉より香しといふ語より書く、梅檀は印度の香樹にして、赤白紫の別あり、萌芽の中より香氣高しと、

以て勝れたる者の、をさなき時よりあらはるゝにたとふ、

「微妙の聲限り、涙の早瀬、箭火も、消ゆる計りの思ひ」皆縁の語をあやなして書きたり、何たる妙句ぞ深く味ふべし、

「敵を見かけて云々」和田兵衛、うまく自殺をとめたり、

「南蠻流」といふは、我が見たる一二の書には見當られど、鐵炮はもと南蠻より傳へしものなれば、此流名ありしなるべし、伊賀越にも

「見たり、

「懷鐵炮」は今のピストルの類、前の「隠し火箭」なるべし、

「底の底三深き」隠し

「今又御邊自害せば云々」和田兵衛の言尤も至極、中々思慮あるを見る、盛綱血迷ふたり、赤面の至り、

「甥への寸志、浪善供養」の語、味ひあり、

「右大臣實朝」は二代將軍秀忠にでも當てたるが、鎌倉の名をかりたるより、自然書き出せるやう思はる、實朝は頼朝の子頼家の弟、

「憂き事三（見）井の晩の鐘」とかけ「消は行く云々」とつづけたり、句宮商の響、三井の晩鐘は八景の一、さても寂滅爲樂、

「我からさきに夜の雨」とかけたり、語金玉の音、唐崎の夜雨も八景の一、

雨。父には一目粟津の嵐。木の葉の紅葉かきよせて。夕部を照す勢田の橋。門火は狼煙敵味方。さらばとばかり。三重別れ行く。

母の耳に響きしならん、さきに卑怯といはれたを、稚な心に氣にかけて、今はのきはに言譯する、武士氣質のいちらしさ、覺ゆず落涙したり、

「父には一目粟(達)津の嵐」とかけたり、句鸞風の聲、粟津の晴嵐も八景の一、嵐をうけて、「木の葉の云々」とつゞけたり、  
「夕を照す勢田の橋」 勢田の夕照も八景の一、相國寺林長老の詩に「沙鳥風帆帶夕陽、夕陽人影與橋長、勢田曝網東山月、一色江天南景  
光」滋賀郡にありて、大小の二橋古來有名なり、  
「門火は狼煙敵味方」 面白し、門火は薙を送る時、門にたく火、

# 近江源氏先陣館 船長の段

## 總 解

此段。船長の事は。新將軍秀忠。牧方堤ひらかたにて眞田が地雷の計略にかゝり。九死一生の場合。唐崎平六といへる者の船に助けられ。其褒美として。大阪より伏見へ通ふ。過書船の特權を許されたりといふ事を趣向の本として作れるなるべし。町人なれば褒美には云々と書けるもおもひ合さる。又時政でないありやにせ者云々。天の助けは人力の云々などしるせるは家康陣廻りの節。南光坊といへる僧を影武者として。先に立たせ。跡よりつゞきしに。眞田運氣を見て。前なるは影武者なりとて。これを通し。次に來れるを。これ眞事の家康なりとて。壹貫目筒を切つて放せしに。柳の枝にさはりて玉下り。袋の鼠をのがしたれば。さても運の盛なる事かなと

て。殘念がりしといへるに。おもひつけるなるべく。なほ家康眞田の爲めに。屢裸武者にせられて。追まくられし事など。左に載する所を讀まば。其大要を知り得べし(他段の總解をも參照せよ) 厭蝕太平樂記 時に眞田幸村は大助を呼んで。明日新將軍牧方へ來りなん。其方云々。竹筒十本を取出し。これ地雷の法を以てこしらへ置きたり。これを牧方の東西の堤へ埋み。目印を付置き。先將通り過ぎて。籟本と見るならば。其印に鐵砲をうつべし云々。新將軍前後の火に恐れて。御供の面々。右往左往になりければ。逃げんとて。湖端へ出で。浪寄せの杵に取付給へども。浪荒く打寄せ。進退窮まりて。今はこれ迄と。既に上帶解かせ給ひ。御腹召されんとあるを。安藤次右衛門走り來り。これはいひ甲斐なき御事と。御介抱申上げて。川岸に傳ひ逃げんと。身をもむ所へ。唐崎平六小船に乗つて。此體を詠め居る。安藤これ幸ひと。手を上げて招き。大將を乗

せ。其身も乗て向ふの岸へ行く。其方が住居は何國ぞと問へば。則ち唐崎村にて候といふ。暫く此御方を入れまるらせ。御介抱申し上げよと頼みける。則ち御供申し。己が家に入れ奉り。色々饗應し奉り。大將漸く人心地付給ひ。次右衛門は又船に乗つて。こなたの岸に着し。大將の御安泰を知らせける云々。かくて大將御喜悅あり。平六を召され。其方今日の働き。平均の後褒美は望次第と。御自筆にて下されける。其後平六。右之書を以て言上に及ぶ。御老中皆々一見して。褒美望次第とは。過分の事なりといへども。大將の御自筆にて候へば。すべきやうなく。望みを申すべしと有ければ。平六。大阪より伏見迄の通船。御免下さるべしと願ふ。早速御免下され。望次第とは書過ぎたる心を以て。過書船と名を給はり。今大阪に通用する。天とうこれなり。其會所立ちし處を過書町といふ。今は大川町にあり。平六御免船といふて。三百石の領地を賜はり。孫

々までも繁昌する事。今の人知る所なり。  
厭蝕太平樂記 明廿二日。神君は危きを遁れ給ひ。我れ常々に幸村  
を恐れしが。彼の名城にあつては。何萬騎にて攻むるとも云々。同  
二十四日。御陣廻りあるべしと。南光坊御影武者となつて云々。扱  
城内にも此事を聞きて。淀殿秀頼公にも。順覽あるべしとて云々。  
幸村早朝より。遠目鏡を以て遙に詠め居たりしが。運氣を見て則  
ち幸村申しけるは。追付け御陣廻りに御座候。御見物成さるべし  
と申し上る。早先陣押し來る。御母公秀頼公御見物なり。諸將申し  
けるは。あの大将は家康公なり。天下分目の一放と。大筒に玉を込  
めんとしければ。幸村曰く。いや。此者は木火土金水の氣を離  
れ。色なし形なし。定めてこれは影武者の出家なるべし。大事の一  
つ放し。坊主など討つて何かせんと申す時。跡より公來り給ふ。運  
氣を見てこれへ黃氣立つ。これこそは家康公なれ。惣じて天下國

土の主は。地の主ゆる。黄氣立ちて天を覆ふ。消すべし御覽ぜよ。敵の先へ行く影武者。跡よ先よと。うろたへさすべしとて。壹貫目筒に玉を込め。今や〜と待居たり。時に公御馬にて。諸大名の陣々順覽あつて。長柄にて御父子御對面あるべしと云々。土手のはづれに出給ふ。時に幸村は。壹貫目筒膝臺にて打かけ。間に柳の枝のありけるに障りて。少し玉下りければ。鎧の下を打抜いて。馬の腹さけて倒れ。今杉主殿大野彌八みぢんになり。公は横に落給ひて。危きを遁れ給ふ。眞田これを見て。扱も残念千萬なり。此度も又遁したり。黄氣いまだ消えず。さて〜運の盛なる事なり云々。

厭蝕太平樂記 二十五日早朝。茶臼山よりわざと住吉の方へ。御乗物にて出給ふ。尤も同様の乗物三挺。籬本三百人。前後を守つて靜に行く所に。小妻の伏兵ども関を作り。六文錢の旗をひらめかし。眞田左衛門佐幸村これにあり。尋常に勝負あれと呼はりければ。

すはや伏兵こはいかにと。うろたへまはり防がんとする者なく。其間にとつと攻寄せて討つてかゝる。三番目の乗物より。大久保彦左衛門飛んで出。家來に持せし鎧おつとり。おめいてかゝる。幸村馬上より合せしか。如何思ひけん乘違へ引退く。大久保いつく迄もと。鎧をふるふて追つかくる。御旗本の人數跡につゞいて走り行く。眞田と見えしは根津甚八。敵の勢を分けん爲めの計略なれば。住吉の濱邊へ一さんに退き。用意の船に乗つて。八十島がくれに引ける。住吉には伊達政宗。陣を取つて居られしが。関の聲に驚き。勢を引て出向へば。公の御陣廻りにて。後に眞田伏兵をかまへたりと聞いて。先づこれを追拂はんと。我もくと馳せいでる。籬本の面々も。半防ぎ半御供して。曾根崎の方へ廻らせ給ふ。此時大將の御陣廻り。一向沙汰なしの事ゆる。御味方にも知る者なし。されば眞田は思ふまゝに謀りおふせ。曾根崎の森にて。兩方より

伏兵一度に起り。幸村これにありとて。前後を防ぎ討つてかゝる。いづれも大にうろたへ。是非なく命を捨て、防ぎ戦ひける。望月川崎眞田。同様の出立にて鎧をふるひ。さんぐに突立ければ。討たるゝ者數を知らず。御旗本五六十人ばかり疵を蒙り。又は討死をとげたり。其時二挺の乗物を守護し。中の島へ御供する處。又もや穴山林が兩勢あらはれ。幸村先刻よりこゝに待受申すなり。逃れぬ所なり。腹を召され候へやと呼はりて。無二無三に掛りければ。今は御旗本すべきやうなく。あきれはてゝ。六尺共も。乗物をすてゝ逃さりける。眞田勢乗物にかゝらんとする所。一挺の乗物より。本田出雲守忠朝これにあり。眞田覺悟せよと切つてかゝる。忠朝は太刀なり。穴山は得たりと。鎧を合せて暫く戦ひしが。南の方へ三段ばかり退きける。逃さじと追ひかくる。其隙に御旗本は林を防ぎ。討死して公を助け奉る。酒井雅樂頭一人になつて。御手を

取つて大道村へと逃入りける。誠に五人の伏兵。いづれも同様の装束にて。眞田と名乗しゆる。さしもの御旗本。これを恐れ。こゝに於て側につき添ふものなく。眞田が計略圖に當り。大將を裸武者となしける。酒井大道村へ御供したり。眞田幸村はこれをはるかに見て。家來に道をさへぎらせ。九尺の鎧を取つて。馬を飛ばし馳ける。公ふるひ恐れて。酒井諸共傍の小家に逃込み給ひて。暫く影を隠してくれよと仰せられければ。此家の主左平次は心よく呑込んで。御覽の如くあばらやなれば。隠し奉る所なし。すのこの下になりとも入給へといへば。事急なれば。詮方なく。すのこの下へ隠れ給ふ。酒井はわざと表へ出で。他の家へ出で。敵を待つ。幸村大道村へ乗つけて見るに。大將見え給はず。傍の家の前に。酒井只一人扣へたり。扱は此邊に逃込しならんと。黄氣を伺へども見えず。道理なるかな。大將はすのこの下に隠れ給ひて。其上に左平次

座し居けるゆゑ。黃氣立ざる筈なり。幸村不審に思ひ。かく迄追詰  
 めたるに。いまだ運盡きずと見。えたり。よし。今日は逃すとも  
 重ねてゆるさじと思ひ。大音あげて。某軍略に乗せ。かくまで追詰  
 たらば。飛道具を以て討取る事やすけれと。尋常の勝負を望む幸  
 村。今日に限らず再會を期せんといふ處へ。本多出雲守馳せ來り。  
 酒井諸共敵を防がんとす。幸村の手の者五十騎餘り云々。

なほ難波戰記などより取れりと思ふふしあれと。さのみはと  
 て省く。家康眞田の鎗先にたふれ。其後は天海僧正影武者にな  
 り居れりといふ説あり。兎に角犬坂の役は。關東方も眞田にか  
 けなやまさされ。頗る難戰なりしに相違なかるべし。

船長の段

「いるさの月」 は入り方の月をいふ、

「齡の雪」 は白髪、

「我家へ戻り船」 とかけ

たり、

「急ぎ候程に云々」 謠曲より書く、

「もやい綱」 は纜、船を

結びつくる繩、

「疾しや遅し」 は直ちに

の意、

「比叡おろし」 は只さへ

難破の災ありて湖船のおそるゝ所、況んや雪空の向ふ風に於てをや、江州の西北

船長の段

入るやいるさの月影さへ。くらくしめくと。雲にちらつく雪  
 よりも。齡の雪を覆ふたる。蓑笠着たる老人を。乗せて我家へ  
 戻り船。艚を押切つて陸に漕ぎ付け。急ぎ候程に。早船が着て  
 候。ヤ則ち是か我等か内。サアくサお上りなされませと。歩  
 み渡せば老人は。しづく上がる陸の方。船頭ももやい綱。亂  
 杭にくゝり付け。いざ御案内と先に立ち。女房共く戻つたぞ  
 よ。お客が有るとどこにゐると。夫の聲に女房が。としや遅しと  
 納戸を出で。ナ、二郎作殿。戻らしやんしたか。けふは定めし  
 寒かつたでござんせう。イヤモ寒い段じやない。雪はちらつく。  
 向ふ風の比叡おろしで。艚づか持つ手も切る様に有つたれど。  
 風にさかふて艚押ししたので。モ、おれば寒さを忘れたが。ヤあ

面は高出ありて雪極めて深し、余三四月の交上京せし時、雪を見たるは湖北と富士とのみなりし。  
「一樹の蔭一河の流れ」 雨を一樹に避け、流れを一河に汲むも、他生の縁によるといふ意、佛教の縁の本旨にはかなひたるも、佛典の語にはあらず、白拍子の謠ひ出でたる句なりと、思ふに事文類談に「汲一流一河一接彌深、扉一雨一樹一思一殊親」などある詩をもとにて佛教の旨に合せて作り出でしなるべし。  
「聞いて女房はあきれ顔」 此切り口上、船頭の女房には分らず、あきれを真似ざる可からず、  
「生た兜人形」とは面白し、鐵武者はこれより外見たる事なき口ぶり、

なたには嘸お冷えなされましやう。サアくいざ先づあれへと進められ。蓑笠脱ぎ捨て上座に直り。一樹のかけ一河の流れ。ふしぎに亭主が世話と成り。寒夜の一宿過分の至りと。聞いて女房があきれ顔。テモまあ子細らしい物のいひ様。そして見りや生た兜人形見る様なお方。ありやマアどなたござんすぞ。アイヤどなたやらおれもしらぬが。けふは草津の方に軍があると聞いた故。何でもそこら邊へいたら。よい設が有らうかと。矢橋の濱に船付けて。見合して居る處へ。あなたがひよつこりお出でなされ。何かはなしに船へ飛び乗り。ヤレ出せ。ソレこげと。めつたむせうに追立てられ。合點が行かねどマア沖中へ漕ぎ出して。扱様子はと尋ねたれば。石山の陣所へ歸る者。それまで急ぎ船を着けよ。望み次第に船賃やらうとおつしやる故。畏つたと精出して。押しても漕いでも向ふ風。一向石山へ船はよ

「草津」 は近江國栗太郡にあり、東海東山兩道の分るゝ所にして、名物は姥が餅。

「矢橋」 は同國同郡にあり、矢橋の歸帆として近江八景の一、相國寺林長老の詩に「釣竿手熟白頭翁、辛苦客船西又東、幾度風帆歸去後、呂公榮達一杯中」

「めつた」 は俗に減多なと書く、和訓栞にめたの音傾、めたほなめ(也)たにてなを省きたは助辭なり、べた一面などいへるべたと同語原なる由いへれど、いかゞ。

「石山」 は前にいへり秋の月は近江八景の一、又蟹の名所なり。

「馳走」 はもと奔走と同じく、馳まはり世話する意より、轉じて饗應の事とな

らず。しやう事なしにこゝ迄連れまして戻つた。今夜はここに  
お留め申し。風がないだら石山にお供する。コリヤ随分御馳走  
申してくれと。夫が詞にそれはマア御難儀や。見ました所  
が鎧とやらをめしてござれば。定めて軍に行くお方。ナ申し。  
左様な事でござりますかと。尋ねに老人打點き。ホウ推量の通  
り。けふの軍に思はぬ敗北。それ故かゝる世話に預かる。イヤ  
コレこちの人。敗北とは何の事じやへ。ハテ軍に負けるを敗北  
といふわいやい。ヲ、それならあなたは敗北さんで。お負けな  
されたのかへ。ヲ、それはまあくお笑止や。そして見ました  
所が。お年に不足のなさそふなに。命がけの軍せうより。お子  
様も有らふのに。隠匿なされてござりますれば。其の敗北とや  
らも有るまいに。定めてお腹が立つてござりませうな。何の  
勝負は時の運に寄る。一旦の勝より始終の勝こそ善成る

る。  
 「敗北」の北は奔なり、  
 軍に敗れて逃ぐるること。  
 「そんならあなたは敗北さん」面白し、  
 「勝負は時の運による」勝  
 敗は兵家の常、  
 「佐々木四郎が謀にのせられ云々」幸ひなる渡し船云々」  
 此趣向、新將軍秀忠が、牧方堤にて、眞田が地雷の謀にかけられ、九死の場合唐崎平六の船にたすけられしといへるに、とれるなるべし、總解を見よ、  
 「とやせん方もなきさの方」とかけたり、十方は途方の當字、  
 「これ佐佐木を討取りしも云々」眞田が多く影武者を用ひ、又にせ首をつかひしといふより書く、此段及前段の總解を見れば、明

べし。計らざるけふの戦ひ。佐々木の四郎が謀に乗せられ。味方の大軍大半討れ。某連も無念の敗北。陸路は佐々木に立切り。石山へも歸り得ず。とやせん方も渚の方。十方にくれて漂ふ所に。幸ひ成る渡し船。危き難を遁れしも。全くそちが情故と。始終を咄す軍の様子。聞いて女房が指寄つて。申し佐々木とやらいふ人は。討死と聞ましたが。やつぱり生きて居られますか。さればく。是迄佐々木を討取りしも度々なれど。皆影武者の質佐々木。六日以前の戦ひに。佐々木が忪小四郎といふ者を。味方へ生捕り其砌に。討死せし佐々木が首。忪小四郎に實檢さすれば。誠の親と歎きかなしみ。直様切腹。扱こそ佐々木は討取りしと。安堵の思ひにけふの出陣。又もや佐々木に追立てられしは。幾人有り共斗りなき。佐々木が謀のをそろしやと。舌を巻いて物語。聞く女房が打しほれ。今のお咄し聞くに

なり、

「影武者」は敵を欺く爲

め、本人と同装したる偽武

者ないふ、

「侍といふものは云々」こ

れ身にあたりての女房が練

言、打消すは他聞をばどか

るといふいましめ、

「薄の穂にもなるとやら」

諺草等に「落武者は薄の穂

におづる」堀川狂歌集に、

「落武者のおづるも道理薄

の穂入目をまれく餘に似た

れば」

「休足」は休息の當字

「互に詞納戸より」

けたり、

とか

付け。侍といふ者は。ちいさい子でも軍して。命を捨つるとい

ふ事は。はかないといはふか。いぢらしいといはふか。其親々

の身に取つてはと。いふを打消し。エ、何のかけも構はぬよそ

の事を。イヤ申し。かうお宿申しますからは。迎もの事に。あ

なたのお名を。ホ、我こそはと。いはんとせしが詞をひかへ。

イヤ端武者なればおこがましよう。ム、成程。薄の穂にもをぢる

とやら。承はつて益ない事。ヤエ、定めてお勞れでござりませ

ふ。見ぐるしけれど。奥へござつて御休足なされませんかい

いか様老體なれば余程の勞れ。詞に付けて暫く休足。イヤモ何

もお氣遣な事はござりませぬぞへ。緩つとお休みなされませ。

ホ、何かに付けて心遣り。過分くと老人は。しづく立つて

奥に入る。後に女房がくしくと。思ひ侘びたる憂涙。夫も思案

有り顔に。手を拱いて差うつむき。互に詞納戸より。ひよかく

「あほうの盆太」 名からして抜けたり盆の字、重箱にかゝる。

「お家様」 は奥様、上方の語。

「忘れてござんすか云々」 これ馬鹿の一つ覚え、最も愛すべき所。

「速夜」 は死者忌日の前夜の稱、宿忌ともいふ。

「祝ふて佛様に云々」 これ阿房たる所にして、最もいぢらしき所。

「釣佛壇」 は釣りたる小さき佛壇にて、貧家に見る所。

「火」しめる「相應す」香爐の香もりかへ」調あり。

「男のかうけじやとて」は

出るあほうの盆太。重箱片手に。コレお家様。お前忘れてござんすかへ。けふはぼん様の十七日の速夜。それでおりや一文餅三つ買うて來た程に。祝ふて佛様へ進ぜてと。いふに思はずせき上げて。わつと斗りに伏しづむ。チ、しほらしい。よう氣が付いたなア。愚なわれが志。備へいで何とせうと。しほく立

つて押入の。禊明くれば釣佛壇。御明しの火は有りながら。しめるかうろの香もりかへ。知覺院幼玄童子佛果の爲と手を合せ。

伏拜む目も涙なり。申し佐々木殿。シイ。イヤ二郎作殿。お前もこちら向いて。せめて一遍の回向なとして下さんせ。私が干

遍唱へるより。お前のたつた一遍が。あの子の功德に成るわひ

のと。又伏沈めば。ヤイくくくたわけ者めが。奥に客人もござるのに。見苦しい其泣聲。エ、未練なやつと呵られて。イエ

何ほ呵らしやんしても。是が泣ずに居られふか。いかに男

男の権利じやとの意、かうけはあたりまへの事といふ種の時に用ふる俗語、

「肝のたばれ」は鳩尾(みづおち)のあたりをいふなるべし。

「穴一」は錢をかけ、穴をほりて錢を入れ、これに投げめてたるものが、かけたる錢を取る、子供の遊戯

のかうけじや迎。お前斗りの子かいな。私が爲にも子じやわいな。まだ年はも行かぬ物。かうくせいとむごたらしい。父御の詞を子心に。大事くと忘れもせず。立派に有つた其時の。姿が今に目先に見え。何と是が忘られふ。わしや得忘られぬ。得忘れぬとどふと伏し。歎けば道に恩愛の。涙は胸につかけながら。ヤイ聲が高い靜に泣け。我迎も肉縁の悴。不便になふて何とせふ。傍で有りく見たそちより。見ずに案じる我心。どの様に有らうと思ふ。骨は碎かれ身は刻まれ。肝のたばねへ烙鐵を。さゝれる様に有つたわいと。涙隠せば。阿房は目を摺り。ア、利根なぼん様で。せんどもナ。おれが穴一して居つたれば。コリヤあほうよ。穴一すると手が下るといはしやつたによつて。コレくそんなませた事いふと。終死ぬるぞやといつたれば。おりや侍の子じやによつて。死ぬる事は何共ないが。

にて、ばくちの一種なり、  
悪しき事なればいましめの  
爲め「穴」すると手が下ろ  
などいへる諺ありしなるべ  
し、穴一の事はなほ後にい  
ふべし、

「ませた事いふと云々」阿

房がはかなき遊び事の、前  
表をなせしを脱く頑是なき  
繰言、親の身に一倍こた  
ふ、

「泣しやる」「泣しやる」「お  
いしく泣き」 相照す

「琵琶の湖水にさどなみ」  
近江の作事なれば用ふ、

「早打」 は急使の稱、も

と馬を馳せて、急事の使す  
るゆゑにいふ（馬に騎り行  
くかうつといふ）

「粟津」 は近江國滋賀郡

にあり、粟津の晴嵐は八景  
の一、相國寺林長老の詩に  
「嵐度粟津春興長、吹霞

ひよつと死んだら。無かゝ様が泣かしやるなアといはしやつた。  
つい泣かしやる様に成てのけたと。大聲上げておいしく泣き。ユ  
リヤヤイくく。もふいふてくれないやひ。聞程苦しい此胸  
が。さける様など伏沈む。涙は琵琶の湖に。さゞ波寄すること  
くなり。かゝる歎きの時しも有れ。長押にかけたる鳴子の音。  
風かあらぬかぐはらくく。二郎作聞よりつゝ立ち上り。ユ  
リヤく女房。城内より知らせの早打ち。ソレ奥の間に氣を付  
けよ。あほうは裏をと追立てやり。戸口を丁と指かため。居間  
の疊を刎上ぐれば。下よりぬつと鎧武者。今日味方の勝軍。言  
上せんと手をつけば。シイ音高しく。谷村小藤次。シテ城内  
に變はなきや。けふの一戦味方の勝利。次第聞かんもひそく  
聲。さん候。味方の軍勢。粟津の汀に屯を構へ。戦を催す所に。  
敵の大軍どつと押寄せ。無二無三にかけ立つる。味方はわざと

吹雨似相狂、山花片々一  
 蘆浪、湖上閑鷗夢亦香」  
 「無二無三」は無間にて、  
 脇目もふらずに、法華經唯  
 有二乘法「無二亦無三」  
 これより出でたるなりと  
 「四つ目結」は佐々木の  
 紋所、  
 「采配」は宰配、采牌な  
 ど書く、兵を指揮する具、  
 武用辨略に、其制法を記せ  
 り、貞丈翁は、武田家にて  
 作り始め、山鷹をつかふぎ  
 いに思ひつけるなるべし  
 と、別記を見よ、  
 「風に散行く木の葉武者」  
 縁の語、  
 「稻麻竹葦」多くむらが  
 れる状をいふ、功徳經に  
 「若三千大世界、満中如來、  
 如稻麻竹葦」

負色見せ。十丁斗り引退く。勝に乗つて追來る大軍。潮のわく  
 にことならず。シイ味方も爰に踏止り。火花をちらして攻戦ふ。  
 仰せ置れし時分は爰ぞと。四つ目結の旗さつと靡かせ。敵の後  
 に大音上。佐々木の四郎高綱是に有りと。名乗りかけく。薫  
 直にかけ立つれば。そりやこそ佐々木か又出たぞ。謀に乗らぬ  
 内。引けやくくと我一に。狼狽騒げば後陣より。大將時政采配  
 ふり立て。佐々木連鬼神にてはよもあらじ。騒ぐな者共。備へ  
 を立て、戦へと。高らかに呼ばれども。佐々木といふ名に聞  
 きおぢし。崩れ立つたる敵なれば。耳にもさらに聞入れず。風  
 に散り行く木葉武士。逃行く者に目はかけず。めざすは時政只  
 一人。余すなもらすな者共と。稻麻竹葦と取巻しが。天をかけ  
 つて逃れしか。又地を潜つて走しか。無念ながら時政は討ちも  
 らして候と。息つきあへず訴ふれば。ホ、天晴高名手柄く。

「緋威」は札を緋にて威し（綴づるを威すといふ、緒通しの義）たる鐵、多く大將などの着せしもの、「錦の直垂」鐵直垂として鐵の下に着るものなり、錦を用ふるは大將に限る、錯着用次第に圖を載せたり「飛込む跡の古疊」古池や蛙飛込む水の音、の詠に思ひつきで書けるなるべし「天の乘へ」史記陳餘傳に「天與不取反受其咎」「油斷大敵」は油斷事を破るを戒むる語、荀子に「百事之成也、必在敬之、其敗也、必在慢之」「小敵とて侮らず」前の大敵をうけておく、左傳に「國無小不可易」なほ武經などにて見し心地す

併し時政を討ちもらせしは殘念至極。シテ時政が出て立は鐵は緋威錦の直垂。何緋威に直垂とや。シテく歩立か但しは騎馬か。イヤ馬は其場に射すくめられ。乗りかへもなく身はかち立ちム、さこそく。汝は直に城内に立ち歸り。勝軍の油斷を窺ひ。夜討をかけまい物でもなし。萬事油斷なき様に。變あらば早速知らせよ。サ早行けくといひ渡し。差寄つて耳に口。ハア、畏り候と。引返へして拔道へ。飛込む後の古疊。元のごくに押直せば。女房篝火勇み立ち。今の注進聞くに付け。割符を合す奥の老人。時政に極まつた。此家へ来るは天のあたへ。百萬騎よりたつた一人を討ち取れば。四海波風しづまる手柄。用意さしやんせ四郎殿と。せき立つ女房さわがぬ高綱。ホ、斗らず我が手に落入る時政。迎も今宵は過さぬ命。いやくく落付くも時に寄る。油斷大敵。小敵迎侮らずとは。常々お前が教へる軍

「牛の頭うごかす繩の力かな」

「五音」は音調の意、

「されば候」は、さればにて候、

「大江の入道」は大野治長に當てたるなるべし、内通云々の事は四斗兵衛の段を見よ、

「六穴」は九穴（口、兩眼、兩耳、兩鼻及兩便の孔）を省きて、首より上の諸孔を、大やうにいへるなるべし、「さん候」はさにて候

法。いざ討ち給へ早ふくと。せきにせき立つ折も有れ。又も知らせの鳴子の音。四郎心得てつ取り早く。疊を丁と刎退くれ。ば。ずつと出でたる四の宮六郎。御注進と呼ばるにぞ。ヤア。汝が五音は甚不吉。心元なしいかにく。されば候。城内には今日の勝軍。いづれも酒宴の興を催す中に。取譯け和田兵衛殿。例の大酒數盃を傾け。餘程酒興の折からに。大江の入道銚子盃携へ出で。和田兵衛の軍功。大將感じ思召し。御悦びの御酒を下さる。頂戴有つて然るべしと。聞くより何の思慮もなく。土器取つて押戴き。てうと受けてほし給へば。忽ち顔色土の如く。六穴よりほど走る。血汐は瀧のごとくにて。さしも強氣の和田兵衛殿。虚空を掴み七顛八倒。其儘息絶え候と。語にはつと佐々木が仰天。シテく其座に三浦之助は有合さずや。さん候。取分けむざんは三浦殿。毒酒を以て和田を殺せし。暴悪無道の

「阿修羅王」 修羅とて、日々闘争を事とする鬼の王前に解せり、

「天なるかな命なるかな」は天命なるかな、

「三つ鱗」 は北條の紋所  
三つ葵(徳川の紋所)に當てたるか、  
「指物」 は鎧の背の受筒差にして、戦場の目標とするき小旗、武用辨略に「狙

大江の入道。搦みひしいでくれんずと。阿修羅王の荒れたるごとく。入道目がけ懸上る。板間にかねて落穴。踏はずして眞倒。下に植ゑたる劔にさかれ。身はすだくと三浦の最期。皆入道が謀計なれば。此上は頼家公。御身の上も危しく。片時も早く城内へ。御入り有つて守護有るべしと。云捨て又も引かへせば。始終こなたに立聞く時政。佐々木とはうあきれ果。しばし詞もなかりしが。ハ、ア 天成るかな命成るかな。和田といひ三浦といひ。いづれも秀る當時の英雄。入道などが術に乗りしは。よくく味方の運のつき。此上は片時も早く。城内へ馳向はん。篝火。用意くと氣をせく折から。俄に表騒がしく。馬の嘶き數多の人音。三つ鱗の旗差物。弓鎧持筒引く馬の。かざりもきらつく鎧武者。門口に謹んで。鎌倉の大將時政公。此家に遁れまします由。竊の物見が知らせにより。御迎の爲め

談に曰く、指物は一己の印  
なり、然れども組付の者  
は、一組の印あり、これに  
己々の字を記すなり、竿は  
云々」と、委しく其制法を  
記せり、

「持筒」 は今の鐵砲なる  
べし、

「敵の謀によつて謀を行ふ」  
俗に人のふんどして相撲を  
とるといふに同じ、

「龍を淵に放す」 虎を野  
に放つといふに同じく、其  
をりを逸しては、其ものゝ  
勢力如何ともしがたきない  
ふ、

「此濱邊に云々」 唐崎平  
六が新將軍を助けし褒美に  
大阪より伏見通ひの船の特  
權をゆるされし、といふ事  
より書けるなるべし、總解  
を見よ、  
「天の助けは人力の云々」

參上す。早く御歸陣然るべしと。呼はり皆く平伏す。内に女  
房が猶せき立て。アレ時政を迎ひの大勢。此場を助けかへして  
は。龍を淵へ放すも同前。サア今の内本望く。サアくくく。

サアとあせる中。時政公一間を立出て。誠に危ふき難を遁れ。殊  
に今宵の一宿迄。淺からぬ亭主が情。町人なれば褒美には。此濱  
邊に家屋敷を建あたふる間。濱店として永く所持せよ。猶も望

の事有れば。重ねての沙汰に及ばん。さらばくと馬引寄せ。

ゆらりと乗れば諸軍勢。四方をかこうて立歸る。天の助けは人力  
の及ばぬ運ぞたぐひなき。エ、手に入つた敵をやみくと。遁

し歸すは何事ぞ。未練共卑怯共。いふにいはいはれぬ腰拔武士。お  
前は天魔が見入れしか。情なや淺ましやと。耻かしむればにつ

こと笑ひ。敵の謀について謀を行ふ高綱。女ごときの知る事な  
らず。ム、手に入る敵をやみく遁すが。謀か計略か。ホ、今

一時政でないありやにせ者云々一家康陣廻りの時、南光坊を影武者として先立て後よりつゞきしに、眞田運氣を見て、前のは影武者なりとてうたず、後より來れるを、これ眞事の家康なりとて、壹貫目筒を切つて放せしに、柳の枝にさはりて玉下り、袋の鼠をのがせしかば、さて、運の盛なる事かなとて、殘念がりしといへるに思ひよりて書けるなるべし、なほ總解を見よ、「謀は密なるをよしとす」易の繫辭傳に「幾事不密則害成」これより出でたる語ならんか、恐くは兵書に見わたる句ならんも、未だ取しらす、

「種が島」は小銃の稱、天文年間、南蠻人大隅の種子島に漂着して、鳥銃を傳

歸つたは時政でない。ありやにせ者。ナニあの時政をにせ者と  
 は。ホ、是迄度々の戦ひに。此高綱に欺かれ。其の無念止む事  
 を得ず。面體恰好似たるを撰み。時政に出立せ。けふの軍に討  
 死させ。時政こそ討ち取つたりと。味方の者に油斷させ。其虚を  
 討んといふ術と。とくより計り知つたる故。攻口をゆるめさせ。  
 わざと助けて此家へ伴ひ。城内の變一々聞せて歸せしは。誠の  
 時政を城内へ。おびき出ださん我智謀と。語るに扱はと女房が  
 かんじ入りて横手を打ち。適我夫奇代の計略。そんなら和田殿  
 三浦殿も。シイ謀は密成るをよしと。いふ間に取出す種が島。  
 狙は松が枝ばつたり人音。申し今のは。敵より入れし竊の曲者  
 早や明方も近付けば。我は是より城内へと。又も疊を明け鳥。  
 かあいくの聲に連れ。思ひ出したる小四郎が。名は消もせて  
 其主は。親を残して西方淨土。彌陀の御國の道法は。斗りしら

へしよりの名なるが、後に  
は片手にて使用すべき、短  
銃のことなる、

「疊を明烏」 とかけ「かあい〜」とつゞけたり

「道法」 の語上下にかゝりてたくめり

「拔道拔目なき」 と調をととのへたり、

れぬ佐々木が拔道。  
拔目なき智謀の程こそ。三重

義經腰越狀 目貫屋の段

總 解

並木宗輔が作にして。享保二十年二月七日豊竹座の興行に上せし南蠻鐵後藤目貫を。延享元年四月改作したるが。義經新含狀にして。寶曆四年七月。更に増補改作せしもの。即ち此義經腰越狀なり。主人公なる五斗兵衛は。後藤又兵衛基次に當てたる事しるし。五斗兵衛の名は。已に近江源氏の解にいへる如く。五斗を後藤に通はしたるものにして。無双の吞助とせるは。浪人中酒浸しになり居たり。といへるより取れるなるべし。さて目貫屋とせるは。初作の宗輔が。足利義政の頃の有名なる金屬の彫刻師。後藤祐乘に思ひよれるものならん。しかして後藤又兵衛が。南蠻鐵の如き勇士にして。目貫の如く城の固めとなりしといふ意にてもあるべ

きか。

されば頼朝は家康。義経は秀頼。泉三郎は片桐且元に當てたりとも見るべけれど。頗るかきひがめたる上。屢改作せしものなれば。それと知るべきふし少し。されど五斗が我れ又鎌倉より左程懇望云々といへるは。後藤家康に播磨一國を以て招かれたるを辭して。我れあらば城落ちず。討死して其御高志に報ゆべし。とこたへたりとの事より。書けるなるべく。又此度義経公御兄弟の御中云々といへる物語も。おもひあたる箇所あるべし。大三の名は眞田幸村の子大助にとれるか。こは至極のおしあてたり。

義經腰越狀

目貫屋の段

「きはひ」は競と書く、  
運のむくをいふ、

「さげやかに」は立派に  
の意

「しのごし」は物越にて、  
遠くより見たるそぶりをい  
ふなるべし、

目貫屋の段

「てこそ入にけれ。女房は一圖に細工と心得。サ仕合が直つて來た。此きはひに大三も戻らう。首尾は何うじやと奥の間を。差覗いては立つたり居たり。耳そば立つる表の方。何時聞馴れぬ轡の音。又人こそと見る内に。十四五なる少年の。社衾大小さはやかに。飾り立たる乗馬に跨がり。此方の内を目當に來るは確か息子の大三じやが。テモよう似たと眺める中。門口に馬乗放し。詞ユリヤ〜家來共。今少し隙入の用事有り。町端に待つて居よと。下僕を遙に遠ざける。物腰違はぬ此方の息子。左も有れ不思議な形恰好。迂濶に詞も懸られず。内より窺と差覗き。顔見合すれば。喃母様。お久しうりますと。聲懸られて飛立つ許り。そりやこそ兄の大三で有つたは。ほんに爾うじ

「息災」は無事の意、神佛を念する息災延命の語り出でしなるべし。

「瀬田」は近江國滋賀郡にあり、長橋を以て名高し勢田の夕照は八景の一、

「暖簾は薄けれど恩愛厚き」對したり、

「五斗」は後藤又兵衛に當てたる事しるし、

やと顔眺め。詞シテ其姿は何うした譯。よう戻りやつた息災でと。嬉しさ餘り詞さへ。亂次になつて尋ねれば。詞ハア、目馴れぬ姿御不審は尤。いっぞや父様を瀬田へ尋ねて參つた時。本田の次郎親經殿に出逢ひ。無體に東へ連歸り。今では頼朝様に御奉公。夫に付父様へ。將軍様から御狀が參つた。お目に懸つて見せましたい。奥に休んでござるなら。爾う申して下さりませ詞ム、夫なら出立が立派な筈。主に見せたら嘸悦び。イザと手を引く門口を。潜る暖簾は薄けれど。恩愛厚き親と子の。悦ぶ聲を聞付けて。五斗は奥より走出で。詞ヤア兄よ戻つたか。ナ、好い侍になつたな。親より生れ勝つた。したが今鼻への咄。ちらと聞いたが。本田といふは。いっぞや瀬田で逢ふた侍。ム、幾程く。夫は爾うじやが。頼朝様から此父へ御狀とは。ハレ呑込めぬドレくと。云ふに大三は懷中より。恭しく文巻を

「家來」はもと公家の家禮より轉ぜしなりと、委しくは前にいへり、

「大名」は鎌倉時代、守護地頭の大なる者を大名といひ、小なる者を小名といひたりしが、徳川時代には一萬石以上の領主を稱す、「十萬石の大名云々」は家康が播磨一國を以て、後藤を招きしなどいへるより、書けるなるべし、總解を見よ

「返簡」は返事の書狀、「たけなが」は奉書紙の類にして、糊氣なく厚くして丈長し、「寢耳に水」は思ひかけなき不意の出來事にいふ語

出し。御用の譯は直筆にて。委細認め置れたり。父が前に差  
出せば。何事かはと封押切り。繰返し。讀終つて押戴き。  
詞、鼻も大三も聞いて呉れ。鎌倉から此父を、御家來に抱へたい。  
悴と同道。鎌倉へ下り奉公するなら。十萬石の大名にせうとあ  
る御文章。忝い事では無か。アノ此方を大名にや。テモ難有い  
仰じやの。爾んなら私は御前様。此子は若殿。娘は姫君。此上  
の出世は無し。一時も早う取急ぎ。大名になつて見たい。旅用  
意さつしやれぬか。詞ヲ、それく。是程難有い將軍の仰。何  
の否と申さう。したが些と譯あれば。こちとらは二三日後から  
行く。其方は先へ立歸れ。上意をお受申せし印。恐れ乍ら返簡  
せん。ドレ女房。硯と紙と押直れば。あつと心得筆筒の抽斗。  
たけながを取出し。夫に渡して我子の傍。詞コレ大三。此様な  
仕合は。寢耳へ水と云はうやら。是も偏に其方の蔭。子とは思

「氏神」はもと氏の先祖の神なるを、後に産土神の事となり、真丈雜記に「氏神と産土神と一つ事に覺けたる人あり、あやまりなり、産土神は、人々生れたる在所の鎮守の神なり、氏神は、藤原氏に天兒屋根命なり、平氏は桓武天皇を氏神とするなり云々」

「夏の日の夕立」の比喩頗る面白し。

はぬ氏神と。手を合すれば勿體ない。皆父様のお蔭故。私共迄思はぬ立身。お前も嘸嬉しかる。詞ヲ、嬉しい段か。餘りで夢では無いかと思はる。人の果報の付く時と。夏の日の夕立は。何時で有らうも知れぬと。睦まじげなる其隙に。五斗は返事書認め。文管に封印睦かと据ゑ。詞「ユリヤ〜」大三。少しでも隙取ば。君へ對して不忠の至り。隨分道中心を急ぎ。早立歸れと。君へ對して不忠の至り。隨分道中心を急ぎ。早立歸れと。状態を。渡せば受取り懷中し。詞然らば私はお先へ下り。お受の様子を我君へ申上げ。此返事を差上ましょ。母様跡から。父様や妹と。一緒にお下りなされませ。詞「ほんに餘り嬉しさで。妹に逢するのをはつたりと忘れた。戀しがつたに立ながら。一寸呼んでと立上るを。詞「ハテ近い内一所へ。寄集る親兄弟。二日や三日遅いとて。顔の變る事も無い。急げ〜に力無く。爾んなら其方は最う往きやるか。此方も急いで追付ましょ。健で

「鉦鼓」はたゞきむねのこと、樂器の鉦鼓より出でしなるべし。  
「三ツ地大流し」は鉦鼓のうちかたなるべし。

くと。門口を送出で。詞こちの息子の大三のお立。ヤイ家來共様。御家來衆。早お歸りと呼はる聲。そりやお立よと詰懸くる。詞母様去らば。早うお下り待ちますと。莞爾と笑ひ暇乞別れて大三は立歸る。跡見送りて母親が。誰を對手の自慢口。詞ヲ、器量なら骨柄なら。天晴の侍。サアくこちの人。職人も今日限り。大名の下拵へ。そろく爲たら可らうと。勇む女房關はぬ五斗。佛壇へ押直り。何やら書いてはりかける。鉦鼓は三ツ地大ながし。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛迄聞かず。女房は撞木振取り。コリヤ何ぞ。詞老先の有る大事の子。忌々しい俗名五斗大三郎。菩提の爲と書付けて。念佛申すは何事と。腹立聲に涙ぐむ。詞ホ、様子知らねば理りじやが。鎌倉へ歸るや否や。何うでも大三は死るはやい。ヤアそりや又何故に。夫知り乍ら逐戻す無得心。追駈けて呼歸そと。駈出づるを駈か

「若木の花が目の前で云々」  
此句情あり、味ひあり、

執へ。詞コリヤ待て。仔細を云つて聞せん。奥に控へし泉の三郎。目貫を誂ふるとは偽り。誠は此度義経公。御兄弟の御中不和となり。近々に軍始まる故。某を味方に招き。一方を防ぎ呉れよとのお頼。我古へは木曾の浪人。同じ源氏の末乍ら。頼朝には仇ある家筋。先祖の恨此時と思ひ。義経公の御味方。畏つたと受合ひし。其跡へ悴が使。鎌倉より我を懇望。如何に悴が爲じや迎。一旦武士の契約。今更違變成るべきか。詞此譯を悴に語らんとは思ひしが。彼奴も我悴。大事の使仕損せしと。切腹するは知れた事。若木の花が目の前で死ぬるのを。親の身でまじくと。何と是が見て居られう。追返さんばかりに。偽り云ひしを誠と思ひ。いそくと立歸り。詞將軍の幕下に就く事。罷成らぬといふ返簡。頼朝へ差上なば。手討に逢ふか切腹か。生きて再び戻らぬ悴。今別れたが一生の。顔の見納め生別れ。

「溢るゝ憂き涙、かゝるあはれな酌分ける泉」 縁の語味ふべし、  
 「大手を固めの片しの目貫」  
 大手一方のかためとなるをいふ、謎なり、大手は城の表門の稱、

死んだと思ふてする廻向。惜しや不愆と斗りにて。さしもの五斗はせき上す。胸に涙の恠へ兼ね。はつと斗りに泣居たる。様子聞いて妻の關女。涙も共にくどき言。扱悦びと悲みの。是程早う變るものか。爾う有らうとは夢にも知らず。鎌倉へ下りなば。五斗殿の若殿よ。お世繼様と大勢の。敬ひかしづく彼の子の威勢。見る嬉しさは如何ならんと。樂みし効も無く。死ぬるとは情無い。夫知ながら突放し。一人戻すは侍の。道とは云へど餘りじゃ。酷い心と斗りにて。正體涙に伏沈む。詞ア、こりや、女房奥へ聞える。未練なりと三郎が。心の嘲り耻かしい。泣くなくと。云ひつゝ溢るゝ憂涙。斯る哀を酌分ける。泉は襖押明けて。様子聞けども聞かぬ顔。左有らぬ躰に歩み出で。詞始終奥にて談ぜし通り。大手を固めの片しの目貫。早速にお受申されし段。立歸て義經公へ申聞けなば。拙者が面目。主

「目禮」「慶へ」「辭義」「禮義」  
調あり、

「いひつ聲」はいひかつき  
聲、

「どろ」は酔どれ、  
「小面憎さの憎て口」調  
あり、

「ぎすくいふ」はがみ  
くといふ事なるべし、

人も満足。直に今日迎の乗物。拙者が宅迄落付き給へ。後刻緩々  
御意得んと。客は目禮。亭主は憂への暇乞。辭義も禮義もそこ  
くに。館へ歸る泉の三郎。五斗は跡を打眺め。詞、ヤ此とく女  
めは何處に居る。娘々と呼紛らし。泣に入るこそ道理なれ。跡  
に關女は氣もうろく。何うか恚うかと案じの最中。約束なり  
といひかつ聲。じぶん考へ捻金門八。どろめは内に戻つたかと。  
直に座敷へのさばり上り。何處にけつかる引摺出せと。家内を  
きよろく睨廻せば。小面憎さの。憎て口。詞、チ、手附を返せ  
なら。あだ喧しい戻して了はう。モ些と其處に待たしやれと。  
立つて行くを。コリヤく待て妹、詞、モ些と先まで無い金が。  
俄に有つて戻すとは。ハア、聞えた。只今爰の家から立派な侍  
が。編笠被て京の方に往かれたが。何ぞ好い事が有つたな。常  
からぎすく云ふと思ひ。此門八に隠すのか。ありや皆わいら

「親は泣寄り」 實際の不  
幸に至りて、身内の眞實あ  
るをいふ語「親は泣寄り、  
他人は食寄り」

「糸瓜もいらぬ」 何もい  
らぬといふを強くいふ語。  
糸瓜の事は前にもいひたれ  
と、詳ならず、  
「兄が心を白張」 とかけ  
たり、

が爲じやぞよ。何故と云へ。五斗兵衛に酒を廢させ。細工に精  
を出さう斗り。眞實何の憎からう。親は泣寄といふ事知らぬ  
がい。善い事なら共々に悦びたい。隠さずと咄して聞しや。何  
うじやくとたらし込む。遺女のあどなさに。兄と思へば心を  
許し。詞其心底なら何隠さう。今日は大三が。戻つて來ての様  
子を聞くに。頼朝様に御奉公。次手に親の五斗殿も。御味方に  
下れとの御使。些との違ひで。義經様へお味方申し。大三が死  
ぬると知ながら。嘘吐いて追返したと。云ひも切らせず。詞ナ  
ニ五斗は都方へはや味方か。ム、ム、ム、それく。其様な目出  
たい事。何で兄に隠すのぢや。手附の金も糸瓜も要らぬ。逢ふ  
て一寸悦ばう。呼んでたもれと打解顔。成程奥に居られますと  
兄が心は白張の。襖引明け呼に立つ。門八はそろくと。尻引  
裏げ身繕ひ。儕一人が心に領き。鼻息もせず窺居る。恚とは知

らず五斗兵衛。門八殿かようこそと。立出づるを遣過し。聲をも懸けず後より。唯一討と斬付けけるを。心得たりと搔潜り。ずつと寄つて刀振取り。ぐつと突込む五斗が早業。伝とのつけに返る。音に驚く女房娘。何事かはと走出で。見れば夫の手に懸り。門八が苦痛の躰。是はと斗り呆れ果て。暫し詞も無りしが。五斗刀を門八が、腹に其儘突込み乍ら。突飛して座を改ため。詞思懸無くだまし討にて。斬懸しは仔細ぞ有らん。眞直に白状せよ、様子聞かねば殺されずと。睨付ければ。門八息を吻と吐き。詞ア、假にも人の慎むべきは。身に應ぜぬ強慾ぞや。此程本田親經より書狀到來。汝に縁有る五斗兵衛。軍術に妙有る事。頼朝豫て聞き召れ。深く懇望なさるゝ故。悴大三を召捕置きたり。若し味方に招かぬ内。萬一五斗が都方へ一味せば。鎌倉の爲にはしんよくの患。早く首を討つて呉れよ。一廉の侍に取立てん

「常に變りしいまほの歎き」  
 人の死せんとする時、其言ふ事やよしとば、これなるべし、  
 「夫の心兼れてに違ふ」と  
 かけたり、  
 「未來閻魔の廳にては云々」  
 これ武士としては此上なき  
 引導なるべし、

どの文章。何でも儕爲果せんと。百疋猿の目貫の詔らへ。毎日  
 く入込みしは。事の様子を探らん爲。今妹が咄を聞き。扱こ  
 そと心の悦び。唯一討と思ひしが身の破滅。詞誰有らう日本の大  
 將。頼朝公の目鏡に預り。軍師の器量備はつたる五斗殿に。我  
 々風情が手に懸つて。死ぬるは仕合。本望は遂げねども。一旦  
 約束した通り。モウ本田へも義理は立つた。コレく五斗殿。  
 妹や姪が事。必ずお見捨下さるな。サア云ふ事も是迄。早く此  
 世の暇をたべと。常に變りし臨終の歎き。妹や姪は血筋の別れ。  
 泣きたけれども。夫の心。豫ねてに違ふ言譯と。忍び涙に咽返る。  
 五斗も袂を絞りしが。詞ハア驚入つたる心底。善にもせよ悪に  
 もせよ。人と約せし一言の。義を立抜くが男の魂。出來された  
 りく。とても此深傷では。存命思ひも寄らぬ事。某を討たん  
 とせしは。武士になりたき初一念。詞未來閻魔の廳にては。義

「我も鎌倉より左程。懇望ニ  
 々」 後藤家康の招きを辭  
 し、我れ死せば城陷るゆゑ  
 討死して其恩に報ゆべしと  
 いへる事などより、書ける  
 なるべし、總解を見よ、  
 「東福寺の聖一國師」は  
 辨圓と稱し、高德の僧にし  
 て、藤原道家北條時頼等の  
 尊信頗る深し、弘安三年十  
 月十四日寂す、年七十九、  
 正和の初め諡を聖一國師と  
 賜ふ、これ我國々師號のは  
 じめなり、「我子の肉をくら  
 ひ云々」の事、元亨釋書には  
 見えず、其道の人に問合せ  
 たるも分明ならず、なほ取  
 調を托し置きたれど、人ち  
 がひにはあらざるか、  
 「死の縁無量」は因縁に  
 よりて山で死ぬ者河で死ぬ  
 者等死様の種々なるをいふ  
 有爲轉變は世の事の變り

經公の御内。五斗兵衛と引組んで。討死せしと傳へられよ。我  
 も又鎌倉より。左程懇望なされたる。御高恩を報ずる寸志。運  
 盡きて敗北せば。味方の勇士に挺んで。一番に討死せん。是を  
 土産に成佛あれ。苦痛させじと引寄て。とゞめを刺せば果敢無  
 くも。覺行く夢となりにけり。親子は死骸に抱付き。袖と袖と  
 に聲涙。前後不覺に取亂す。五斗は心を取直し。ハア誠や東福  
 寺の聖一國師。我子の肉をくらひ。大道心を立てられしためし  
 もあり。出家も武士も氣は一つ。由なき愚痴に迷ふたり。都の  
 迎ひも程あるまじ。悔むな泣くな此死骸。いざ／＼野邊の營み  
 と。親子を戒め引立て。死の縁無量有爲轉變。定めなきこそ  
 世の中と。いさめながらも共涙。せき女やとく女が忍び音に。  
 泣く聲直ぐに經陀羅尼。手向となつて未來の家土産。寂光淨土  
 の蓮葉の。花の臺に至り至らん彼の岸の。彼岸櫻や入相の鐘を

「寂光淨土」は四淨土の

一、八陣守護城にいへり、

「蓮葉の花の臺」蓮臺をいふ

「彼の岸」五濁の此世を、此の岸といふに對へて、極樂淨土を彼の岸といふ、委しく後篇彼岸の解にいふべし、

「彼岸櫻や」の句、彼の岸をうけて書き、上は花の臺に應じ、下は花の都に應ず、されど此段尾よき文ともおもはれず、

「大津」は近江國滋賀郡にあり、

限りに。馴れし大津の里離れ。花の都へ急ぎ行く。

義經腰越狀 泉三郎館の段

總 解

此段は例の如く。後藤が浪人中酔どれになり居たり。といへるより作れる事論なきか。しかして長者町の池は鴻池。天王寺は天王寺屋。平又五は平野屋。辰己角は辰己屋。いつやは泉屋(住友)なるべし。いづれも大阪の古き丸持なり。當時箒を賣る酔どれの老爺ありて。箒の先に樽をかゝげ。かゝる事をいひあるきしを。作者取りて面白く作り込めるにはあらざるか。彌太夫氏も此話をせられたり。今箒の先に樽をかゝげたる。酔どれの繪を見れば。何人も大酒の横綱五斗兵衛の像たるを知る。これ此淨瑠璃より來れるものか。よくひろまれりといふべし。又「きよろりが味噌」とは俗語なれど。後藤味噌の事思ひ合され「まがひの平打紐」の句には。眞田紐の

事思ひ出さる。當てたりや否やは知らねど。興味ある話なれば。後藤城入りの事と共に左に掲ぐ。

此段有名なる割には。文も拙く趣向も劣り。如何にも作り物らしく。感服せざる點多し。近江源氏などゝ比ぶべくもあらず。且俗文學とはいふものゝてにをはの無理なる誤りあるを覺ゆ。しかし前後も思はず。筋道も考へず。只目先のかはりてにぎやか。か。く。や。たらに死するを義とあはれむ。無學の婦女子連には大受けなるべし。俗間にもてはやさるゝ淨瑠璃中には。隨分馬鹿くしきものあり。これはそれらに比ぶれば。聊上出來なれど名高き割合に劣れるをいふのみ。

慶長攝戰記 和州郡山の城下に來りて浪宅す。九年の間の浪々貧窮に困り。家人も分散して世渡りの營もなく。筒井主殿助に相勤む。筒井が家中後藤が浪宅を幸ひと。軍學を稽古す。門弟三十人許

り出來。此助力を得て。やうく。と其日を送りける。然るに慶長十九年九月廿一日。大阪秀頼公より御教書密に到來し。基次を急ぎ招かるゝといへ雖。後藤貧窮に困り居るゆゑ。衣服甲冑の支度なかく。出來せず。鬱氣して居る處に。片桐市正茨木へ立退くといふや。又々密に御使來り。大阪に至らば。浪人共の惣大將仰付らるべしと。大野治長が書翰來るといへ雖。後藤如何とも支度すべき様なく。心樂まず。毎日取被りて打臥し居るゆゑ。門弟共見舞として辨當酒肴を送る。後藤酒食は快くしながら。兎角寢ること計りして居るゆゑ。門弟共打寄つて評しけるは。師は一昔の住居なり。名將勇士古より色情深きもあり。男色か女色が。聞いて取持ちて進ぜんといへども。又兵衛平日禮儀正しく。萬事嚴重の挨拶ゆゑ。誰彼と譲りて聞兼ねれば。一人の老士。然らば我等承はらん。師に仕ふる道なりとて。四五人申合せ同道して來りけるが。後藤例の

如く破れたる蒲團を着て打臥したり。老士様子を聞き。慇懃に云々と尋ぬ。基次聞いて。如何にも病氣は戀病なり。老士申けるは。然らば男女の戀人の名を仰聞けられよ。我々取持參らせんといふ。又兵衛聞いて。戀人はお亂といふ。若侍共耐へ兼て。吹出し笑ひければ。後藤蒲團を脱て立腹し。何を各々方笑ふぞ。可笑き事少しもなし。お亂とは此度大阪關東御崩しの事。貴方の亂ゆるおの字を付けて申すが。禮儀といふものなり。今度秀頼公より。某を數度招き有るといへども。各兼て知る通り。數年尾羽打枯らし。永々の浪人。如何とも此度の支度出來申さず。各々左程の心入。近頃無心なれども。金百兩合力頼み入る。大阪に至らば急度返濟せんと。餘儀なく申ければ。皆々甚迷惑し。構はず打捨て置たらんがましなるべし。邪心の事申して。小祿の我々と知りながら。高金の無心。何とも調達すべき様なしといへども。大阪隨身の者なれば。召捕つて

關東へ訴へ如何あるべきや。それもさる事なれども。一旦師と頼みし人を。訴人せんも不義の至なり。少しなりとも合力すべしと。誰彼と集めて。やうく金廿兩拵らへ。小祿の者共取集め。少しながら合力仕る。何卒これにて御支度下さるべしと送りければ。後藤悦び。元來無理なる事を頼み候へば。出來せずとも是非なき處。これ過分の合力と。早々浪宅を仕舞ひ。且家來の散在して居たるを。一兩人招き雜具を擔はせ。又備前岡山の浪人。板崎出羽守成政が勘當の子。元無を誘引せり。斯て後藤は大阪に至りければ。甲冑なき事を憂ひ。餘り落ぶれたる此體にて入城せば。秀頼卿の御外聞も悪く。又諸士の積らん事も耻しく思ひければ。京橋筋より町々の小道。具屋に立寄り見るに。此節外の道具は無く。皆甲冑兵仗番具足等まで。おびたゞしく並べたり。後藤が心に叶ふ甲冑は。中々小金にて調ひ難く。三百兩以上と申すによつて力なく。同じ町

を幾度も往來して見直し。直段も問ひけれども何れも變らぬ事にて。悄悄と行過ぐる處に。幕暖簾を掛けたる。奥深く見えたる小道具屋より。後藤を呼込みければ。則ち立寄けるに。亭主らしき男又兵衛に向ひ。其許には何か御用有氣に。當町を何遍も往來し給ふ。若し御用の筋あらば仰聞けらるべし。當時秀頼卿御籠城の御催にて。御城下の商人共。數年所持の武器兵仗馬具等に至る迄。殊の外値宜しく賣拂ひ。利分過當に商ひ仕るは。兼て御城下に罷在る御恩なり。其元様を見請け申す處。御浪人と相見え。定めて右大臣様の御爲めに。御籠城の御心掛なるべし。御用何にても承るべし。御心置なく仰候へと申す。後藤答へて曰く。某は元來高祿を領したる者なれども。武勇を以て主人を捨て。九年以來浪々の身となり。近頃面目なれども。譜代の者も行方なく散在し。貧窮に逼り甲冑までも賣代なし。やう／＼に身命を繋ぐ處に。今度秀頼卿

の御頼み。再三に依つて上坂する處。知音より合力請しが。僅の金子ゆゑ。某心に叶ひし甲冑を求むること能はず。せめて入城するまで。貸して呉れるものならばと思へども。當時大阪の町人に知人曾て無ければ。胸中張裂くが如くにて。届かぬ事と思ながら。何遍もなく。迷ひ歩行き候と申ければ。彼亭主聞て。さて。夫は氣の毒の事なり。何卒致し方もあるべく。御名は何と尋ねければ。後藤基次答へて。聞こし及ばん耻しながら某は。後藤又兵衛基次と申者なりと申ければ。さらば。播州湯入郷の御出生にやと問ひければ。湯入郷の生れなりと答へける。亭主手を拍つて。左様に候や。拙者も先祖は播州湯入郷の者にて。祖父の時百姓を止めて。大阪に登り町人となり。拙者まで三代。後藤又兵衛と申して。當地にて廣く其名を觸れ商ひ仕候。然らば先祖は御互に御同家たるべし。常々存ずる黒田家の後藤又兵衛殿は。三萬石を領し。御直參同前

の格式にて往來なさるゝ事。同じ名にて此又兵衛は。町人にて金銀を相應に所持すれども。黒田家の後藤又兵衛の眞似する事もならずと。述懐仕候。段々の御物語おいとしく候へば。御望の甲冑武具兵仗。御貸申へく。一兩日御逗留も候はゞ。御取揃へ。御入城美々しき様に致しまるらせん。御運を開かれ候はゞ。代金を給はるべし。御意に入りたる甲冑御望み候へと申す。後藤大に悦び。町人といひながら武士も耻しき御心底。不思議の縁にて同家たる其許に巡り逢ふて。箇様の厚恩に預る事。某を捨て給はず。運を開きて世に出づべき端なれば。迎もの事に萬事御世話に預りたしとて。後藤は道具屋の方に逗留する内に。馬廻り徒士若黨中間まで。看板それく對に仕立て。鞍鐙花やかに飾り。雇人して立派に出立す。借馬を取寄せ。具足箱を先に擔はせ。後藤に見せければ。忝なしと一禮しつ。打乗り近くなりければ。大野修理治長方へ。御頼み

に依つて上坂仕る。貴宅へ參るべきや。直に登城致すべきやと。書翰を以て申遣しければ。先某が廓内の邸へ參るべしと。白銀五百枚賜り。大野が案内にて登城致し。秀頼卿へ御目見え仰付けられ。組附の者追々仰付けらるべしと。品々賜はり。廓内にて下宿を下されけり。是より後藤。俄に今日召し連れたる雇人の内。才覺ある者を撰み出し。外にも家人を抱へたり。後藤永々の浪居にて。貧窮に逼りければ。云々の譯にて。武器馬具を調へたる由。密に大野に申聞ければ。内々にて黄金五十枚を賜り。これを以て道具屋又兵衛の代金残らず返濟し。酒肴を携へて恩を謝しけるとぞ。

厭蝕太平樂記 片桐立退く(大阪城より茨木へ)と聞くより。木村長門守片桐が跡を追ひ。馬を飛ばして長柄堤へ急ぎける。片桐は思ひを含みて。行列を先へ行かせ。弟主膳をも先へ遣し。口取も付けず。唯一騎。跡にぞ馬を打たせける。然るに跡より只一騎。馬を飛ば

せて來るものあり。暫しくといふ聲に。且元は馬を止めて見れば。長門守重成なり云々。片桐が曰く。和殿を待ちしも専ら此事なり。定めて追ひ來り給ふべしと存じ。我君の御家人の内。和殿斗りなりといひながら。懷中より一封を取出し。これを和殿へ渡し候。此人を城内に頼んで。軍師として萬事を任せ候はゞ。日本國中の勢に。唐土の勢を加へて攻むるといへども。落城の氣遣ひ有るまじ。木村が曰く。左様の人は何人ぞや。片桐が曰く。此人の高見を我用ゐずして殘念なり。此人は信州上田の前の城主。眞田安房守が二男左衛門佐幸村なり。上田領十二萬五千石を捨て。信州山又山の重なる隠れ地を捨て。高野山に心を澄し候と號し。東兩將軍より神文を取つて。上下三百廿一人にて立退きしは。軍起る事を察してなり。此人故太閤へ約して曰。豊臣の御家と共に我家を立て。御家と共に我家を果さんとの誓約して。九度山へ立退きても。

大阪に出丸でまゐなくては叶はず。其材木を渡世の爲め出すと號して。某が方へ紀州川より加田の出船にて大阪へ出す。某請取つて船入に積置きたり。これもよく覺えて。其人の入城の節は申し給へ。併し此等堅く沙汰なし。これ大事の密意なり。必ずく沙汰し給ふな。さてこゝに黒田の浪人に。後藤又兵衛基次といふものを。先達て我君に御目見え致させ置く。長曾我部宮内少輔盛親。これも御忠臣にて。慶長五年より土佐一國を捨て、浪人仕る。兼て御目見え致させ置く。これ等を早く呼び出し給へ云々。

後藤味噌 厭蝕太平樂記此節秀頼公の御臺所。百萬石に定められけれども。格先例あれば。大行にして御入用つよく。太閤御貯への金銀。次第に減少しければ。古老の輩これを歎き。御儉約然るべしと談じける所。後藤又兵衛が工夫を以て。御臺所を改めける。過分の物入り。皆々小役人の私欲ゆる。或は御菓子肴青物菓物味噌薪

日々の費えおびたゞしく。中にも鯉節。御膳料として一日三十筋つけたるを。又兵衛板の間を呼びて。早朝より暮まで。目通りにて鯉節をかゝせ見るに。やうく汗水に成つて。五節けづりける。これによつて。これらの入用大分違ひ。其餘は準じて。皆々かやうの工夫にて。人々を積り相こしらへて。味噌は糠をむして。酒の粕と鹽と合せてこしらへたり。諸人賞翫して。今の世まで後藤味噌といへる事。又兵衛が工夫なり」と見ゆ。恐くば五斗味噌を。音通より後藤味噌として。作り出せる説なるべし。

厭蝕太平樂記　これより一翁齋。九度山村にて佛道に志深しと偽り。奥の一間に籠り。和漢の軍書に心を寄せて。砂取陣取の工夫をこらしける。幸村は十三人の郎等相交り。只浪人のいとなみと隣家へも思はせて。綿を糸に延べて五色にいろどりて。ませ合せて紐を打ちけるが。左衛門思付き。其紐を以て大小の柄を巻き振り

かけたるに。手の内すへらず。天晴の利方なれば云々。  
爰に於て。郎等共思ひけるは。永々の主人は浪人。用金はありといへども。世間のおもはく。關東の聞えも有れば。銘々内職いたし。主人をみつぐ事肝要なれば。これ幸の事なりとて。木綿紐打出し。初は高野山へ持ゆき。衣の上帯に賣り。又は宿々に持ゆき賣にける所に。珍らしき重寶なりとて。諸人買取つて賞翫しける。後には堺の商人。之を知つて。求め買ひける。則ち其紐を眞田打ちと名づけ。後世に至つて。堺にて學び。眞田紐とて。六十餘州にひろまる云々。

義經腰越狀

泉三郎館の段

「酒といふ世のくせ者云々」  
 狂歌にでもありさうな句なり、酒は人の心を亂するゆゑ氣ちがひ水と稱す、落語子の言に、初めは人酒を飲み、中程は酒々を飲み、終りは酒人を飲むと、こゝに至つて曲物感を逞ふす、「塵埃」をうけて「簾のさきに云々」といへり、此裝ひ、後世五斗兵衛の畫像となれり、「みせのばしにもしばしは云々」目貫師の唄なり、「土の人形や云々」譯分からず、かゝる事をいへる醉どれの老爺にてもありしにや、次を見よ、

「長者町の池」は代々有名の長者なる鶴池をいへるなるべし「天王寺」は天王寺

泉三郎館の段

酒といふ世のくせ物にうかされて。軍師も今は塵埃。簾の先に二升樽くゝり付け。詞「エイ〜エイ〜」。目貫師ナなんでもせい。簾々と賣たる親仁。見せの端にもしばしは休み。土の人形や着を寄せて。二ツ三ツ四ツ五ツも六ツも。たべつ押へつあひしよとおしやる。わきより人の見るならば。かろまたく〜。かろまたおかしかる。またけなりかる。詞「ハ、、、面白いは。御前で下されて。それから長者町の池が手造を。天王寺が所でごすてたべたじやて。是は見事じやと云て平又五が。材木程な牛房をはさんだ。ナト、、、ナホハ、、、。こりやどうじやといふたら。辰巳角の金もめが。角呑にせいといひおる。赦せといふたらならんはて〜。いづや山さぶが。銅のつるかけを出した。所

屋平又五は平野屋、材木程のなどいへるを見れば、材木屋なるべし「辰巳角」は辰巳屋、「いづや山さぶ」は泉屋（住友）銅のつるかけなどいへるは、同家は和泉の堺より出で、いと古くより銅鑛の事業を営めるよりいふか、これ等は皆大阪のふるき長者にして名高し、當時舞を演る酔どれの老爺ありて、かゝる事をいひあるきしな作者のとれるにはあらざるか、ごすは茶碗なるべし、角香分は辨の角より飲むこと、銅のつるかけは銅の土瓶の如きもの、「無念」は忘り過失などの意より轉じて殘念に同じ「やくだいもない」はらちもなしといふに同じ、前に解せり、「興さめ」はあきるとを

を小氣味ようきこしめしたじやてナ。何と無理か。無理でなさらば座敷へ参らうと。一間へ通りこわ作り。詞たそ居るか。お客様戻つたぞ。ヤアゑいやつとこなの相伴せうと。又引かへ呑む有様。女房見兼ね走寄。コレ五斗殿。マア時も時折も折一世一度の出世の場所。くらいどれの酔どれのと。追つ立てられて無念にないか。悔しうは思はずやと。せりかゝれば。詞コリヤ女房。エ、く無念な。じやによつてたへたじやてナ。サINAア。其たへた故引出され。赤耻かいたでないかいなふ。ソリヤ誰が。ハテこなたが。ハレやくだいもない。御前で錦戸兄弟がいかいもてなし。きつう酔た程に。いんで休めて、引ずり出された。ナントエイカ。ユリヤく娘よ。あすから馬に乗せ。ナントエイカ。かゝを乗物に乗せて。ナントエイカ。我等が鼻じやてナ。祝ひ事に又致そと。樽傾くれば。女房興さめもぎ取

いふ。

「きよろりか味憎」 ぼんやりして一向こたへのなきをいふ俗語、味憎とは何ゆゑにいへるか、恐らくばつけたるまでなるべし、俗語にはかゝる事多し、又後藤味憎の事思ひ合さる、總解を見よ、

「口合ひ」 は地口、語路の類にて洒落の如きもの、一寸面白き話あれば別記に載す、

「君に命をかけ帯の」 當時流行の俗語なるべし、

「伽羅」 は昔、容貌の艶なるをも、諸ふ節のととの

つて。涙をうかめ。詞、エイ淺ましい。口はそれ程かあいひか。耻を耻とも思はぬ酔どれ。さ程にあるとも思はずに。娘を連れて嫁入し。五年餘りの辛抱。又してもく呑通しての仕損ひ。ほつとあいそもつき果た。詞、こなたが何の以前が武士。竹のふしか木のふしか。鯉節でも有るまいと。耻面かゝせどきよろりが味憎。詞、ハ、ハ、ハ、こりや出かした。武士づくしの口合どふもいへぬ。コリヤ面白いはく。迎もの事に小うたふして。一ばいしかけよ。君に命をかけ帯の。詞、コリヤ伽羅め。あいしをらぬか。おさへかとしたれかゝるを。取つて突退。詞、エ、こなたはの。迎も其根性で。女房子の面倒を。見届けることは成まい。よいかげんに隙おこしや。去状かゝそと床の間の。硯取る手もこらしめに。わざと手づよき詞の角。娘は悲しく。申しと様。今からふつゝり思ひ切り。酒吞まいといふてたべ。ユ

ひたるをも、すべて物をほめて伽羅といひ、又本妻をも伽羅の御方と呼びし由、用捨箱に見えたり、伽羅はもと香の名、これを愛するより、香なきものまでも、響る語となれるなるべし、なほ兜室記學貴の段を見よ、「おこしや」はよこせ、「三くだり半」は去狀の書式、古くよりの法なるべし、宗因が句に「歸る雁三くだり半を名殘にて」

「合口」は短刀、鏝なくして、鯉口と縁と合ふゆゑの稱、

「夢現」は覺ゆのぼんやりしたるをいふ、後世現を、夢と同じもの、やうに心得たるはあやまれり、うつゝはさめての實事なり、されど淨曲などには、いづれにもありぬべし、

レ拜ます頼ますと。取付き縋り泣居たり。母は娘を引退て。ゆり起し硯突付け。詞サア暇の狀を書いて貰はふ。コレくどふじやぞいの。コレ五斗殿。ム、返事さつしやれぬは。但しは酒を止る氣か。ヲ、止るく。ヤア何じや。酒をふつゝり止る氣か。イ、ヤ今夜は爰に泊る氣。一筆かけならかこふかと。ゆがみすゞりに三行半。詞ユリヤくかよ。是でよいか。したが五斗が隙やるに。只やつては一分が立ぬ。半分も立ぬ。ユリヤ此合口は親重代。三奴五分で買ふたれど。隙やる印じや持つていけど。投出したのも夢現。前後もしらずふしにけり。娘はぐわんぜんも泪にくれ。おろくするを。コレ徳女。詞是は母がこらしめ。異見の爲に取る暇。目が覺たら常の通り。やつぱりかはらぬ女夫の中。泣事ないと娘をすかし。伴ひ出づるを高の谷が。お内儀待つたと走り出で。此酔どれを残し置き。そなた衆斗り歸ると

「どつかと座し」 女らし

くなし、  
「おかもじ」 はおかみさ

ま、何文字といふは婦人の  
語にて、足利氏の末に起れ  
る由、前にいへり、

「そより上げ」 はゆすり

上げ、又そよのかし上げ、言  
塵集に「そよりとは、子をい  
だきあげて、そよりくと  
いふは、此こゝろなりとい  
ふ」と見ゆ、

「平打紐」 しめくよりを  
うけて書く、

「ひつしよなく」 はすげ  
なくふりはなすやうの意

は。そふうまふは成りますまい。お連合も引起して。連れていん  
でもらひましょと。呼とめられて五斗が女房。むつとせき上げ  
どつかと座し。詞コレ奥様。イヤ泉三郎様のおかもじ。こちらの男  
が。酒香のたはひなしといふ事は。最初から知れて有る。それを  
爰の御亭主が。見込があるの取次のと。めつたむしやうにそよ  
り上げ。住馴た大津の里。身代をたゝませ。今ではどこも居所な  
い。それに何じや。こちらの夫はしめくよりが宜い故。泉三郎と  
は云はぬ。まがいの平打紐と。自慢たらぐ。是かどこに箆く  
より。ひよんなお人に見込まれて。あげくの果に縁切つて。去ら  
れたら他人向。構はふ理屈はない筈。酔どればあたまから。呑  
込んでのお世話。やつかい次手にどふ成りと。御勝手次第にな  
されませ。ヤあた面倒なと出ほうだい。云いたい事を云破り。  
サアこい娘と引立て。次の一間へひつしよなく。氣づよく出た

「腹の立居もあらく」  
かけたたり、

と

るは出たれ共。心元なき氣遣ひさ。暫し小陰にぞめり。跡にうつとり高の谷は。五斗が妻に云込られ。むしやくしや腹の立居もあらく。此上はこつちも意地。ゑひとれめを引起して歸さんと。肩をゆすりつ手足を持ち。引ど正體なかりしが。酒の匂ひに鼻向の。ならぬ上猶高軒。石佛とも死人共。たとへがたなき有様に。ほつと其身も精つかし。詞扱もく。何様女房の思ひきり。是なら道理と了簡付け。よい此上は家來に云付け。たゞき出すより外なしと。勝手に向ひ聲高く。詞ヤア誰か有る。此酔どれ引ずり出せと呼はる聲。ヤア待て女房。用事有ると。鐵砲提げ泉三郎。一間の内より立出て。詞彼が亂酒をしりながら。懇望して頼みしには。深く見込し所有り。我眼力が違ひしや。笑ふ口を糺さんそのけと。火蓋を切つてねらひもなく。どうと放すから鉄砲。ひゞきに五斗はむつくと起き。詞ア、ラ

「ぎやうぐし」は仰山の意。

「陰に離れ陽にはづれ」陰陽の調子のばづれたるにて、即ち筒に音有つて向ふに音なきを云ふなるべし、「れめ廻し」ばにらめ廻し。

「侍は響の音に眼をさます」を食の子は茶碗の音に眼をさます、といふ對句あり、「五音の調子」は音響の意、五音は宮、商、角、徵、羽（音楽の調子）

「乾坤二つの間を抜け離の卦に當つて中切れたり、離の卦は離中斷とて、三の如く中絶したり、上は乾にて兄、下は坤にて弟、其中絶いたればかくいふなるべし。

「名利」はほまれとよく、

ぎやうぐしや。今打ちし鉄砲は。陰に離れ陽にはづれ。筒に音有つて向ふに音なし。ム、扱は玉なきから鉄砲。何者のしわざぞと。四方をきつとねめ廻し。勢ひかはつて立つたるは。實諺に云ひ傳ふ。心がけ有る侍は。響の音に目をさます。響を引くも愚なり。泉三郎つゝと寄り。いかに五斗。今ひゞきたる鐵砲の。五音の調子はいかにく。ホチ、乾坤二ツの間を抜け。離の卦に當つて中切れたり。御兄弟の御中。譏者の爲にたち切つて。鎌倉殿の怒りつよく。敵半途迄寄たるぞ。油斷有な三郎殿左程の御邊が何故に。錦戸伊達が計略の。大酒に正氣は亂されしぞ。チ、それこそ病と知つてもる。酒を吞ずば却て世に詔ひ祿を貪る族と云れん。元來名利は望まぬ某。一旦の契約なれば君の心は薄く共。貴殿の忠義厚きにめんじ。いかで違背有るべさや。ハア、頼もしく。然らば以前頼みごとく。一方防ぎ



「眞實縁を切る心で云々」  
川柳に、覆水の故事を「其  
氣ではついなかつたと女房  
いひ「盆の水女房はあとで  
こぼして居、

「絞纏の鎧直垂」 絞纏は  
しぼり染（くすり染ともい  
ふ）鎧直垂は、鎧の下に着  
る直垂、腕のくるぶしのあ

の武勇を顯はし。大手の大將承り。出世の身に成つた迎。一旦  
隙を取つた身が。又そいたい詫言をしてくれい。コリヤ尤じや。  
イヤお道理でござんすわいの。したが最前おまへのおつしやる  
通り。こちらの夫泉三郎。目の明かぬ男。其又女房に此詫を。し  
てくれいかへ。イヤモさうおつしやると私は。茲で穴へもはい  
りたい。眞實縁を切る心で。かゝせて取つた去狀ならず。こら  
しめに異見の爲。お詫を頼む奥様。コレ申し手を合せて拜ます  
と。涙をこぼし頼むにぞ。傍に娘は聞きづらく。こたへ兼しか  
最前に。五斗兵衛が渡したる。暇の印の合口を。抜より早く我  
咽へ。南無あみだ佛と突立る。ナア悲しやと母親が。あはてふ  
ためき取付は。高の谷も仰天し。コハ何故の自害ぞと。そゞろ  
驚く其隙に。こなたを開き泉三郎。絞纏の鎧直垂。あなたの一  
間は五斗兵衛。紫裾濃のわりござね。小手脚當も花やかに。金

たりにて、袖括そでかきり（袖の端を  
 續つちたる緒）にてくもりつ  
 く、織オリ着用次第に圖を載す  
 「紫裾濃むらさきすその割小札」紫裾  
 濃は、段々裾の方を、濃き  
 紫にて威し（札を緒にて綴  
 づるを威すといふ）たる鑑  
 割小札は貞丈雜記に「鑑の  
 札は割小札本なり（札とは  
 鑑を作るため革の小さ  
 板）割小札はいため革の札  
 を一つ宛作りて、編み連ら  
 めるなり云々、續小札は割  
 小札にせず、一枚にして堅  
 にうね筋をつけて、割小札  
 を重ねあみたる體に見せて  
 こしらへたるなり、實は一  
 枚なり」と見ゆ、なほ別記  
 を見よ、  
 「金のざい、銀のざい」さ  
 いは采配又采幣など書く、  
 軍を指揮する具、其製造及  
 近世金銀の紙白熊黒熊赤熊

のざい銀のざい。打ふりく立出て。床几しやうぎにかゝりし二人が形  
 粧さう。目めざましくも又潔いさぎよよし。手負ておひは苦くるしき息の下。父を見上げ  
 見おろして。嬉うれしき中に泪なみだぐみ。詞エ、淺あましいいは母さま。  
 いかには是迄これまで世渡りの。貧まうしき烟けむりに苦くるむ泣。なぜ夫程それほどに心迄。  
 さもしうはならしやんした。たつた今迄ちゆうへ父上を。くらひどれの  
 醉さかどれのと。お前はようも云はしやんした。東あづまにごさる兄様あにさまの  
 お耳みみへ入つたら嘸腹立まぶせ。其上無體むむに去狀さうじやうかゝせ。のぞんで暇を  
 取し身が。御出世しゆつせの姿すがたを見て。又添ついたいとの訛事わけひを。聞入きこな  
 き輿おく様頼たのみ。詞見み苦くるしい追従ついで。今では本ほんのかゝ様より。他人たにんの  
 とゝ様がいとしい。詫わする手間てまでさつぱりと。なぜ死しんで下され  
 ぬ。私わしやあんまりの耻はづかしさに。おまへのかはりに死しにまする。  
 先達まきだち不孝ふかうは赦ゆるしてたべ。詞申まことしとゝ様。母様とは縁えんきりよ共。  
 わしはやつぱりお前の子。娘と云ふて下くださんせ。おもひ出して

等の毛を用ふる由、武用辨略に見ゆたり、貞丈雜記に山鷹をつかふ具なるさいより作れるなるべしと、別記を見よ、

「牀几」は軍中狩場などに、腰をかくる具、武用辨略に其製法及圖を載せたり、

「形粧」はなりよそほひ「子い瀧ましいば母機云々」此娘の今はの歎きが、此段の泣せ場、婦女子には大受けなるべし、

「貧しき烟に苦しむ」一寸味ひあり、

「未來永々」はいつまで

は折々の。御回向頼み上げます。是ばかりが此世の願ひ。

モウもの云はして下さるな。苦しいわいのと斗にて。もたへ歎

くぞ哀なり。聞くに關女は氣も狂亂。詞コレわしも五斗兵衛が妻

耻を知らいで何とせう。最前自害と思ひしが。跡でそなたの流

浪が悲しさ。顔押拭ふて叶はぬ詫。いつそ其時死だらば。今此

憂目は見まい物。思ひ過しが結句仇と。悔涙に正躰なく。前後

も分かず泣沈む。五斗も目に持つ泪を拂ひ。詞親の未練を面目

ないと。思ひ詰めて健氣の最期。不孝ではない大孝行。やつば

り子にして下されとは。ヲ、よういふた嬉しいぞよ。未來永々

大事の我子。心の迷ひ打はれて。成佛せよと跡云さし。涙を見

せじ知せじと。こたゆる胸を三郎夫婦。推量して貰ひ泣き。袂

を絞る斗りなり。今はの徳女は目を開き。其お詞を聞く上は。

最早淨世に望はない。と、様さらばか、様さらば。東にござる

「玉の緒」は命「刀」緒  
「をれて」皆縁の語、

「妹脊」

は夫婦の意

兄様にも。御息災でと傳へてたべ。三郎様御夫婦。もふお暇申  
します。お名残惜やと斗りにて。刀を拔ば玉の緒の。きれてあ  
へなく成にけり。わつと斗りに母親は。死骸にひつしと抱付き。聲  
を限りに泣つくす。涙を拂ひ押直り。迎も娘がさげしきは。百千  
萬の云譯も。此世ではかひ有るまじ。我も共にと刃物追取り。既  
に自害と見えければ。泉三郎聲をかけ。詞コレコレ内室。娘と共に  
自害とは。恥のみ知つて義理にうとし。眞貞女の道有らば。東  
へとられし兄大三。うばひ取つて夫へ手渡し。貞心を顯さば。  
是れに増したる事有るまじ。いかにくと制すれば。高の谷も  
力を付け。其時は我々夫婦。二度結ぶ妹脊の仲人。早とくく  
と進められ。はつと歎きの死を留り。詞いかやう共御夫婦の御  
指圖は背くまじ。只此上は何事も。よきにと歎きを押包み。涙  
拂ふて出行くを。ヤレ待て女と五斗は呼留め。死生不定の憚大

「徘徊」 はうろつきあること、

「鎌倉武士は色好み」

これ軍記物にて、義經の事をいへるを見たる心地すれど、今思ひ出さず、追て取調べて記すべし。

「筒と出かけて云々」

以下鐵炮の縁の語にて書き下せり。筒とはつゝもたせとかいふものか、われには分らず、宛も角此場合、此人々の前にて、かゝるばかりしき事が、いへたるものにあらず「口薬、咽の火蓋の掛金も云々」甘き口車にの

三。切腹するか。但し又頼朝の手に掛り。空しくならば何んとする。胸を定めて赴けと。勵す詞に走寄り。泉が最前打捨し。鐵砲小脇にかい挟み。詞御尋に及ぶべき。いづれの道にも我子の大三。相果しと聞くならば。其時こそ頼朝は。我子の敵妹脊の仇。譬年月ふる逆も。鎌倉に徘徊し。鎌倉武士は色好み。筒と出かけて口薬。咽の火蓋の掛金も。はづれる様な味みを見込み。ぼんといはする二ツ玉。やはか仕損じ申すべき。氣遣あるな我夫と。勇る躰にこなたも勇み。詞でかした行との一言が。直に門出の餞別や。心はやたけにはやれ共。娘の別れに後髪。引は返さじ弓張の。盡ぬ歎を押し包み。出んとしては振歸り。見るも見するもなき玉よばひ。無常の風の烈くも。吹ちらしたる會者定離。愛別離苦を今爰に。殘して出づる都路や。あづまの空へと急ぎ行く。

せて、心をとるかすないふ事なるべし、口薬は昔の火繩筒を發火せしむる爲め、火蓋のところに置く火薬、又鐵炮に火蓋あり掛金あり「二つ玉」は二つ玉をこめたるをいふ。

「やばか」 はどうして、

「やたけ」 はもと彌猛やまたけにていよくたけき意、後には矢竹など書きて、一筋の意に用ひたり、こゝはいづれにても通ず、

「後髪引きは返さじ弓張の盡つきの月つきの歎なげき」 とかけたり、縁の語味ふべし、後髪は心のおとに残るをいふ「引き、返さじ」などは弓の縁の語、梶原景高一の谷の戦に「武士のとりつたへたる梓弓引きては人の返へるものかば弓張の月ば弓なりの月をいふ、

「玉よびひ」 は招魂の意なれど、淨曲などには、用び方異なるが如し、

「會者定離」 は會ふ者は必ず離るゝをいひ「愛別離苦」は愛する者に生死の別れをなすをいふ、いづれも佛典の語なること、前にいへり、

# 鎌倉三代記 三浦別れの段

## 總 解

鎌倉三代記　これも大阪陣の作りかへにして。三浦之助は木村重成。北條時政は徳川家康。頼家は秀頼。佐々木高綱は眞田幸村。坂本城は大坂城に當てたる事例の如し。時姫は千姫に取れるならんも。頗る作りひがめたり。近江源氏四斗兵衛の段の解を見よ。富田六郎を本。多忠朝に取れるはむごし。若宮は重成が戦死せし。若江の書かへなる事いふまでもなく。安達藤三郎の名は重成の首を獲しといふ。安藤長三郎におもひよれるなるべし。老母の事は重成の父事によりて自殺せしかば。母に抱かれて近江の馬淵村にかくれ。後幼より出で。秀頼に仕へしといふより書けるならん。其他兜に名香を焼きし事。忍の緒を切りし事など。左に記する處

を讀まば。作者の趣向の本を知り得へし。又姫を取かへしたらば。汝の女房につかはすなどいへるは。大坂落城の砌。家康千姫秀頼の室秀忠の女を助けしものに賜らんといひしゆゑ。坂口出羽守火を犯して。救ひ出したりなどいふ事より。書けるならん。

厭蝕太平樂記 其次に木村重成を招きて(幸村)足下は八千餘騎にて。闇り峠に向ふて。越ゆる敵を防がるべし。扱又密意には。神文の節(冬陣和睦の時神文の血判見届けの使者)面體を敵に知られ給へば。なさけなきに似たれども。今度は討死し給へ。基次薄田足下まで討死せば。駿翁かくの如く城將死するは。淀殿大野にあきはてゝの事ならん。と思ひ給ふべし。然らば某も無二の討死をすべし。と察せられ。無理がゝりある時は。味方の大利こゝにあり。然れば足下の討死は誠忠なり。よくく存じ給へ。重成が曰く。我れ常に忠に死し。名を發せん事を願ふ。何ぞ生を貪るの輩にならはん。

やと。大に悦び。山口左馬助。笹岡右京。同右近。清水玄蕃。今井等を初めとして。八千の人数にて。蘭奢待の名香を兜にたきて。うち出づる云々。

重成。討死の前夜。浴に入り髪を洗ひ。香を焼き江口の曲を謠ひ。小鼓をうちて情を遣り。翌朝東軍の先鋒。藤堂高虎井伊直孝の勢と奮闘して死す。墓は河内國中河内郡大字西郡にあり。俗に無念塚といふ。さて重成の死につき。井伊の士安藤長三郎に。首を取られたりとも。取らせたりとも。又庵原助右衛門なりとも。種々の説あり。

雑和筆記 元和元年五月六日。河州若江表の合戦にて。大阪方の大將木村長門守を。井伊掃部頭直孝の家人。安藤長三郎が討つて其首を取りしといふは。大なる僻言なり。長門守と双を交へ戦ひしは。掃部頭の家老庵原助右衛門なり。長門守已に戦ひ破れて。士卒

等長門守を諫めて。共に引き取らんとする處に。木村進んで再び  
攻めかゝるを。助右衛門駈け合はせ。互に馬上にて槍を以て突き  
合ひしが。助右衛門は十文字の槍を持ちしが。其少しの透すまを見て。  
木村が白幌しろぼろへ引かけて引く程に。木村馬上にたまらず。眞内向に  
田の中へ倒れ落つ。助右衛門か若黨四五人折重なり。起しも立て  
ず首を討つ。かゝる處へ。安藤長三郎馳せ來つて。助右衛門に申し  
けるは。某今日の合戦に。未だ一級をだも得ず。手を空しくせり。願  
くば此首を我に給はり候へといふ。助左衛門曰く。彼れは木村長  
門守と名乗なりのりしかども。其虚實は知らず。縦ひ長門守にもせよ。今日  
當表あたひは落着すべし。然れはこれ程の首を取らんに。又不足なかる  
べし。某は此首を得て手柄にするに足らず。汝が心の程殊勝なり。  
則此首與ふべし。但し某が討留めたる驗に。金の捻り竹に白熊の  
附たる印は。此方に止むべしとて。白幌に首を包みて。長三郎に得

さしむとなり。故に今に到て庵原が家に。金の捻り竹に白熊の附たる印ありといへり。

厭蝕太平樂記 「家康」さて重成が首を見給ひ。これを若き者共の手本にせよ。忍の緒を切つて。兼て討死を期したり。不便さよ。殊に兜も久しく解かずと見えて。忍の緒の跡付きたり。内甲を見よとてとかせ給ふ處に。一座かうくとして。其匂ひ艶なる事いふばかりなし。さて其一書に記して曰く。此名香内兜にある事。誰にても首取候方。むさく思はれんと。かくはいたしたるなり。

武功雜記 五月六日。木村長門山口左馬も。掃部手にて打取り進上申候。長門守首は汚れ申候を。洗はせ御覽なされ候。去年より相煩ひ。月額長く候へども。伽羅の匂ひ深く。鐵漿付け申候。

武者物語 家康公木村が首を實檢あるに。彼首の出づるや否や。唯今空薰をする如く。伽羅の匂ひ事々しく四邊に満つ。家康公御覽

あつて。其悴は何時の間に。左様には心付きたると仰せられて。御褒なされたりとなり。

東武實談 家康公木村が討死の志を感じ給ふ時。近臣評して曰く。長門が討死は。兼て思ひ儲しにてはあるまじ。其故は月代を剃らずといふ。家康公これを聞こしめされ。討死の志は。月代は剃ると剃らぬとは因るべからず。彼が冑を取寄せて。忍の緒を見せよと仰せられ。冑を召され見せさせらるゝに。忍の緒を結んで端を切りたり。これ再び着すべからずとの志を顯かはす。彼が討死は。兼て思ひ設けたりと仰せらる。皆人これを感じ奉るといふ。

重成の妻は。大坂夏陣の時。夫の志の固きを見て悦び。其夜心事を書し。寢室に自害せしと稱する眞野氏まのの（豊後守頼包たのりの女。美人にして貞順深く。重成に愛せらる。年十八）の外に。一人ありたるものか。傳への異なるものか。

浪華全書 木村長門守は隠れなき美男なるが此の一亂の始め。兩女駿府へ下向の時彼の地の事を窺はん爲め。兩女の侍女に化して俱に下りげるを人更に之を知らずと也。されば大藏卿局の姪に。青柳とて十七歳に成る。艶に優しく。敷島の道にも携り。琴の業にも妙にして。容色嬋娟として。無双の國色なるが。重成を垣間かきま見みて。靜心しづこころなく戀ひ焦れ。終に病の床に伏沈むを。大藏卿怪みて。之を慰めすかし尋ぬれども。流石生憎にそれとは答へ難く。兎角して一首の歌に。千萬の思ひを述べて。短冊に寫し。折を得て重成に傳ふ。

戀ひ詫びて絶ゆる命はさもあらばあれさても哀れといふ人もがな

重成返し

冬枯の柳は人の心にも春まちてこそむすびとむらめ

かくして互の心を通じけるが。上々御和睦調つて後。正月七日大藏卿これを許して。盃を取結ばせ。それより夫婦の語らひを成しけるが。程なく懷妊。其五月重成討死の時。彼婦悲嘆を押へて。江州馬淵に所縁あれば。其所の莊官を頼み立忍び。恙なく男子を産んで。尼と成り。翌年一周忌の營みねんごろに修し。終つて持佛堂にて。心閑かに自害を遂げたりといひ傳ふ。其後莊官彼孤を養育し。世に憚りて我家苗を名乗らせ。我娘を娶合せ。馬淵源左衛門と號して家督を繼がせ。其子孫今に彼所にありと云々。

厭蝕太平樂記 先刻よりの御働き(眞田本多出雲守に向ひて)にて草臥給ふべし。これにて一つきこしめし。某と勝負し給へ。私も參上仕ると相述べ。本多これを聞いて。流石眞田殿程あり。互に討つうたるゝは兵家の常なり。然らば給はらんと。土器を取りければ。家臣申しけるは。若毒酒ならんも知れず。御無用なりと留むれば。

本多が曰く眞田程の者が某に恐れて毒酒を贈るべきかとて三度飲んで返杯ありける。互に一騎がけの勝負にて當時の眞田殿に討れんは本望なる事なり。これより互に家來を遠ざけて本多が例の鐵棒にて力を入れて討つを眞田前後秘術をつくして攻戰ふ。よそ目には眞田あやうしと見えたるが幸村は心に慰み戰ふにて本多は重き棒を以て打合へば後に息つき荒々しく幸村聲をかけて突く體を見せ引ばづし西をさして逃ぐる體にもてなす。本多大音上げ穢なし逃ぐるかと跡より續いて追ひ行く。家來も供も追つて行く。幸村踏留まりて戰ふ中に本多が家來も來り。又幸村逃出して一心寺の後にあたり古井戸ありしに其中へ落ければ本多は大に悦び自身彼井戸をのぞく處を眞田下より飛かゝつて鎧の透をばさし通す。家來どもこれを救はんとする所に藪の中より増田兵太夫手勢五十人を引具して馳出で本

多が手勢残らず討取つたり。扱幸村。兵太夫に申すやう。早く本多の武具を着て。眞田を本多が討取りたりといふて。將軍に近寄りて。陣を亂せよ云々。

本多忠朝の墓は天王寺一心寺にあり。世に禁酒の神となせるは。此等の説より起れるならんも。忠朝は平八郎忠勝公の次男にして。武勇絶倫。此戦には事によりて死を決し。奮鬪人を驚かして。目ざましく討死せられたれば。かゝる事はなかるべし。

此鎌倉三代記は。紀海音作とは異にして。作者詳ならず。丸本は十段よりなり。此段は七段目に入れり。文章可なりにして。つまらぬ作者の手になれりとも覺えず。就中此段殊に傑出せり。表題に

源頼家

源實朝

## 鎌倉三代記

豊竹肥前掾  
豊竹東治

座

奥書に「安永十年己三月廿七日」とあり。海音の死後四十年の作也。

三浦別れの段

三浦別れの段

「風雅の歌人は、戀とや聞か  
ん云々」意は、風流なる  
歌人は、戀をうたふと聞く  
べき、虫の音も蛙の聲も、  
皆戦場の鬨の聲かと、身に  
しみて兜の緒を引しめ、用  
心するといふこと、薄に怖  
づる落人の身の上、よく寫  
したり、虫の音に戀をよめ  
る歌多し、續古今集に「虫  
の音もいかに恨みて眞葛は  
ふ小野の淺茅の色かばりゆ  
く」修羅の巷は戦場の意、  
修羅は闘争を事とする鬼、  
前に解せり、  
「人や三浦」心時姫「正氣  
あら悲しや」詮方なく間も  
有り合はず」などかけたり  
「氣の張弓」とかけ「がつく  
り」とうけたり、こゝら三

入り相過ぎ。されば風雅の歌人は。戀とや聞かん虫の音も。澤  
の蛙の聲々も。修羅の街の戦ひと。身に引きしむる兜の緒。若  
宮口の戦場より一文字に取つてかへす。心は更に後れねど。若  
落人と人や三浦が孝行の。念力通ず母の軒。嬉しや爰ぞと氣の  
張弓。始めてがつくり門口にかつばと轉ぶ物音は。胸にこたゆ  
る二世の縁。心時姫走り出で。見紛ふ方なき武者ぶりの。ヤア  
三浦様かとかげよつて。抱起さんも大男。詞コレ時姫でござん  
すと。いへ共正氣あら悲しや。詮方泣間も有り合はず。幸氣付  
の獨參湯。そゝぎかけたたる薬水の。一滴五臟にしみ渡り。むつ  
くと起きて。詞母人はいづくに。ヲ、お氣が付いたかなつかし  
やと、鎧にひしとすがり付く。詞ム、思ひ寄らぬ時姫殿。爰へ

浦時姫の調子、頗るよく出  
來たり

「獨參湯」は氣付けの妙

藥、白石が折たく樂の記に  
「寒傷をうれひ(父)給ひて、  
事きれ給はんとするに、醫  
の來りて、獨參湯をすむむ  
べしといふなり云々」

「母人はいづくに」須臾

も母を忘れぬを見る

「思ひもよらぬ時姫殿」極  
めてよそくしきを示す、

これ後のわな、

「わたしやお前の女房じや」

熱頗る高し「失のかは

りに云々」押かけ女房も、

これ迄の實意には、感ぜざ

るべからず、

「扱ば母に興ふる藥で云々」

愈其孝心を見る、

「先立つ涙案内にて」名

句  
「嫁女く、嬉しやお目か云

はどうして。問ふ間もをしや母人に。對面せんと行くを引き留

め。時姫殿とは聞えませぬ。何ぼお嫌ひなされても。わたしや

お前の女房じや。夫のかはりに母様の。介抱に來たが何の不思

議。ム、すりや此程より付添居るか。シテ母人の御機嫌は。今

すやくと御寢なつて。お食はどふじや。アイ何さし上げても

いやとおつしやる。けさは漸粥の湯を。少し計り。ハア聞しに違

はず。それでは御本復覺束ない。サアされ共お氣の御實正なは

獨參とやらの力。藥の驗は目下。今お前のお氣の付いたも。扱

は母に與ふる藥で。精心すくしくなつたるも。思はずしらず親

の慈悲。ハア勿體なし。お休ならばお寢顔なりと拜まんと。

母も我身も是ぞ此。一世の別れと思ふにぞ。遺の勇氣も恩愛の

肉身わけしはらくと。先立つ涙案内にて。物音響かは驚き給

はん。靜にくと。心しづめて病所の口。立寄れば母の聲。詞嫁

々」三人が詞の調子、頗るよく書きたり。

「そも三浦が歸りしとは云々」九死の中に一生を保ちて、九死一生の母を見舞ふ、いとし子に顔も合さず、障子越しに時姫をかりて、誠を籠めし教訓、主従の由來を述べ、故郷に引残りし理由を説き、病の床に子の手柄を聞き、未來の夫へ土産にせんと樂み居るをいひ、其志を勵ます所、一言一句皆忠と血との凝塊にして、死れと教ふる詞の中に、しかも無量の愛情を含めり「必ず親あると思ふなよ」「煩ふ共死ぬる共、知らせもせぬぞ便もすな」の語、忠義の二字に鍛へ上げし、武家のりしき家庭、眼の

女く嬉しやお目が覺ましたか。三浦様がお歸りぞや。義村參上仕ると。明くる隔をはたとさし。ヤレ此障子明けまいく。そも三浦が歸りしとは。坂本の城へ歸りしか。よも爰へ來る三浦では有るまい。必麗相な事いふまいぞ。嫁女よふ聞きや。夫平六兵衛殿は先君の御家人。後家の身と成り幼少の。三浦を育くらす中。宇治様より達ての御所望。頼家公の近習となし。今より二代の忠臣との。お詞が有難さに。坂本の城中へ。御奉公に參らす時。わらはも俱にと有りつれ共。イヤく悴三浦は。人に勝ぐれて孝行深き者なれば。母が傍に付添は。まさかの時に親に引かされ。未練の心付く時は。却つて親子が弓箭の名折と。此儘古郷に引残り。別るゝ時もくれぐと。必々親有ると思ふなよ。母が事は忘れても。お主に忠義を忘るゝな。煩ふ共。死る共。知らせもせぬぞ便もすなと。いひ聞かした教訓を。よもや忘

前に見るが如し「此蚊帳の中は母の城廓」の句に至つては、義の爲めに恩愛の絆を斷つ、凜乎たる氣質躍如として、大忠臣の母たるを思はしむ、世の子たるもの、此教訓に感激せざるものあらんや、

「坂本城」は大坂城にあ

て「三浦の助」は木村長門守重成にあてたるなり、總解を見よ、

「後家の身となり云々」は、

重成の父事により自殺せしかば、母の手に近江の馬淵邑に育てられ、幼より召されて、秀頼に仕へしといふより、書けるなるべし、總解を見よ、

「宇治様」は淀君に「頼

家」は秀頼にあてたるなり、

「引かづひたる蚊帳の中云

れふ様がない。それにうかく戻つてくる三浦ではない。そりや人違ひ。もし又來たが定なれば。京鎌倉兩家分目の大事の軍戰場に向ひながら。さす敵に後を見せる。狼狽た性根ならば。子ではないぞ親でない、母は病ひに臥ながら。日毎に人の取沙汰を。餘の名は聞かず我子はいかに。三浦は手柄したるか。佛神に祈誓をかけ。おのれやれ早ふ死んで。未來の夫に我子の自慢せん物と。今般の樂しみ心の嬉しさ。其未練な悴が有様。何と夫に咄されふ。最早此世で顔合はず子は持たぬぞ。此蚊帳の中は母が城廓。其おくれた魂で。此城一重破らるゝなら破つて見よと。百筋千筋の理を籠めて。引つかづいたる蚊帳の中。泣音より外いらへなし。母の教訓肝にめいじ。詞其お詞忘れねばこそ。古郷を出で、今日迄。一度便も致さね共。お命も危ふしとの。噂を聞くに胸せまり。今生で御無事のお顔をたつた一目拜

々」これ親のまごころ。

「其お詞忘れればこそ云々」

よく子の情をつくせり、

「イデ戰場へかけ向ひ云々」

孝心に引かれて、不孝をな

せし罪を詫び、立出づ様い

さましくもなよし、

「凱陣」は軍に勝ちてか

へること、勝ちて凱歌を唱

へて陣にかへるの意

「夫婦のかためない中は」

時姫戀を以て止めんとす、

三浦「夫婦となるは凱陣の

後」とはれたり、これ第一

回

「短い夏の一夜さに云々」

筆の衣につゝみて、面白く

いひたり、甘みたつぶりの

所は、讀者の賞讃に任す

「緋威にうら紫の色ふかき」

意は緋威の鑑に取つきて恨

みの色深しといふこと、恨

むなうら紫とかけ、色深き

たさに。眼くらんで侍の道を忘れし不調法。御病氣のお氣をも

ます。不孝は御免下されかし。イデ戰場へかけ向かひ。花々敷

高名して。追付凱陣仕らん。其時目出度御對面。お暇申すと立

出づる。時姫あはていただき留め。のふ待つてくださんせ。詞折

角顔見た甲斐もなふ。最別かるゝとは曲もない。親に背いてこ

がれた殿御。夫婦のかためない中は。どふやらつんと心が濟ま

ぬ。短い夏の一夜さに。忠義のかくる事も有るまい。是程迄に

つきしたふ。わたしが心思ひやつてくれもせで。心強やと緋緘

に。うら紫の色ふかき。ヲ、切なる心は察したれ共。出陣は延

されず。夫婦と成は凱陣の後。暫しの間と相待たれよ。イエ

くそれでも。ハテ聞譯なし放されよと、振切くかけ出だす

を。又拘留めて三浦様。四追付け凱陣とは偽。お前は今宵討死

に。行かしやんすので有らふがなと。いふ聲高しと口に手を。

と、縁の語にてつゞけたる文の妙いはん方なし、拾遺集に「行春をうら紫の藤の花かへるたよりに染めやしつらん」古今集に「紫の色濃き時は目もはるに野邊の草木も分れざりけり」以て作者の筆才の尋常ならざるを知るべし、又緋と紫と相應せしめたり、「凱陣とはいつぱり」と、急所を押へて心中を述べたて「未だ敵の娘じやと」と歎いても「疑ひ晴れぬ」とはれたり、これ第二回「忍びの緒を切ると聞く、殊更兜に名香の」忍びの緒は兜の緒、あごにてむすぶ、昔武士が討死を覚悟の門出には、再びかむらぬしるしに、其結び餘りを断ちしといふ、兜に香を焼く事も、同じく討死を覚悟の時せし

覆へどとまらぬ涙聲。イヤ〜是が泣かずに居られふか。討死の門出には。忍びの緒を切ると聞く。殊更兜に名香の。かほるは豫ての御物語。思ひ切つた最期のお覺悟。わたしもお前につれ添からは。何の未練にとめやせぬ〜。なぜ白地に打明けて。此世の縁は是限り。未來で夫婦に成つてやると。一言いふては下さんせぬ。やつぱり敵の娘じやと。疑ふてかいの聞えませぬ。父うへの事は打忘れ。日本國に親といふは。奥にござる母様より。外にはないと思ふて居るに。あんまり氣づよい三浦様。お前を先立て後にのめ〜。生きて居る時姫じやと。思ふてかいのと身をふるはし。つもり〜しうさつらさ。鎧の膝に夕立の涙汲出す如くなり。詞ヲ、よい推量。いか程深切を盡しても。三浦が疑ひは晴れぬわい。アノまだわたしに疑ひが。ヲ、晴れぬ子細云聞せん。がそれも益なしもふさらば。イ、エ待たしや

にて、死後に芳名を留むるといふ意にてもあるべし、又首實檢などの時、臭氣のもるゝを厭ひての事にてもあらん、やさしきならはしといふべし、名香は後に「蘭奢のかほり」とあるこれなり、木村重成が斯くして討死せしといふより書く、總解を見よ、忍びの緒と名香とにて、討死と見極めたるは、流石武士の妻、「父上の事は打忘れ」とは餘りひどすぎるが「日本國に親といふは云々」は女子の夫に示す心中の第一、言ひ得て妙

「鏡の膝に夕立の涙汲出す」  
 鏡の膝に夕立の如く、涙のしとどに落つるをいふ「夕立に「いふ」をかけたなり、もう母様は今日明日のお命」情を見せても、誠を

んせ。イヤサ放せ。イヤなふ長ふ止はせぬ。どのやうに思ふてもアノお衰なされ様。もふ母様はけふあすのお命。何ぼ潔ふおつしやつても。討死と聞き給はゞ。お歎きが思ひやらるゝ。今宵一夜は夜伽遊ばし。同じ事なら御臨終の。後で死んで下さんと。いふも泣々義村も。父母に請たる身躰髮膚。死目にあはで別かるゝかと。行きつ戻りつとつ置いつ。又もや咳の聲すれば。是こそ聲の聞納めと。思へばよわる後髪。せめて暫しは餘所ながら。萬分一の恩報じ。御薬なりと温めんと。心の内にくる珠數の。涙しのびのおのづから。短夜既に更け渡る。丑滿告ぐる。夜嵐の。闇を伺ひ立戻る二人の局。めいゝ一腰脇挟み。見やる傍への薄原。井筒の側に鍵繩引つかけ。下よりつたひかけ上るは。詞ヤア富田の六郎殿。シイ高いく。姫を奪ひ返す事。藤三めに仰付けられたれど。心元なく横目の使。時政公の御差

見せても、とまらぬ三浦が  
 孝心につけ込んで「今夜一  
 夜は夜伽あそばし」と恩愛  
 なかせにやつと第三回の成  
 功、時姫も中々の策士否策  
 女といふべし、  
 「父母にうけたる身體髮膚」  
 孝經に「身體髮膚これを父  
 母にうけ、敢て毀傷せざる  
 は孝の始なり」これより書  
 く、身體髮膚はからだ總體  
 の意、  
 「死目にあはで云々」孝  
 子の心根よく寫したり、  
 「よわる後髪」は後髪を  
 引かれて、氣のよわるをい  
 ふ、後髪は、斷がたき恩愛  
 の情にひかるゝをいふ、  
 「心の内にくる珠數の」は  
 心の中に念佛を唱ふるを  
 いふ「涙忍びのおのづから」  
 とはよくつゞげたり、涙は  
 珠數をうけ、忍びのおのづ

圖。豫て覺えし忍びの術。小松道より半丁ばかり。此井筒迄切  
 りぬかせ。忍び入つたる術の手つがひ。三浦が爰に來たりしは。  
 綑網で鯨の大功。御身達は宿はづれの。出口く番を付け。  
 姫の安否を相待たれよ。合點くとうなづき合ふ。うしろに立  
 聞く隣のおくる。人こそ來れ何者と。咎むる中にも透さぬ身が  
 まへ。詞ア、聊爾なされなお味方の者。ム、味方とは傍輩の女  
 中か。おすゑか名は何と。イヤ私はけふの役目を蒙むる。安達  
 藤三が女房。夫に力を付けん爲。とくより爰へ忍びの女。勝手  
 覺えし裏口四方。御案内申しましょ。出かしたく幸究竟。コ  
 ンく局。我れに任してかうくと。いふもひそく別る、局  
 おくるが案内に富田の六郎。裏口さして忍び入る。斯と白齒を  
 染兼る。思ひに迷ふ時も時。姫に見入れた藤三郎。尻付き小馬  
 の細目して。詞お姫様何と其守り刀。慥な證據でござりませう

からに忍びの緒を合せたり、涙の珠數の如く、忍びの緒に傳はるをいふ、味ふべし、

「丑滿」は丑三ツと書く方正しかるべし、丑の第三刻にて、今の午前二時頃に當る、草木も眠り、流るゝ水も止まるといふ眞夜中、

「局」は老女ともいひ、武家時代奥向第一の職、

「鍵繩」は端に鈎をつけたる繩にて、これを扉などにかけて登り越す道具

「富田の六郎」は鎗に斃れ井戸に落入りしといふ事丈は、本多出雲守忠朝にとれるなるべし、總解を見よ、

「藤三」此安達藤三郎の名は、木村重成の首を取りしといふ、安藤長三郎に取れるなるべし、總解を見よ、

が。それを證しるしに北條様から。お迎むかひに來た藤三郎。サアござりませと手を取れば。ふり放はなし。詞三浦之助義村が妻つまの時姫。たとへ父上でも敵味方てきみかた。敵の家へ何の歸らふ。迎むかひの人も有あべきに。名も知らぬ新參者しんざんもの。返事へんじに及ばぬ歸へれく。申しそりや悪い思ひ付きじやぞへ。鎌倉方かまくらの御評定ひやうじやうには。坂本の城は追付おちけ落る。お前の大切に思はしやります三浦殿は。けふあすの中首くびがころり。其手筈はずちやんとして有る。何んば可愛あひがらしやつても。首のない男に心中立てるは。跡の月の富とみの札かぎを買かう様やうな物じやぞへ。そんなあぶないものより。男に持つて何不足なげのない藤三郎。時姫を取とかへして戻もどつたらば。其褒美ほうびには汝なんぢが女房にやうばに遣つかはす間。心のまゝに抱だいて寢ねて。樂たのしむべしとの御上意ごじやうい。爺御ていごに屹度きと約束やくそくして來たからは。殿御とのといふはコレ此藤三。お前への心中に。顔かほに入いれはくらして來たわいなア。詞イヤ又美うくしいもので

「時政。」は徳川家康に當てたる事例の如し。

「鬪網で鬪の大功。」思ひ

まうけぬ大手柄のたとへ、

いひ得て妙

「聊爾。」は粗相又粗忽の

意

「幸究竟」は此上なくよ

きをりないふ

「かくと白齒を染められる」

とかけたり、齒を染むるは

人の妻となりたるしるし、

これを元服といふ、徳川時

代には、一家親類或は友の

中より、最も淑徳ある目上

の夫人を頼みて、筆親と名

づけ、此筆親より祝儀とし

て、鐵漿付の調度一切を贈

くる禮あり。

「時も時姫に見入れた。」と

つづけたリ、

「尻つき小馬の細目して。」

は親馬のあとにつく子馬

も有る。いやでも應でもかたげて退。サア〜お出と付きま

ふ。詞寄るなく推參者。主人に對して慮外の科。時姫が手討に

するぞ。エ、イ扱はお前は首のない男が好じやな。いかに下が

肝心じやとて。胸計りを抱て寢様とは。どうよくな御必底。御

免〜と言はせも立てず。隠せし刃にわつと計り。天窓か〜へ

て逃げて行く。時姫せきくる涙ながら。父の證の封劔を打守り

〜。詞エ、聞えぬ父上。此刀をたまはりしは。三浦様と縁切

る印に。母様を殺して歸へれと有る難題は。刃の色に顯はれて。

胸を切りさく御給物。尤親のゆるさぬ夫。思ひ初た不義の科。

お憎しみ有るならば。お手討に遊ばす共。恨とは存じませぬ。

夫を捨て歸へれとは。お情に似て情ない。徒者の成敗に。あの

下主下郎の妻となし。世上へ恥を見せしめとは。餘りむごい御

仕置。迎もつながら縁じやもの。夫と一所に自害せいと。おつ

の、よるこびて目を細くし、あまたるゝより、でれりとしたるさまをいふなるべし。  
 「心中立」は其人に向ひて、心の信を立つること、魚道大鏡に「心中は、心のよしあしをいふ沙汰にあらず、しるしとして志をあらはす謂れなり」  
 「跡の月の富の札云々」たとへ得て妙、富は無盡講の一種にして、文化年中江戸に起り、文政より天保へかけて盛に行はる、其方法は、衆人より少しづつ、金銭を出させて、富札を買はせ、時日を定めて其人を集め、金主の方にある、前に賣りたるものと同じ記號の札を、一箱の中に入れてこれをつきさし、其刺したる札を衆人に示して富り札とし、こ

しやつて下さらば。それこそ誠の親の慈悲。うらめしい父上様。あすを限りの夫の命。疑はれても添れいでも。思ひ極めた夫は一人。あの世の縁を三浦様。必ずやいのと計りにて。既に自害と三浦の介。しつかと押さへ。ヤレ早まるまい。詞只今の一言にて。日頃の疑ひ晴れたるぞ。スリヤ眞實親達も。夫には見かへぬな。ホウ神妙／＼。コレ時姫。今死ぬる命をながらへ。三浦が最期を見届けた上。夫の敵討つ氣はないか。ム、敵を討てとはそりや誰を。ヲ、外迄もなし。鎌倉の大將北條時政。エ、イ。驚くは理。誠三浦が女房ならば。夫が頼む一大事違背は有らじ。去年來佐々木高綱。時節を考へ付けねらへ共。中々討つ事能はざる。武運強き北條殿。佐々木が力に叶はねば。此討人は日本に。御身ならで外になし。迎ひの來るは究竟の時姫。招きに應じて立歸へり。父に近付き。油斷を見て一と刀。直に其

れと同記號の札を所持する  
人に、豫定の金額を興へ、  
其若干を他へ施興せしむ、  
神社佛閣の建立修葺などに  
も多く興行せり、

「汝が女房につかはす間」

此事大阪落城の砌、千姫を  
助けたるものたまばらん  
との上意なりしゆふ、坂口  
出羽守火を犯して救ひ出せ  
しに、姫本多美濃守に再嫁  
せしかば、坂口憤りて自殺  
せりといへるに、思ひより  
て書けるにはあらざるか、  
總解参照、

「入墨子」 は心中立の爲  
め、情人の名などを、腕な  
どへいれずみするをいふ、

顔へとは厄介、  
「寄るなく推参者」  
く應用さるゝ句、頼るの極  
まく、

「胸ばかり」胸よく」 詞

太刀我咽に。さし貫いて自害せば。是親を討つに有らず。時有  
つて親子主従。差違ゆるも武門の常。頼むといふは是一ツ。得  
心なれば未來は愚。五百生迄誠の夫婦。いやなれば此座切り。  
親に付くか夫に付くか。落付く道はたつた二ツ。サア返答いか  
に。思案いかにとせりかけられ。どちらが重い軽い共。恩と戀  
との義理詰に。詞は涙諸共に。詞思ひ切つて討ちませふ。北條  
時政討つて見せふ。とゞ様赦して下さりませと。わつと叫べば。  
詞ヲ、出かされたり適と。天にも上るいさみの顔色。思ひがけな  
きこかけより。窺ふおくるつゝと出で。詞聞く人なしと思ふは  
不覺。最前よりの一大事。残らず聞いた時姫殿。覺悟召されと  
いひ捨て。行くを透さず三浦之助。小腕取つて引敷けば。コレ  
くく六郎様。詞爰構はずと工の次第を。北條さまへ御注進。  
心得こなたに富田の六郎。井筒の本に寄るかと思えしが。下よ

あり、  
 「エ、聞ぬわ父上云々」以下時姫の述懐、夫に對する心中、説き盡して餘蘊なし且武士の振たる氣質よくあらはれたり、讀者必ず動く所あらん、  
 「自害と三浦の介」とか  
 けたり、  
 「只今の一言にて日頃の疑ひ云々」今まで強てつれなく當りしは、此心中を見る爲め、先づ「親達にも夫には見替へぬな」と褒詞に門をさしおきて「夫の敵討つ氣はないか」と難題を吹かけ「これ親を討つにあらす」と、不合理的な理窟をつけし倫理の説法、ほれた弱みにつけ入りて「いやなれば此座ざり」と、きびしい手詰はきついく、三浦も中々の策士、中々の辯者と

り突出す鎗先に。虚空を擱んで息絶えたり。三浦之助聲をかけ詞豫て申合はせし計略。今日只今と、なふたり。佐々木四郎左衛門高綱殿。いざこなたへと請ずれば。井戸よりぬつと藤三郎始めにかはる優美の眼中。おくるもしさつて式臺に。千萬人に勝れたる。威風備はり見えにける。眞中にどつかと座し。詞時姫の不審尤。あれに居るおくるが夫藤三といひしは。面體我に見まがふ計り。似たるを幸價をくれて命を買取り。去年石山の陣にて北條家を欺きし。佐々木が贗首こそ彼藤三郎。僅の恩に不便の最期。女が心思ひやる。龍は時を得て天地に蟠。時を失へば守宮蚯蚓と身を潜む。我君の爲に軍慮をめぐらし。肺肝を砕くといへ共。頼家公の武運つたなさ。なす事する事一ツもならず。此度の合戦は坂本城滅亡の時。天より亡ぼす主人の運命へエ、無念の鬱憤止事なく。最早計略の術盡果てたるせんにつ

見わたり、戀の重荷の恩にかちてや「思ひきつて討ませう」とは、悪むべきか、憐むべきか、兎も角かゝる娘を持ちし親こそ、氣の毒千萬」と、襟ゆるして「位で、すむ事にあらず、  
「去年來佐々木高綱云々」  
佐々木は眞田なる事例の如し、眞田が歴家康を討取らんとしてのがし、其武運の強きに感ぜし事、近江源氏の總解を見れば明なり、  
「こなたへ富田」とかけたり  
「始めにかはる優美の眼中」  
芝居にては、初めのちやりが、眉顔色髪までかはるもなかし、  
「龍は時を得て云々」  
龍を以て自らたとへ、天下に雄飛すべき英雄も、時を失ひて下郎とひそみ居るをい

まり。百計の中のとつた一計。おくるにとくと申し含め。死んたる藤三が名をかつて。産の土民に拵へ濟し。指にも足ぬ端武者どもに。安々と生捕られ。時政の前に引出だされしは。地獄の上の一足飛。詞いまだ天道捨給はざるしるしにや。さしも明察の北條殿。匹夫下郎に相違有らじと。コレ此頬に入墨を。さゝれし時の其嬉しさ。此印有る時は。白晝に往來する共。佐々木と咎むる者もなし。我れ命だに有るならば。時節を待つて。再び京都の簾下に。ひるがへさんと心のゑみ。詞折節姫を迎ひの使者。いひ付けられしはハ、ア是幸。百萬の大軍より。討取がたき一人を。討つ謀は姫に有りと。密に三浦へ内通じ。しめし合はせし計略はづれず。姫の心底極まる上は。大願成就時來れり。ハ、ハ、嬉しく悦ばしと。いさめる面色威有つて猛く。實に名にしあふ坂本の。惣大將と類なき。おくるも末座に顔を

ふ、龍は靈物、大なる時は宇宙に徜徉し、小なる時は拳石の中に隠るといへり、これより書けるなるべし、なほ別記を見よ、  
 「肺肝」はま心の意  
 「せんをつまり」ほととのつまりといふに同じ  
 「かつて」ばかりて  
 「うぶの土民に云々」佐々木、間拔けの藤三郎となりて、田植の折から、佐々木に似たりとて、召とられし事、前に見たり、これも眞田が影武者をつかひしといふ事より書けるなり、  
 近江源氏の總解を見よ、  
 「地獄の上の一足飛」は悦び勇んで、危険を犯すとへなるべし、  
 「京都の旗下にひるむへさん」は京都の天下となすをいふ

上げ。詞わたしが夫は水呑百姓。かつくのすぎはひさへ。長の病氣の貧苦の中。不相應な御恩のお貢。金銀に命は賣ねど。夫も元は侍の端くれ。生れ付いて臆病で。弓引く事も叶はぬ非力。我身をくやむ此年來。誰有らふ佐々木様に。面ざし似たが仕合せで。討死の數に入るは一生の本望と。にこく笑らふて行かれた顔。今見る様に思はれて。あなたのお顔を見るに付け。思ひ出されてなつかしう。ござりまするといひさして。ひれ伏疊の目に涙。人の歎きも身にこたへ。いづれを見ても義理ゆるに。死なねばならぬ定めりか。開く御運が定ならば。討死を思ひ止つてたへ三浦様と。くどき歎きは愚く。生はかたく死は安し。生残つて大事を計るは。佐々木殿程の器量なくては思ひもよらず。三浦などが及ぶべきか。一旦思ひ極めし討死。再び返へさぬ姿を見よと。明くる鎧の引合せ。はだ着は染まる紅に。雪を

「いさめる面色威あつて猛く」いさましくなましき  
 状見るが如し、論語に「君子は威有つて猛からず」  
 「かつく」つまらぬ「すぎはひさへ長の病氣」とか  
 けたり  
 「ひれ伏す壁の目に涙」と  
 かけたり、ひれ伏すはひら  
 たく伏すをいふ、  
 「いづれを見ても義理ゆゑ  
 に云々」此場合、此語身  
 にしみて覺ゆ「開く御運が  
 定ならば云々」死をとどむ  
 る心根極めていぢらし、  
 「生に難く死は易し」昔  
 杵臼といふ人、程嬰にむか  
 ひて、生きて趙子の孤を立  
 つると、死して忠義をなす  
 と、何れが難きと問ひたる  
 に、程嬰が生に難く死は易  
 しと答へたり、此語より書  
 く、なほ別記を見よ、

くまどる數ヶ所の矢疵。姫は悲しさやるかたなく。討死の氣は  
 付きながら。弓矢の家に生れし身が。これ程の手を貢給ふと。  
 知らぬ女の淺ましさと。すがるを拂ひユレユレおくる。詞奥へ  
 參つて母人の。介抱頼む早く。イヤノウ佐々木殿。若宮口  
 の合戦事急に及び。必死の戰場切死と極めし所に。貴殿より過  
 急の早打。此謀の成就を。見届ずして死ぬるは不忠。一ツには  
 母に今一度。忠孝二ツに命をのべ。血汐を隠す着がへの鎧。古  
 郷に歸へる心の錦。とはしらずして敵方に。後を見せしと嘲ら  
 れん事。末代迄の武門の疵。へエ思へば無念口惜し。此上の願  
 ひには。これより又も若宮の森に向ひ。一身五躰すだく。に成  
 る迄切つて切死。詞謀の先途を見ず。相果つるも武士の意地。  
 まつびら御免下さるべしと。思ひ込だるはらく涙。詞ヲ、ウ  
 尤至極。高綱も心底推察仕つる。詞エ、惜むらくは今少し。此

「明くる鏡の引合せ」 鏡

は右の脇にて引合せもの、

「紅に雪をくまどる」 雪

の肌紅の血、よくいひたり、くまどるは色どるの意、

「若宮口」 は木村が戦死せし若江に取れるなるべし、

「早打」 は急使

「古郷へ歸る心の錦」 頗るの名句一錦を着て故郷に歸る」の語より書き、故郷に歸へりしは、忠孝二つの爲めにして、心の立派なる意をかれたり、味ふべし、

「五體」 はもと胴と兩手兩足との稱なれど、からだ總體の意に見てよし、

「時政が眞實面體を見知りしは云々」 眞田夏陣の時、

木村に足下は家康に面體を知られ給へば、此度は討死

謀早かりせば。あつたら勇士をやみくと。討死はさせまいもの。残念さよ去ながら。犬死とばし思はれな。京都の武士に時政の。眞實面躰見覚えしは御邊一人。三浦が首を討ち取つて。實檢に入るならば彌我に心をゆるし。近寄る術の一つならん。時には御邊の首をもつて。敵の大將を討取らば。最期の大功忠義の第一。我は元より敵に入り。心は佐々木。面は此儘藤三郎。詞三浦が首は安達藤三が討ち取るぞ。ハ、ア忝し悦ばしや。最後の本望此上なし。冥途で再會くと。互につこと顔見あはせ。笑ふぞ武士の涙なる。涙の中に時姫は。心を定め。ヲ、それよ。詞親を捨て命を捨て。主に従ふは弓取の道。夫に従ふは女の操。不孝の罰のあたれば當れ。夫故にはいくならくの。責苦をうく共いとふまじ。父の陣所に立歸へり。仕課せてお目かけふ。一念通るか通らぬか。女の切つ先試んと。椽の鉢石

謀早かりせば。あつたら勇士をやみくと。討死はさせまいもの。残念さよ去ながら。犬死とばし思はれな。京都の武士に時政の。眞實面躰見覚えしは御邊一人。三浦が首を討ち取つて。實檢に入るならば彌我に心をゆるし。近寄る術の一つならん。時には御邊の首をもつて。敵の大將を討取らば。最期の大功忠義の第一。我は元より敵に入り。心は佐々木。面は此儘藤三郎。詞三浦が首は安達藤三が討ち取るぞ。ハ、ア忝し悦ばしや。最後の本望此上なし。冥途で再會くと。互につこと顔見あはせ。笑ふぞ武士の涙なる。涙の中に時姫は。心を定め。ヲ、それよ。詞親を捨て命を捨て。主に従ふは弓取の道。夫に従ふは女の操。不孝の罰のあたれば當れ。夫故にはいくならくの。責苦をうく共いとふまじ。父の陣所に立歸へり。仕課せてお目かけふ。一念通るか通らぬか。女の切つ先試んと。椽の鉢石

し給へがしといひしに、木村悦んでこれを請せしといふより、思ひつきて書けるなるべし、總解に明なり、「三浦も首は安達藤三が云々」木村の首を安藤長三郎がとりしといふより、面白く仕組めるなり、總解に明なり、「笑ふぞ武士の涙なる」よくいひたり、無上の悲みを笑顔にかくす、武士のならはしこそあはれなれ、「親を捨て命を捨て」武士三忘中の二、「夫に従ふ」女子三従中の一、「いくならく」ばあまたの地獄、地獄の数は大別して八大地獄、小別して一百三十六ありといふ、「脇つぼ」は腋下のくぼみたる所

心の目當。突出す鎧を障子越し。しつかと取つて。ヲ、念力見えた。眞向の通り仕課せよと。脇つぼぐつと貫いたり。ノウ母様勿體なや。コハ何故と三浦が驚き。おくるもあわて立ちつ居つ。血どめよ氣附と立騒ぐ。詞ア、何驚く事が有る。定業極まつた死病。人參の精力で死にかねる此母が。苦痛を助けるといめ

の鎧。女でこそ有れ侍の母。疊の上の病死せふより。我子と俱に討死と思へば。此切先は名醫の鍼。詞ノウ嫁女。是が勿體なふては。仕課せる事心元ない。生の親御をふり捨て。何の恩もない姑を。誠の母と此程の。起臥介抱心づかひ。深切共過分共どふも禮のいひ様がなさ。こなたに功が立てさしたさ。三浦が母をしとめたれば。生の父北條殿へ孝行の一つは立つ。又此母への返禮には。此通の功を立て下され。親を忘れて義を立つる手本の鎧先。ヲ、適手の内けなげの働。出かした嫁女。出か

「定業極まつた」は死ぬの壽命の定つた

「人參」は古名かのにけ草と稱し、其根は昔薬用として、殊に貴重せしものなり、人形の如きものを最も上品とす、もと支那朝鮮の産にして、八代將軍吉宗の時、朝鮮より移植せしものを、御種と稱す、

「苦痛を助くるといふの鎗」此切先は名醫の鍼「瀟乎たる此語、瀟乎なる氣性を見る、

「疊の上の病死せうより」武士は花々しき戦死を名譽とし、疊の上に死するを耻とす、

「生みの親御をふり捨てよ」と、今迄の深切なる心づかひを謝して、嫁の心をげましまし「十人にも百人にも」子をはめて身の果報

しやつた三浦之助。十人にも百人にも。又と有るまい忠臣を。子に持つて死ぬるおれは仕合者。果報者。逆も果報の有る事なら。女夫此世で末長ふ。孫悦ぶを冥途から。見るなら何ぼう嬉しかる。御運ひらくる時有らば。三ヶ國四ヶ國の。主となしても惜からぬ若武者を。此儘むさく戦場の。土となしかと手を取つて。見かはす顔に義村も。三才五才の其昔。御膝に抱かれし。乳房の恵に人と成り。恩を報する間もなく。お傍を放れて幾年月。御なつかしさはいか計り。只今母の胎内に。立歸へつたる心地ぞと。膝にひつしといただき付き。大聲上げて男泣。敵の娘と思し召し。御憎しみを引きかへて。重ねくの御慈悲心詞御恩をいかで忘るべき。せめて半年添もせて。思へば短い親子の縁。詞コレのお永いわかれじやないわいの。最期所はかはる共。我子も嫁も。あすは一所に死出の露。詞蓮の臺で祝言の

を悦び「とても果報のある事なら」とかこちて、世のまゝならぬを歎き「二ヶ國三ヶ國の」とくどき「此まゝむざぐ」と惜みて、氣丈の母が断ちがたき恩愛の情を述ぶる、須彌大海の大慈悲心、胸にこたへし義村が、昔を忍ぶ男泣き、時姫の感謝「コレのお長い別れじゃない」「蓮の臺で祝言の」「追つけ跡からまゐります」の句に至つては、主家滅亡に際する、武家悲慘の狀を寫して、眼前に變態たらしむ、誰か之を讀みて血を吐かざるものあらんや、古今無雙の名文と謂つべし。

「四更」 は今の午前二時  
「陽氣」 は東の白らむをいふ「鷄鳴」は曉の意  
「颯」 は深山の木のうち

酌人は此母。嫁入の輿を。未來で待て居るわいの。コレ〜かならず早ふ。追付け跡から參りますと。三人顔を見あはせて。一度にわつと叫び泣。これぞ此世の名残なる。佐々木も悲歎にくれ居しが。四方をきつと打詠め。詞既に四更も過ぎたれば、東の陽氣は是鷄鳴。南北西に人氣立つは。ハレあやしや。東國の軍勢。坂本の城間近く寄ると覺えたり。歎をとぐめ出陣の。用意有と言渡し。庭の井筒をしかつとふまへ。古木の松が枝颯の。木づたふ如くかけ上り。ハア、寄せたり〜。東は志賀越辛崎口。伊達の一黨奥州勢。勢田ヶ崎まで滿々たり。南は横川比良の口。大將の簷眞先に。坂本さしてひた寄せに。北は丹波路龜山街道。西は京道淀八幡。皆人ならぬ所もなし。詞日本一度に寄する共。恐るゝ敵は只一人。勝負の一擧はあすに有り。ヤア〜三浦。たとへ心は剛成る共。深手によりはたらき得じ。後詰の副將

に棲み、形猫に似て、短き前後兩脚の間に肉翅ありて、之を開けば傘の如く、飛上り飛下る事頗る自在なり、古名もみ今訛りても「かア」といふはこれなり、「志賀越」は奈良越の關り峠にもあてたるか、袖中抄に「北白川の瀧の側より登りて、如意が嶽を越えて、志賀の方へ出づる道なり」と見ゆ、されど語説あり、「唐崎」は滋賀郡滋賀の里の東十五町にあり、唐崎の一ツ松とて、入景の一、「勢田」は滋賀郡にあり、勢田の唐橋を以て名高し、勢田ヶ崎といへるは、大阪陣の時、石川主殿騎が乗取れる、穢多ヶ崎にあてたるにもあるべし、「比良の口」は大阪の東南平野に當てたるなるべし、比良は滋賀郡にありて、比良山其西に聳ゆ、比良の暮雪と稱して、入景の一なり、「横川」は比叡山東塔の正北一里許、滋賀郡に屬す、「龜山街道」は丹波の龜山に通ずる道、「淀」は山城國久世郡にあり、「八幡」は同國綴喜郡にあり、地理の如きは作りたるものなれば、記すに及ばれど、何かの爲にもと一筆(當てたる處あれば考ふべし)

「日本一度に寄するとも云々」語頗る壯、只一人に時政を惜す、「万夫不當」は万人にても敵すべからずといふ意、「しげらくのふと云々」木がらしすさぶもみち葉の、赤き心をとりに、散らればならぬ夫婦の命、生別又兼ね死別の門出に「名残り」に「一目」と引ともるも情なるべく、「思はず跡へふりかへる」も亦情なるべし、香のかほりは手向の煙、死出の旅路へ消えて行く、はかなきえにしを「縁のきれ目は蘭奢のかほり」とはあはれにもうつくしく、やさしく、よくいひたり。

城中より。加勢を乞んはいかにく。コハ佐々木殿共覺えぬ。一言必死と定める三浦。ケ程の手疵を何くつたく。チ、萬夫不當の大丈夫。早打立てんと高綱が。勵す勇聲せき立つ若武者。しげらくのふと時姫が。とどむる鎧。ふり切る振袖。是なふ。今が御臨終。名残りに一目といふ聲に。思はず後へふりかへる。縁のきれ目は蘭奢のかほり。無常の聲や鯨波。跡に見捨て出て行く。

「ふり切る振袖」 調あり  
「無常の聲や関の聲」 調あり、前をうけて替く。

日本賢女鑑 片岡忠義の段

總解

此段當てたる人名は例の如し。趣向は片桐且元が深き所存ありて。關東へ反り忠せし事。大野が且元登城の節。薄田石川等に命じて討取んとせし事。大坂冬陣の時。且元の營所より。矢倉を砲撃せし事。且元木村に内通して。秀頼母子に其危難を免かれしめし事。方廣寺(大佛)の鐘銘に。國家安康の二字ありしかば。家康我が名をきりて呪へるなりと。思ひもよらぬ難題を持かけしゆゑ。其申開の爲め。駿府に赴きしに。彼れより三個條の難件を提出し。其一をきかずは。兵を搆ふべき勢なり。且元今家康に双向ふの不利なるを。知り。彼れの命數兩三年を出ざるべければ。其死後に事をなすこそよければ。何事も御無理御尤に其命を聽き。偏に彼れの意を迎

ふ。故に三難件中。最も大坂に害少しと考ふる。淀君を人質として。江戸に居らしむるを約せし事。淀君が大坂存亡の場合にありて。淫佚に耽りし事。等を本として作れる事。左に載する所を讀まば。自ら明かならん。

淀君が淫佚を掩護して。亂行は味方の武士の心を探り。關東に油斷せしめん爲めと作り。日本の賢女の鑑と謂つべし。題號の來たる所とはよくもほめたり。

厭蝕太平樂記 公宣ふは。九日に蜂須賀穢多が崎にて。奪ひ取りたる三貫目玉五挺を以て。片桐が陣より矢倉一重打つおし。城内に肝をつぶさせんと。兼て中井大和を召して。城普請汝は大工の棟梁たり。其職の秘傳を以て。矢倉一重を崩す様仕れとあり。いづれの矢倉と尋ぬ。これは大切の義にて候へども。天下の御爲めゆる申上候。鴨野口の矢倉を仰付けられ候やうにと申し上る。今日秀

頼公淀公殿戦ひ見物を聞しめし。備前島にて用意あり云々。  
 これを後藤木村が二度がけといふ。扱木村引取る時。大勢の死人  
 の中より。一人血に染みたる男。竹の皮に包みし物を。長門守へさ  
 し出す。取上げて見れば。片桐よりの書状なり。今日我等陣より。大  
 筒三挺仕かけ。丑寅の角矢倉を打崩し申せと。中井大和が墨曲に  
 て。只今仕かけ申すなり。御母堂戦ひを御見物の躰。早々御引候て  
 言上と書てあり。扱又筒の事は。重て用立申さざるやう仕るべし  
 とありければ。木村急き馳入り。人數を入れて門を閉ぢる。されば  
 片桐市正。大坂を立退くといへども。忠臣の魂は變せず。大筒の役  
 に立たぬやうにしける。長門守は門にいつて。早々矢倉より下り  
 給へと申上るに。皆々驚き下りかゝる處へ。眞田大助馳來りて。早  
 々矢倉を下り給へ。父幸村申しけるは。今日不吉の氣あらはれ申  
 候。私參り早々下し奉れと申付候と申上げる。時十六七間も退き

給ふと。大地も崩るゝばかりふるひ響きて。只今迄見物ありし矢倉の上一重。打崩し土煙立ければ。皆々身ふるひし給ふ。時に重成彼書を出して。秀頼公へ渡しければ。受取給ひて本丸に入り給ふ云々。

此日大坂方には。矢倉の崩れを雨皮にて包み。門を拂ひ清め。眞田を初め。いづれも本丸へ揃ひければ。秀頼公其時片桐が書を出し給ふ。其書に曰く。

其元御働き。目を驚し感入り候。御自分と長柄堤にて別れ候節。申合せ候通り。君の御大事救ひ申し候。今日大和墨曲にて。手前の陣より大筒にて。矢倉を打崩し申候。戦ひ御見物と心得候。其元早々引取り。此趣言上尤に候。是身は敵に有つて。心は君の左右に有りと申したる事。急にて早々申入候。又大筒はさけ申し候やう。仕掛置申候。跡は御無用に候以上。

十二月十四日

片桐市正判

木村長門守殿

とありければ。諸士は涙を流し申しけるは云々。

木村が曰く。今軍師眞田殿を用ひし事。皆片桐が忠臣なり。某片桐が立退く節に。長柄堤にて別れを告げし時。且元申すは。今度は軍を止る事。叶はず。我れ敵方に身を投入れ。名を捨て、敵にありとも。心は君の左右にあり。一度は大事を救はんと申合せしが。誠に違ひなく助けしなり。其上眞田殿に書を渡し。一方ならぬ忠節を思召されよと。涙を流しける。淀君流石に耻しく思召して。誠にあやまり給ひ。涙を流しおはします。扱おのくは退出しける。扱又茶臼山にては片桐を召して。大筒のさけし事を御尋ねありければ。如何なる事や此義は存せずとなり。公曰く。其方は城方勝つ時は悦ぶや。又味方勝つ時は悦ぶや。答て曰く。君知ろし召す通

り。太閤御取立の某、只味方と申すは本意にあらず。されば寄手の勝を聞く時に愁ひ。城方の勝を聞けば悦申候。公曰く。尤なり。扱天下若予か。世とならば。汝如何するや。市正曰く。主膳は御召遣ひ下さるべし。某は伯夷叔齊が跡を立て。高野山に入りて相果候へし。公も御感涙まし。御暇を給はり。陣に歸り弟主膳に教訓し。高野山に霜月二十日に趣きける。さて。おしき事ともなり。敵も味方も。兼て忠義を知りたる事なれば。感じける。(五)

厭蝕太平樂記 秀頼公は。木村重成といひ合されて。御母公へ仰せられて。御名代として。今木源左衛門速水甲斐守に仰付られて。片桐に内意を尋ね給ふ。兩人は片桐屋敷にいたり。且元元定これを承り。兩使上座に直りて申されける。今度駿府において。御自分の御受けありし事ども。又佐渡守が掣となりたる事。御不審の第一なりと申しける。且元曰く。此方より望みし事にあらず。大御所本

田の妹未だ行かず、後家とあるが、其方も恩愛の妻を失ひしと聞く。予が媒人するとありしゆゑ、有がたしと受けたるばかり、呼取るも取らざるも、此方勝手次第なり。二人問ふ、御母公を江戸へ遣す事、請合給ふはいかん。且元曰く、城替か。又は君を大名並に參勤か。御母公を江戸へ隠居か。三ヶ條の内一ヶ條叶はずば、軍兵發せんと、の事を仰せられしゆゑ、下として上をはからざれども、人質の事を随分勧め申へし。と請合ひしなり。兩人又問ふ、左候はゞ何故に。品川にて四丁四方の屋敷地を定められて、駿府内府公の御證文取給ひしぞ。且元曰く、これ我第一の忠臣なり。兩人曰く、これを忠とは。且元曰く、此事はおのゝ千年思案しても、これ斗りは分りがたし。長物語には候へども、御聞候へ。朝鮮國取扱ひの時、大明より文錄二年に、正使謝用粹、龍岩副使には徐一貫、唯吾、遊擊將軍沈惟敬、肥前國名古屋に來る云々。沈惟敬が上官に、貴道伯智功

先生といふ者あり。古今の名醫なり。今度肥前に至り居れば。太閤の御脈を見て。命數を知るとの事なり云々。扱其次の日。又伯智を召し御脈を見せ給ふ。其座に家康公。前田利家卿。淺野長政なり。扱御脈を見て。筆紙を出し。閑所にてこれを書き云々。太閤様の御壽命六十三歳秋の中頃。利家卿の脈を見て。これも六十八歳春の末と書きたり。又次の家康公の脈を見て。これは七十五歳夏の初とあり。長政七十四歳夏の中頃と書きたり。皆々本人に見せず某に預けて。外へは洩すまじとの給ふ。依つて今の天下に。これを知りたる者某一人なり。先太閤様六十三歳秋八月十八日薨御なり。利家卿は六十八歳春三月十四日。長政は七十四歳にて六月四日死去なり。右三人の死去。伯智の書きたるに少しも違ひなし。然るに家康公は。今年七十三歳になり給ふ。さすれば今二年の御齡。先御母公を人質と定め。品川にて四丁四方の屋敷地を念入れて。これ

に一年もかゝりて。扱普請取組み。上方より材木船積にして。難風にて荷をうちしとて。これにも一年かゝりて。扱御下向と申す時。御病氣といふて半年一年延され。其内大御所逝去あらば。天下の大小名。太閤の恩を荷ひし事なれば。其時約束の天下を取かへさんものと。此一大事胸にこめて。定めたる品川の四丁四方の地ぞかしといひければ。速水今木涙を流し。扱々忠なるかな市正殿。かゝる忠臣を捨て。大野が如き者を忠臣と思召す。御母公の御心入こそ悲しけれ。此上は我々身にかへて諫めんと。立歸りて御母公へ申上げゝれば。淀君仰せけるは。これは口かしこき片桐が詞にて。誠のなき事なりとありければ。速水今木も舌をふるはし。顔をあかめ。種々御諫め申しけれども。用ひ給はず。此上は力及ばずと。右の通り片桐方へも知らせたり。(四)

厭蝕太平樂記

扱又大野修理助は。薄田隼人石川伊豆守。兩人を招

き申けるは。汝兩人用意をして。明日片桐が登城の折節。前後より伺ひよつて殺害すべし。跡は某よきやうに斗ふべし。加恩の地を申與へんと有ければ。二人承り候とて退きしが。薄田が曰く。片桐に何の罪あつて。斯の如くいひつけるや。不審におもひ。善悪知れざる中は。搆ふまじと石川と申し合す。八月二日片桐登城するに。木村長門守玄關に出向ひて。互に目と目を見合して。志の程ものをいはず知らせ合ひ。則ち重成案内し。先に立つて。松の間椽通りに來る。薄田石川兩人は。相つめて二人の通るを見て。我々たとへ誠の志にて。討留らんと思へばとて。一人は重成一人は旦元。手に合ふべきにあらず。其上我々元來その罪を知らずとて。兩人は搆はず通しける。斯て旦元重成兩人御前に通りける。其座に云々。時に片桐旦元御前へ出づる。淀君御簾を卷上げさせて仰けるは。市正汝は。我を太閤の妾なりと侮り。信長の姪なる事を知らず。已

れが分として上を輕んじ。江戸へ人質に致さんと請合ひ。剩へ本多佐渡守が聲となりたる由。此儀秀頼我にも伺はずして。何事を言合せたるぞ。不忠の次第。ことに江戸にて。自らが屋敷をば定め。其上京都に滞留し。いかなる事をいひ合せたるぞ。不届なり。誰かある片桐を召捕つて。首を刎よとなり。片桐謹て申上げる。左様一通り御聞遊ばして。御立腹は御尤に候へども。これは御爲を存じ。其上君の御大事の一儀御座候て。今御耳に入るゝと。早速御得心遊ばさるべき。御事に御座候へども。御母子様へ密々にて。申上度ぞんじ奉り候間。御聞下されがしと。平伏して願ひける。(二)

厭蝕太平樂記 市正重ねて。一大事なれば他聞を憚り申し候。御親子様ばかり。御聞入下されよと申上れば。御得心なく。淀君云々。片桐今は。逆も埒明かぬ事を知つて居直り。此度駿府にて仰付けらるゝは。大阪の城を明けて。和州郡山か。又は播州姫路に城替ある

か。諸大名並に。江戸表へ出仕をし給ふか。御母公を人質にさし出  
すか。此三つに一つ叶ふまじくば。天下の兵を擧げて。忽ち攻潰す  
べしとの御事なり。御答なさるべしと。申捨てゝ座を立つ。木村又  
送り。立關にて別れける。これより又評定のある時に。大野は薄田  
石川に向ひて。汝等何故に助けしと大に怒る。兩人申すは。片桐木  
村は我々手に合はずと答ふ。大野いよく立腹して。汝等思ひ知  
るべしといふて入る。(三)

厭蝕太平樂記 大野は若君の御守。執權たるべき旨仰付けられ。こ  
れより大野は若君附となり。おのづと奥へも出入しける。片桐は  
又太閤薨御の節。賤が嶽の忠節を思召して。新に仰つけられし執  
權なり。太閤過させ給ひしより。大野淀君の御意に入り。晝夜御側  
へ伺公し。御心に叶ふやうに取はからひければ。大野ならではと  
思召して。終には我儘の身持となり。色欲の御寵愛深かりける。修

理も勝に乗じて。我れなくはと振舞ひ。これによつて諸大名。太閤恩顧の思ひあれども。牝鷄晨すれば國家亂るゝいましめ。水上濁れば下悪水によごれる道理。誰言合すとなき信心薄くなり。盛の關東へ出仕をとぐるやうになりゆけるは。一朝一夕の事にあらず。俗家も上たる女亂るゝ時は。其家亡ぶる事少からず。忠臣は退き。佞臣は進み。終には大阪厭蝕となりしは。是非もなき次第なり。

(二)

史の順序は括弧の記號の如くなれど。本文に對照して。趣向の本を知るに便ならん爲め。顛倒して載せたり。又片桐大野が事は。近江源氏四斗兵衛の段の總解を對照すべし。

此の淨瑠璃は。寛政六年十月十三日。北堀江座の興行に上せしものにて。作者は近松柳近松松助。

片岡忠義の段

「咲く花に向ふ敵なし鎧草」  
鎧草の語より響く、鎧草は牡丹の異名（咲く花云々は、もと盛運の者に敵なしといへる語なるべし）。  
「所存は深き御與殿」とかけたり「造酒の頭」は片桐市之正且元なる事例の如し且元深き所存ありて關東方となり、身を敵におき心を君によせて、秀頼母子が危難をすくひなどいへるより書く、總解を見れば明なり、なほ近江源氏四斗兵衛の段を参照せよ。  
「上段下段」は刀鎗などのかまへ方、  
「大塲」は大野治長にあてたるなるべし、此所大野が薄田石川等に命じて且元

片岡忠義の段

咲く花に。向ふ敵なし鎧草。方八丁の大花壇。鎌倉方へ裏切の。所存は深き奥御殿。忍び込んだる造酒の頭。道をさへぎる味方の從將。あやしの曲者遁さじと。突出す鎗は芽の穂先。手練の銚先上段下段。双向ふやつ原事ともせず。またく内に右左。突いて落せし希代の手の内。絶え入る死骸じろりと見やり。奸佞邪智にて貪りし。祿を喰んだる大塲が手下。直ちに報ふ天の責。思ひ知れよと一人言。見やる花壇の庭傅ひ。御殿を下る染の井親子。遠目にそれとかけよつて。詞マアおまへは我夫片岡様。とく様おなつかしうござりますと。右と左に縋りつき。先立つ物は涙なり。造酒の頭は不興顔。詞女房娘堅固にありしな。主君時政の御誕をうけ。宇治の方を始め和田三浦。鑿にしてく

が登城の節待伏せて殺さしめんとしたるより書く總解を見よ。

「不興顔」 は不機嫌顔

「堅固」 はかたき意より

轉じてまめ、

「宇治の方」 は淀君一和

田三浦は後藤木村にあて

たる事例の如し、此大砲を

打込んだる事は、且元家康

の命により、己が陣より大

坂城の矢倉を砲撃せしが、

其前此事を木村に内通して

秀頼母子を救ひしといふよ

り書く、總解を見れば明か

なり。

「つれづれ」 はつくづく

の意。

「頼家様の守護の臣と云々」

頼家は秀頼に當てたる事例

の如し、且元は秀吉の遺命

によりて、秀頼の傳となり、

又家康の命によりて、其政

れんずと。撃こんだる大砲の。空しくなつたる残念やと。我強

夫の一言に。顔つれくと打守り。詞エ、聞えませぬ我夫。頼

家様の守護の臣と。定められたる身を以て。鎌倉方へ返り忠と

は。餘まりな人でなし。其様な淺ましいお心で有うとは。今迄

私はしらなんだはいなく。不忠者の女房娘と。坂本中の物笑

ひ。後指をさゝるゝ其口惜さ。連添ふ私は諦めもせうが。可愛

そふに此娘が。身すばらしふうろく仕やるが。お前は不便に

ござりませぬか。ユレ可愛ふはないかいな。妻子不便と思すな

ら。傾く運の坂本に。どうぞ今一度お心を。翻へしてたへ我夫

と。諫めつ泣つ一筋に。籠る忠義の貞心は。涙の雨やしきり。

花も哀を添にける。詞ヤア聞たくもないよまい言。伯夷叔齊餓

て益なしといへど。三度諫めて退くが臣下の道。夫に何ぞや。

諺者に心惑さるゝ。短才愚盲の宇治の方。主君などゝは穢はし。

務を總理せり、  
 「鎌倉」は江戸に「坂本」は大坂に當つる事例の如し  
 「傾く運の坂本に云々」一寸よく書きたり、職しの語坂本に應ず、  
 「伯夷叔齊」は周の武王が殷の紂王を討つを諫め、きかざりしかば、首陽山に入りて餓死せし人、なほ別記を見よ、此所正しき文をなます、  
 「三度諫めて云々」禮記に「爲人臣之禮三諫而不聽則逃」これより書けり、  
 「短才」は智慧の足らぬをいふ、  
 「にべもなき」は少しもればりけもなく、すげなきをいふ、前にいへり、  
 「詞もいでざりける」は出でざりけり又後の「歎くぞ道理なり」は道理なると

一旦鎌倉へ裏切の片岡。心變ずる謂なし。だまりおらうと膠もなき。親の一徹住の江は。用意の懐劍拔放し。咽にがはと突立てば。ハット驚く造酒頭。駈寄る母は狂氣の如く。詞コレく娘。其方は何で死るのじや。何でくと其跡は。更に詞も出ざりける。佳の江苦しき息をつき。詞何故死ぬとは聞えませぬ。坂本方にならびなき。忠臣無二の片岡と。人も敬ふ身を以て。鎌倉方へ返り忠。不忠ものよ恩しらずと。親の噂を聞く内にも。是迄忠義といはれた父上。深きお心あつてのこと。今日は忠義が顯るゝか。明日は手柄が知れうかと。夫を頼みに人様の。笑ひそしりをいとはずに。暮した甲斐も情ない。現在お主の御座の間へ。恐しい石火矢を。討手の役は何事ぞ。頼も綱も切果て。死る娘を少しでも。可愛と思ふて給はらば。どうぞ心をひるがへし。お主に力を添てたべ。頼上ます父上と。あやも涙に伏沈

するが正しけれど、作者はかゝる事にかまはず、且無學なり、

「石火矢を討手の役」と

かけたり、石火矢は昔の大砲なり、武用辨略等に圖を載せれば見るべし、

「頼も綱も」は、もと頼の綱も」といへるが、かく俗用されしなり、

「蘭馨」は名香、前に解せり、

めは。聞く母親は正躰なく。詞ヲ、娘出來しやつた。母も夫の裏切は。坂本方への計略と。思ふに違ふお心入れ。聞ば聞ほど情ない。何とながらへ居られうぞ。天にも地にもかけがへない一人の娘が今はの願ひ。聞届けてたへ片岡殿。可愛の我子と抱き付き、悔み歎くぞ道理なり。造酒頭は見向もやらず。詞坂本の城中に。我と思はん者はなきや。宇治の方御親子の。御首たまはらんと。忍びこんたる片岡春元。イデ本丸へ切入て。目覺さしてくれんずと。女房娘をはねのけ蹴退け。花壇踏立て駈出す。此間の一間に聲高く。詞ヤア、春元しばしく。坂本の軍師和田兵衛秀盛。宇治の御方を是に守護せり。見參せよと呼はつて。御簾をさつと卷上れば。四方に薫ずる蘭奢の香。御前を守護する和田兵衛夫婦。威儀を正して着座せり。夫と見るより春元は。秀盛が傍近く詰寄て。詞ホ、珍しく和田兵衛秀盛。

「宮商角徵羽」は音樂の調子、五聲とも五音ともいふ、かゝる語を用ひて學者ぶれる所、却つて拙く無學なるを示す、只五音にて足れり、

「底意を見抜く秀盛が」和口、佐々木、三浦（即ち後藤、真田、木村）の三人はどこまでも智勇兼備の將に仕立たり、

「腹一文字にかき切つて」且元駿府へ赴く途次、大坂城陥ると聞きて、自盡せし事などより、書けるなるべし、

「時政の難題を云々」家康方廣寺（大佛）の鐘銘を始

敵に取て不足なし。サ、立上つて勝負せよ。早くくとせき立つ片岡。ハ、ハ、ハ、造酒頭は古今の勇士。此和田兵衛は一方の砦を預る旗大將。今生の勝負ならば。望んでも立合んが。死人の相手に益なき争ひ。ナニ此造酒頭を死人とは。ナ、宮商角徵羽の五音はづれ。呼吸せまつて面色異なり。切腹したに違ひない。鎌倉方への返り忠は。其名を捨て坂本に。心を寄する大忠臣。ホ、ナ逞しと頼しと。底意を見抜く秀盛が。詞に片岡氣もゆるみ。どうと座して諸肌ぬげば。腹一文字にかき切て。疵口卷たる白布も。朱に染なす健氣の覺悟。見るに驚く母娘。扱はさうしたお心の。御生害かとはかりにて。縋り嘆くを突退け。詞ソモ時政の難題を。云ほぐして立歸らんと。思ふに違ふ鎌倉には。早押寄んと軍の結構。不慮を打れ落城しては。坂本の瑕瑾此時と。胸を定めし返り忠。又宇治の御方を鎌倉へ。

め、種々なる難題をいひかけしを、且元御無理御尤に其命を聞き、大阪の安全をはかりしより書く、なほ總解を見よ。

「結構」 はかまへ又しくみなどの意、これ本義なり、美麗な結構といふは轉ぜしなり、

「瑕瑾」 はきづ又おちどなどの意なれど、こゝは大。事といふ義に心得て、これ作者の無學より來る、強て掩護すべからず、

「宇治の御方を鎌倉へ云々」これ且元が淀君を人質の爲め、江戸に居らしめんといへるより書く、此事もと關東よりいひ出せし三策中の一なるが、且元他の二策の不利なるを知り、これを取れるなり、これが爲め淀君の怒にふれ、大野の讒に

渡さんと請合しも。老年の北條時政。つらく人相を考ふるに。

六十四歳の定命なり。今時政六十一歳。宇治の方を下すに於て

は。普請の好みに數日を送り。三年の年月を隙取らば。時政は

はや寂滅。其内には坂本にも。軍勢の催促せんと。心を碎きし

返り忠。然る所當城へ。大筒を撃込よと。時政の下知を受け。

矢文の謎にて知せし時刻。もし別條はあらざるかと。案じに胸

も安まらず。忍びこんだる甲斐あつて。麗しき御尊顔を拜し。

是にましたる悦なしと。初めて明す春元が。胸の底意の曇りな

き。夫の詞に染の井は。いと涙にかきくれて。詞コレく娘

聞やつたか。エ、其お心を妻や子に。なぜ明しては玉はらぬ。と

くにも夫と知るならば。可愛い娘を此様に。殺すまい物情ない。

一生殿御の肌しらず。賽の河原でうろくと。かはいや迷ふで

ござりませう。今日一日に夫や子の。長い別れをすることは。

遇ひ、反り忠の二股武士となりて、遂に茨木に退去するに至る。總解を見れば明なり、

「老年の北條時政云々」

且元、家康の死を俟つて事をなさんと、此考にて御無理御尤もに、かれの命を聞きしといへるより書く、此事も總解に明かなり、

「數日」の語わろし、日數とすべし、これも作者の無學をあらはす、

「矢文」は軍中矢につけて通はず文、前に和田の手に入りて、砲撃を知り、宇治の方を助けし事見たり

これ且元、矢倉の砲撃を木村に内通し、秀頼母子を助けしといふより書く、總解を見よ、

「明す」墨りなき」相應す

「賽の河原」詠歌の地蔵

いかなる宿世の報いぞと。聲を限りに伏まるべば。槇の戸もさし寄て。詞聞ば聞ほど頼もしい。忠臣無二の片岡様。女の淺い

心から。不忠者よ義理しらずと。云過したが耻しい。赦して給はれ染の井さま。詞イエイナ。現在連れ添ふ私さへ。忠義一圖

の我夫と。知らず恨んで身を捨て。娘が心槇の戸様。不便と思ふて下さりませと。返らぬ事をくどき立く。くどき立れば造

酒頭。詞ヲ、娘出かした。命を捨て此親を。諫めん爲の覺悟の自害。夫に引かへ裏切の。汚名を取しも我方便。深き計略ある

ともしらず。親の不忠を諫めんとは。異國本朝に例なき。孝行者手柄もの。親子は一世の別れとやら。息ある内に今生の暇

乞をと引寄て。盡ぬ名残のはらく涙。手負は苦しき聲をあげ。詞其お詞が冥途の土産。名僧知識の引導と。いふを此世の名残

にて。惜や苔の初花も。無常の風に散てゆく。わつとばかりに

經には十歳以下の小兒の亡者を行く冥土の由唄へど、淨曲にては、未婚の若者は皆この所へ行くやう書けり箱根靈驗記にも「養の河原をうろく」と、迷ふ娘がいぢらしい」此事は、京都の南にある佐比河原より思ひつきて、佛者の作れるなりと、前にいへり、

「女の浅い心から云々」

前に染の井が榎の月に、宇治の方へ御目見ぬのとりなしを頼みしに、二股武士に連添そなたと、口ぎたなくいひて拒みし事見たり、「現在連添ふ私してさへ云々」 榎の月の無理ならぬないふ、頗るよし、

「親子は一世」 親子は此世限りといふこと「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世、又師弟は三世とも」

染の井が。前後も分ず取亂す。涙の限り片岡も。腸を斷つ四苦八苦。五臟をしぼる恩愛の。涙しにつく春雨に。淀の川瀬の波立ちて。堤を穿つ如くなり。宇治の方も涙をとどめ。片岡親子が冥途のみやげ。不義放埒の自が。心の底を見すべしと。懷中より一ツの位牌取出し。見よや旁。詞右に印し法名ば。亡君右大將頼朝公。左はわらはが逆朱の戒名。朝夕肌身放さぬは。坂本の落城近きにとありと。心の覺悟極めし印。いかなれば口惜や。四海一黨時政が。皆仁政におさへられ。味方の武士も心々。底意の程を探らん爲。放埒だじやくも敵方に。油斷をさせん爲ばかりと。未然を察する御詞。實亡君の遺命を。立通したる一城に。敵の大軍引受けて。骸も名をも埋めども。曇らぬ操日の本の賢女の鑑といつべし。片岡悲歎の涙を拂ひ。詞ハア、天晴の御覺悟。不忠ものゝ片岡が。一ツの功は先達て。鎌倉へ奪

「惜や蒼の云々」 若き男  
女の死をいふ紋切形。

「四苦八苦」 は断末魔の  
苦み「五臓」の事も前にいへ  
り。

「不義放埒の自が云々」  
前に宇治の方が、宇治大盡  
となり、遊廓の趣向にて遊  
興に耽りし事見たり、こ  
れ淫君が存亡の場合にあり  
て、淫佚に耽りといへるを  
掩護して書けるなり、總解  
を見よ。

「右大将頼朝」 は秀吉に  
當つ。  
「逆朱の戒名」 朱は修な  
るべし。生前にあらむにめ  
佛事を修し、戒名をうくる  
をいふ（存生の者は、朱字  
にて石塔などに、戒名を刻  
めるより朱の字をかけるか  
まりとは無理無學）

「二黨」 は一統の當字なり

ひ取られし源家の白旗。術をもつて恙なく奪取たり。いざ秀盛  
殿御受納あれと。渡せば取て押戴き。詞ハア、有難し忝なし。

此一品こそ百萬騎の軍卒を得たるより。遙にまさりし味方の利  
運。たとへ時政諸軍を従へ。千變萬化に備へを立て。逢ふ坂本  
に寄るとも。何程の事あらん。詞佐々木に諸葛が智謀あり。三

浦に項羽の勇あり。我も子房が軍慮を守り。たゞ一戦にかけ惱  
し。親仁に泡を吹せんは。此秀盛が手裏にあり。詞ホ、ハ、ハ、ハ、

さもあらんいさまし。併し稀代の北條時政。人情表裏の術を  
以て。従ひなびけし鎌倉方は。朝日にのぼる勢ひぞや。チ、拙

き運の頼家親子。詞此一城の土となり。冥途の夫にお目見え  
ん。ヤア不甲斐なき御仰。普く日本六十餘州。唐天竺が一ツに

なる共。我見る目には小兒の戯れ。ヤコレ氣づかひあるなと勇  
立。詞ホ、心地よし。二股武士の片岡が。成敗は先づ此の

「日の本の賢女の鑑」。これ題號の來る所、藝なきの語、日及鑑に應ず、

「逢ふ坂本」 大坂を含む

「佐々木」 は眞田、諸葛

は孔明のこと、支那三國の時、蜀帝劉備(玄德)につかへし、智謀双なき名將、前にいへり、

「三浦」 は木村、頂羽、は漢の高祖(沛公)と共に秦を滅し、有名なる咸陽宮を焼きし、双なき勇將、前にいへり、

「子房」 は張良のこと、漢家三傑の一にして、高祖が、謀を帷幄の中にめぐらし、勝を千里の外に決すとほめし人、前にいへり、

「親仁に泡を吹かせん」 八陣に「狸親仁の首引抜き」皆家康のこと、徳川時代に斯の如き語を發するは、淨曲以外に見るべからず、總解を見よ

「手裏」 は手の中、

「人情表裏の術を以て云々」 家康は日本の歴史上、唯一の狸親仁にして、當時の英雄、盡く彼れに籠絡されしなり、彼れは、心に怒る時面に笑へり、面に怒る時に笑へり、

「朝日にのぼる」 は朝日ののぼる、これも文法の無學、

「二股武士」 は兩方へ心を通じて居る者、今も八方美人などいへる政治家あり、

「六字」 は念佛、

「大元帥」 は軍の總大將の稱、又佛書に大元帥といへる神あり、

通り。いづれもさらばと女房を。膝に引敷き我と我。首に刀を  
押當て。かき切る丈夫ゑいゝ聲。皆々一度に手を合せ。唱ふ  
六字は鯨波。此世の出陣西方の。彌陀の御國の大元帥。おし  
やはかなき三重次第なり。

# 八陣守護城 政清本城の段

## 總解

八陣守護城 加藤清正の事を作れるものにして。加藤政清は加藤清正。森三左衛門は池田三左衛門。兒島元兵衛政次は後藤又兵衛基次。佐々木左衛門高綱は眞田左衛門幸村。片岡殿は片桐且元。大内義弘は島津義弘。加藤主計助清郷は加藤忠廣。時政は家康。先君は秀吉。幼君は秀頼。お通の方は淀君に當てたるなるべし。而して此段の據處は。清正の毒殺されしといふ事。熊本城にて死せしといふ事。其子忠廣の家康に付きしといふ事。眞田後藤の兩人大阪方となりし事。兩人秀頼を助けて薩州へ落ちしといふ事。島津義弘これをかくまひしといふ事等にて。左に掲ぐる所を讀まば其大要を知るに足らん。

厭蝕大平樂記 家康公は清正推量の通り。秀頼公に上洛させ。虚弱なればよもや上洛は有るまじ。若又登るとも。官位我れより下なれば。同道して參内し。末座をさせて耻辱を與へ。幕下同前になさんと工みある所。清正が智勇を以てこれを察し。二十八日御面談ありたき旨申來る。これによつて日限相違。内裏のこしらへ公家衆も抱込み。參内の節不覺を取らせんと。四月十五日と定め。其間に金銀にてうなづかせんと。心用意の爲めに。三月上旬より二條の城に登り給ひしに。思ひがけなく火急の事なれば。豫てはからひし事空しく。皆これ清正が發明よりいづる所。所詮清正を生置ては始終妨なし。我大望成就なり難し。然りといへどもさし當る落度なければ。彼を滅すの術なし。此上は毒殺を以て失ふより外なしと思ひ。今日來りし(二條城)を幸ひ。此謀をなさんと用意したまふ云々。

秀頼公内大臣の御装束花やかに。清正幸長(淺野)左右に隨ひ。二條の城へ入り給ふ。家康公も同じく御装束改め給ひて。出迎ひ給ふ(慶長十六年三月)云々。秀頼公御用心の爲なれば。御膳部は勿論。何にても召上られず。清正幸長兩人も。奥の間にて御馳走仰付られ。相伴には池田三左衛門尉輝政。其外諸士入替り饗應しけれども。清正も用心して。一色も口中へ入れず。家康此體を見給ひ。さては。清正油斷せず。今日を過しては。我謀を用ゆる時節有まじ。いかゞはせんと心を痛め給ひしが。急に思召しつき。御手自から茶を立て給ひ。何か馳走と思へども。火急の上洛ゆる鹿末なる仕方。依て濃茶を進ぜん。三左衛門試みて。次へ廻すべしと持出で給ふ。輝政戴き試み清正へ廻す。輝政は家康公秘藏掣なれば。試みたる上は。よもや毒は有るまじと。清正も是を呑みて。次なる淺野へ廻す。幸長呑納め。何れも御禮を申上る云々。

清正。片桐市正(且元)。木村長門守(重成)。薄田隼人(兼輔)と稱す。岩見重太郎の(と)を呼びて申けるは。此度秀頼公急に御上洛有りしゆゑ。關東の手立を挫くといへども。猶心安からず。夫に付前以て申す通り。當時城中の諸士不足なり。兎角頼みあるものを撰み。召抱へられ然るべし。それにつき高野山九度村に蟄居せし。眞田安房守が二男左衛門佐幸村。父に劣らぬ器量なりと聞及ぶ。又黒田の浪人後藤又兵衛基次。彼が手並は朝鮮に於て委しく知る。此兩人を召抱へ置く時は。君の御用に立つべきものなり。是等呼出し召抱へ然るべし。清正一先づ歸國して政事を申付け。年内又々上阪すべし。其節萬事は談ずべし。先右兩人を尋出し然るべし。其答に依て仕方あるべし。其外にも勝れたる者あらば。油斷なく召抱へ申されよと談合し。御暇乞申上げ。肥後國熊本へ歸國せられける處。五月初より病氣差起り。醫療様々手を盡すといへども。日に

増して重りければ。清正大に氣をもみ。我れ命を惜むにあらねども。今死しては秀頼公の御始終心元なし。何卒今一年の壽命を保たし。來春に至らば。秀頼公廿二歳にならせ給へば。御供して參内を遂げ。是非共關白職を願ひ請はんと。是まで心勞せしに。今一年が心に任せず。殘念也と心を痛めける程に。重りて六月中旬に至りて頼み少なく見えければ。是迄なりと覺悟を極め。佛師を召して我甲冑を帶せし形を彫るべしと申付られ。木像出來しければ。是を天守に納めさせよ。嗚呼口惜きかな。秀頼公の御代となりて死なんと思ひしに。志終に遂げず。此儘に死せん事。天なるかな命なるかな。無念骨髓に徹したりと。或は怒り或は歎き。慶長十六年六月廿四日。終に卒去せり。行年五十七歳。此像熊本の天主にありて。代々神靈をあらはす事。人々の知る處なり。

此木像の事より。清正天主にて入定せり。などいふ説あるゆゑ。

此淨瑠璃にもかく作れり。昔熊本の城主細川家代がはりの時。天主に登れば。清正の靈顯れて。此城を誰よりもらひしやと問ふ。此時天下より預かりしといへば事なきも。もらひしといへばたゞりを爲すなど稱せり。又毒茶の事は毒饅頭といふ説あり。こを製せし饅頭屋今に残れりと。別にいふべし。

去る程に清正病死のよし。駿府へ聞えければ。家康公大に悦び給ふ。彼は大阪方に於て並なき智勇の武士。既に此度も四月十五日に秀頼を上洛させて。内裏に連れ出で。我れ右大臣なれば。下座に着かせて耻辱を興へ。以後内裏へ參内せざる様の。手立をなし定めて遣はせし處に。清正一人不承知にて。不意に上洛せさせけるゆゑ。此方より仕掛けし手立を間違はし。剩へ秀頼に茶さへ吞せず。連れ歸りしゆゑなす事能はず。是皆清正が智勇より出たる事なり。彼を生置ては我心中安からず。依て不便ながらも。聳三左

衛門輝政。我に心寄せたる淺野左京大夫幸長。兩人諸共茶を與へしに。さしもの清正心を許し。我が謀事に落ちて毒を呑みしゆゑに。さてこそ望み達したり。輝政幸長も近きに命を落すべし。是我が耳目の者なれども。大望には替へがたし。清正死する上は。大阪を傾けん事幸有り。先づ紀州へ御使を立られて。清正の子息忠廣駿府へ召れけるに。忠廣父清正と違ひ。淺謀無智の人なれば。家を康の威勢に恐れて。大阪へ届もなく。駿府へ下向有ければ。則家督仰付られて肥後守に任じ。七十三萬千八百八十石を領し。其上將軍秀忠公の御養女。御城より婚姻有りしゆゑ。無二の關東方に屬しける云々。

厭蝕太平記 (島津兵庫頭義弘家老の中にて。別て腹心と頼まれたる。阿陀守入道猿渡監物の兩人に内意を申含めて。漸く落城の手前。川口まで出船して。あざむきしゆゑ。さし者名將も。幸村計略圖に

當りて。大軍を打破り。其隙に秀頼公。眞田後藤乗船しける時に。折しも引汐にて水少なく。御舟出かねしに。幸村大將の御前に向ひ。君は正しく大閤の的傳。御父秀吉公は日輪の再來。亂國を静め。天下を太平になして。萬民を救ひたまふ。然れば其餘徳有るべし。海神に誓ひをかけ給へやと申上げれば。秀頼公實にもと海に向ひ。何卒此度の難を助けさせ給へと御祈念有しに。不思議なるかな引きたる汐。未だ時も至らざるに。再び滿來りて。御船恙なく岸を離れける。實にも虚弱の君にて。住馴れし大阪城を離れ。他邦へ赴き給ふは御残念なれども。がゝる時節に至り。汐の再び滿ちたるは。さすが大閤の御血筋なりと。皆々感喜の思ひをなせり。さればこそ今に於て。秀頼の招き汐と。其名高く聞えたり。それより船中御難なく。六月廿一日に薩州へこそは着船しける。加様のよしみ有る義弘なれば。豫て其用意をなし。井上谷に於て四方四町の

地を取り。新御殿を立られける。其結構善盡し美盡して。本殿、高殿、伺候の間。上段を付けて。惣金に張り付け。畫をかゝせ。二重門に番所役所を立て。高石垣に練塀なれば。あたかも城の如く。要害嚴重に出来せり云々。六月に至り。大阪落城の趣。薩州へ聞えければ。味方の人々も追付歸國と。留守の者共悦び待居ける處に。六月廿日。先達て宿割の者立歸り。明日は諸勢残らず歸國仕候と申上ければ。鳥津殿是を聞いて。前日より御用意あり。中興御馬等それらの役人。仰に依て支度をなす。廿一日に至りければ。兵庫頭義弘。折鳥帽子に中將の裝束花やかに。御近習の面々にも衣服上下を改め。御供すべきの旨仰付けられ。御乗物なれば中興を先へ昇かせ。引馬同勢を召連れ。船場まで出させ給ふ云々。去程に大阪の人々。阿陀守入道猿渡監物を先に立て。船着きに至り。先監物先へ上り。首尾よく歸國仕候と言上しければ。兵庫頭殿乗物より下り給ひ。

船場へ歩行ありしゆる。家老の面々皆馬上よりおりて。海はたへ出迎ひけるこそ。いさましけれ。

既に船追々岸に着きて、いづれも上りければ。島津義弘敷皮の上  
に座し給へば。何れも地面にひさまづき。畏こみ居ける所に。阿陀  
守入道案内者として。大阪右大臣秀頼公。眞田左衛門佐幸村後藤  
又兵衛左右に隨ひ。大阪の人数三百餘人の軍勢。しづくくと打上  
れば。兵庫頭出迎ひ。船中御難なく御光駕の段。恐悦至極と。地にひ  
れ伏してぞ敬ひ給へば。眞田後藤。御深志の段。いかばかり御満悦  
と挨拶して。是よりは兵庫頭御案内仕らん。用意の中興を直し。秀  
頼公を乗せまゐらせ。義弘は歩行立にて。井の上谷の新御殿へこ  
そは移し奉る云々。

薩摩にては秀頼同國に落ち。島津公これをかくまはれし事を。  
かたく信ぜりといふ。なほ秀頼の住はれし屋敷跡残りりと聞

く。

此淨瑠璃は。文化四年九月十一日。興行に上せしものにて。作者は中  
村漁岸佐川藤太、

八陣守護城

政清本城の段

政清本城の段

「思惟」は心を凝して思ひ考ふること、こゝは坐禪などの意に心得てよし「五劫思惟」

「人の出入はとゞむれど云々」人の出入りはとゞめても、止め得ぬ風のおと虫のれに、秋のあはれを知る様よく書きたり、古今集に「秋來ぬと目にはさやかに見ぬれども風の音にぞ驚かれぬる、同集に「秋の夜は露こそことにさむからし草むらこ」とに虫のわぶれば、

「すだく」はもと集まることなれど、今は多く嘔く意に俗用せり、伊勢物語に「むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼の集くなりけり」、

「心置く露」とかけたなり

行く先は。二重に建し思惟の間。人の出入はとゞむれど。秋を告ぐる風のこゑ。にはの本草におとづれて。すだくむしさへ物凄き。我本城へ我れながら。心置く露踏分けて。窺ひ來たる主計之助。隔の垣に身を寄せて。母のおしへの綱手繩。引けばすむしそれぞとは。豫て松虫雛絹が。手燭携へ庭におり。母様お越遊ばしたか。イザこなたへとゆふしでの。神の結ぶの縁ぞとは。思ひがけなき主計之助。のふなつかしやと雛絹が。切戸押明け走り寄り。夢ではないかと嬉しさの。後は詞も泣計り。詞ヤレ音高しく密にく。先何よりは父の身の上。餘人を遠ざけお身一人。おそば仕へ有りと聞く。物いみなりとは心得ず。コレ様子聞かして下されと。すかしなだめて尋ぬれど。こなた

前の縁、  
「引けば鈴虫を引けば鳴々」 意は引繩を引けば鳴る鈴に、其人ぞとかけて待ちたる難絹といふこと、前の虫の縁より、鈴を鈴虫、待つて松虫とあやなして書けり、頗る味ひあり、  
「主計之助」 は清正が主計頭なりしより、思ひよりつけしなるべし、實は清正の子は忠廣とて、父に似ざる暗弱の人なり、總解を見よ、  
「いふなゆふしで」とかけて「神の結ぶ云々」とつづけたり、ゆふしで（神にささぐる玉串などにかくる本綿のしで）は神の枕詞、神の結ぶの縁とは男女の縁は、之を結ぶ神ありといふより書く（結ぶの神の事は前にいへり）。

は猶もすり寄つて。詞コレ申し。久しぶりて逢ふた私。無事であつたかゝはらぬかと。たつた一言おつしやつても。不孝のものがにもよも成るまい。其御心とは露しらず。都でお別れ申してより。勿躰ない事ながら。とゞ様や母さまを。思ふ案じは何所へやら。あなたの事が苦に成つて。ほんに寝た間もわすれ兼ね逢たい見たいとあけくれに。こがれしたふて居る物を。聞えませぬと娘氣に後や先なるうらみ言。詞ホ、尤ながらそれは内證。今日國へ歸りしは。我れのみならず母御も同せん。湊口より魁せしは。父の安否を尋ねん爲め。コレ御病氣に相違有るまいかの。アイ別間の様子は母様はじめ。誰にもいふなと口留なれど。そふおつしやればおしよくも少なし。折々手はこの草の根を。出しておあがりなさるゝ計り。亥の刻よりは樓にて。御祈念有るも只お一人。ム、それにこそ子細ぞあらん。はゝ上お聞なされ

「物忌み」は神佛に祈念の時など、心身を清め飲食を慎み、穢れに觸れざるやう籠り居ること。  
 「久しぶりて逢ふたわし云々」如何にも一言かけてもらひたがるべし」とよ様や母様を」とは、ちと不孝過ぎるが「不孝のとがには」とは、よく恨みたり、「折々手箱の草の根を云々」毒消しなるべし（北條に毒酒を飲され居るゆゑ）總解を見よ、  
 「亥の刻」は午後十時、「出づる葉末」味ひあり「あるひは捻ぢ首手足なもぎ」清正なれば、如何に書くともよかるべし、「得たり」は心得たり「やらぬ」は外へはやらぬの略にて、動かさぬの意、「かん者を入れしは」の

たか。委細はこれで聞きましたと。思ひがけなき切戸のかけ。出づる葉末を見て恠り。様子あかせし案じ顔。母は娘を押しづめ別間に向ひ手をつかへ。詞都の御所より上使として。主計之助參上と。取次ぐ母の詞より。外にこたへもなき折ふし。あやしや庭の草隠れ。あらはれ出たるあまたの鼠。ユハイぶかしと三人が。すかしながむる間もなく。透をつたひて樓閣へ。連々として入るよと見えしが。俄に人聲烈しき物音。スハ一大事とかげよる障子。蹴はなす別間はともしびも。消てわからぬ真ぐらがり。數輩を相手に政清が。あるひは捻ぢ首手あしをもぎ。あたるを幸ひ人つぶて。投出す庭先主計之助。得たりと仕留るさそくの働き。後にひかへし鞠川玄蕃。政清やらぬとしつかと組む。ふりほどいてかんづかつかみ。膝に引敷き大音上。詞ヤア鼠と變じ我居間へ。かん者を入れしは時政の家來。しのびに名

なをに、れをりとしたる方、  
前後の文とよのへり、  
「時政」は相かはらす家  
康に當つ、總解參照、

「御教書」は上皇關白及  
將軍家などの下し文の稱  
「日本無双の政清を云々」  
語大にしてをよし、

「幼君」は秀賴に當つ、  
「時政の甘き詞にたらされ」  
こゝらのあたり、忠廣が徳  
川氏に服従し、秀忠の養女  
蒲生氏をいれて、妻とせし  
事などより書けるなるべし  
總解を見よ、

を得し鞆川よな。首引拔は安けれど。助けてかへすは都へ使ひ  
わが存命を物がたれと。宙に握つてエイやつと。投越すからだ  
は堀のそと。ねづみと成つて逃さりけり、主計之助は父の聲。  
聞く嬉しさにさし寄つて。詞時政公より父への使。何にもせよ  
あかしを照し。御教書御披見下されと。椽側に直し置く。開き  
もやらず高笑ひ。詞ハ、此書面見るに及ばず。日本無双の政清  
を。味方に付けんなんどは。あさどき計畧。ヤイ丁兒め。お  
のれ生年十七歳。忠孝信義のぜひをも分たず。太切なる幼君の  
守護に残せしかひもなく。時政の甘き詞にたらされ。おめノ  
と歸つてうせたは。女に迷ふ大馬鹿者。御教書など、は穢らは  
しと。引きき庭へ投捨たり。主計ははつと赤面の。詞なければ  
母が引取り。詞ソリヤ餘りお氣づよい。何ぼうお氣に叶はいで  
も。助けられたる恩は恩。あの子の難義なる事を。思ひ返して

「銚楯」の語はもと韓非子より出で、詞などの前後合はざる事なれど、中たがひ又敵味方となる意に俗用せり。

「これく、申し舅御様云々」  
雛絹が離れがたなき思ひに  
小き胸を苦しめ、人々にす  
がりて止めんとする様、ま  
たなくいぢらし。

「執しつとななししすすべきべき三三左左衛衛門門は  
云々」政清と共に毒酒を飲  
まされしなり、森三左衛門  
は池田三左衛門輝政にあて  
たるにて、厭いと餘おほ太平たいへい樂がく記きに、

給はれと。母の願ひもじひなりし。思案を極め主計之助。座を  
立上つて。實に誠。詞親子兄弟銚楯と成るも。戰國の當武士の  
ならひ。母上御無事とかけ出すを。ア、コレく。其一言が敵  
味方。侍の義と云ながら。母が悲しき此子が思ひ。後の歎を推  
量して。マアくまつてたもいのと。母が諫に雛絹も。たとへ  
お返事遅く共。父上都にましますば。お首尾悪ふはなされまい。  
頓て母様お越まで。待つて給はれ待つていのふ。詞コレく申  
し舅御様。親子夫婦の生別れ。不便と思し只一言。お留なされ  
て下さりませ。お慈悲くと手を合せ。拜む内にも戀人に。は  
なれがたなき女氣は。哀にもまたいぢらしき。詞ホヲ娘が願ひ  
去事ながら。執しつとななししすすべきべき三三左左衛衛門門は。とくに落命いたしつら  
んが。女の縁に主計之助。其身を立つる心なるや。アイヤ父上  
の御意共存ぜず。三左衛門殿死去有る事。御存じ有れば猶もつ

家康の爲めに清正と共に、二條城にて毒茶を飲まされし事見わたれば、これ等より書けるなるべし、輝政は家康の婿、婿までも犠牲に供するとは、さても残忍、總解を見よ、  
「誓へ如何なる變ありとも六十餘州と云々」 語頗る壯に頗る威あり、政清の詞は前後すべて斯の如し、  
「此身此ま、樓閣にて云々」 清正熊本城にて、定に入れりなどいへるより、書けるなるべし、細川家代がはりの時城に上れば、清正の靈出來りて、咎めしなどいふ俗説あり、此等は清正、甲冑を帶せし木像を彫らしめ天主に納めたるが、代々神靈をなす由、見わたるよりの説なるべし、總解を見よ「親子の對面は限り云々」

て。御身の上氣づかはしく。立歸りしは變有る時。此本城を守らん爲め。ハ、ハ、ハ、何さく。警いかなる變ある共。六十餘州と釣がへの政清が此本城。いつかなく人手に渡さぬ。此身此ま、樓にて。四海を守護する我精神。跡搦はずと幼君へ。忠義を立つる心を見せよ。親子の對面は限りと。烈しき詞諸共にはたと立切る障子の内。ハア其御賢慮を聞く上は。所存を立て御目にかけん。此一封は雛絹殿。後にて披見致されよ。母上様おさらばと。云捨てこそかけり行く。ノフユレ待つてと雛絹が。夫をしたふ娘氣に。よへと詮方泣倒ふれ。伏沈みたる計り也。泣聲聞いて母柵。こかけを立出で傍に寄り。詞ノウ雛絹。何ぼうこがれしたふても。主計殿には添れぬわいのふ。ヤアか、様か。そりやまたなせでござります。テ、驚きは尤ぢやが。ユレ夫の最期もお主の業。恨にかひなき家來の我々。縁を切らねば

烈しき氣性見るが如し、  
「夫の最期もお主の業」  
身は主の物、

「引別るゝも操じやと」  
らひ操、

「早まつたとは愚の仰せ云々」  
戀のいろはのきれて、  
結ぶに離き身の因果  
思ひつめたる双の先、  
死する心中またなくあはれなり  
「未來は女夫にならるゝやう」とは、  
極めていぢらし、  
これ後に政清が縁を結んで、  
満足せしむる伏線、

主計殿は。時政公に助けられし。恩に命を捨ねばならぬ。ユレ引別るゝも操じやと。諦てたもいのふ。證據は殘せしソレ其文と。忍びのともしび差寄すれば。涙ながらに押ひらき。詞ナニ父の仇たる時政の忠臣。森氏の娘なれば。所詮添はれぬ敵同士。縁切る上は一旦の。恩も情も是限り。ハアはつと計りに讀さして。正躰涙にくれけるが。覺悟極めて懷刀。咽にがはと突立つれば。はつと驚く母と母。ヤレ早まつた何事と。抱起して介抱に。娘はくるしき顔を上げ。詞ノウ早まつたとは愚の仰せ。主計様に添れずば。斯成り行くは身の覺悟。ア、思へばはかない私が身の上。父の最期といふ事も。今聞く迄は夢にもしらず。御無事でござると思ひ詰め。仇にくらした不孝者。其罪科が報ひきて。二世をちかひし戀中も。けふを限と成果しを。可愛い事じやおぼし召し。未來は女夫にならるゝやう。とり

「詞泣き倒れ」 とかけた

り、

「六具」 は鎧の胴、籠手

袖、脇楯、腰楯、體當の稱

なれど、具足着用の意に見

てよし、

「妙法蓮華の七字の旗」 清

正は日蓮宗の信者、法華の

題目を記したる指物を用ひ

しといふ、今も清正公とて

同宗の信徒は、尊敬一方な

らず、

「三軍」 は全軍の意に見

てよし、

「唐國までも今の世に云々」

清正朝鮮八道を蹂躪し、明

軍を破つて大に武名を輝し

泣く子も其名を聞けばたま

りしといふ、これ等の事よ

り奪けるなるべし、朝鮮に

ては幟に鐘馗の代りに、清

なし頼み上ますると。今死ぬる身の際迄も。輪廻に迷ふ心根を。

思ひやりつゝ二人の母。いちらしいやら可愛いやら。胸一ぱい

にせき上げて。とかふの詞泣倒れ。心も亂るゝ計り也。詞ホ、

雛絹が最期の願ひ。加藤主計之助清郷。是にて承知いたせしと。

ひらく閣には父政清。以前にかはる六具の出立。妙法蓮華の七

字の旗。主計が俗名書添へて。弓手に押立て座したる姿。武威

三軍に鳴ひゞき。唐國迄も今の世に。おち恐るゝも理なり。妻

は見るより。詞ヤアくく我子の佛果を其簍に。お書き有り

しは死ぬるのを。御存じ有つてか何故と。問もうろく柵親子。

俱に様子を氣遣へり。詞ナ、時政の恩を請けまじと。我強くい

ひしは都にて。命を捨よとおしへる謎。親が胸中よく知つて。

歸國以前に雛絹へ。離縁の状を認めしは。女に心引されず。忠

義に死ぬる忪が潔白。ハ、ア健氣にも出かしたり。それに連添

正の像を畫くなどいふ、俗  
 既さへあり、  
 「せめて未來は佛果の縁云々」  
 未來は女夫にならるゝやうと頼める首尾、  
 「寂光淨土に生なうげ云々」  
 と英雄が情の爲めに閉づる眼は、婦女子千行の涙にまさわり、寂光淨土は只淨土の義に心得てよし、四佛土の一にして、无爲涅槃界なり、圓教の佛身こゝに住すといふ、  
 「其お赦しを聞きまして云々」  
 夫を天地にもかへぬ心根見はていたはし「あの世の道で待合せ云々」無眼の情をいふ、淨曲以外に見る可からず、無双の名句、「生れてこのかた二親の云々」  
 母の歎き身にこたへて覺ゆ「夫婦となつた其日から云々」はかなくもはか

ふ身程有り。娘が貞女も育がら。我子へ立つる心の操。ホ、適なり雛絹。敵と成り味方と成るも此世の業。せめて未來は佛果の縁。結んでくれんと此簞に。二人の俗名書付けしは。親がゆるせし夫婦のかため。ユリヤ寂光淨土に生を受け。妻よ夫と睦じう。誰憚からず添とげよ。南無妙法と閉ぢる目に。不便の涙はら〜。唱ふる經も口の内。手負の耳に通じけん。詞エ、有難ふござります。其お赦しを聞きまして。嬉しう成佛いたしまする。主計様にも覺悟とは。悲しい中にも私が樂しみ。あの世の道で待合せ。一ツ所に參ります。二人の母様舅御様。御息もじでと計りにて。娑婆の名殘はにつこりと。笑ふて息は絶にけり。ハア悲しやと柵葉末。死骸に取付き抱きしめ。身も世もあらぬ悔言。詞生れて此かた二親の。手もと放れぬ此娘。よく〜思ひしたへばこそ。百里二百里此國へ。勇すゝんで只一人。

なし、何たるあはれぞ、

「かひなきからを右左りお  
しや可愛」とかけたり

「露置く葉末柵も」 味ひ

あり、

「満来る沙の荒岬云々」

く、いひたり、下の灘右衛門

を呼起す、

「くんづころんづ」 は組

みつころびつの音便、

「雲霞」 は行方分らずに

なりしをいふ、

「八十川の其源は云々」 意

は多くの流れの其源は異に

するも、近江の湖水に合ひ

て、一大湖をなすが如く、

心を合したる末を見よ、必

ず大事を成就すべしといふ

来た心根がいぢらしい。夫婦となつた其日から。國と都へ引わ

かれ。死ぬる今迄一夜さも。添ふしもせぬ薄い縁。むすんだ神も

恨めしい。それ計りかは夫にもおくれ。残る一人のいとし子の

自害するのを見よふ。渾。はるくきたは何事と。かひ亡骸を右

左。おしや可愛の數々を。露置く葉末柵も。かぞへ立く。涙

くは漲りて。満くる沙の荒岬。浪打寄する如くなり。歎きの

中へ灘右衛門。息を切らしてかけ戻り。詞ユレ旦那殿。こかけ

に忍んで様子を聞き。息子殿を助けふと。追つかけた一里の松

原。長持へ入れかけ出す所。南無三寶とはしり付き。組んづこ

ろんづして見たが。多勢に無勢雲霞。あとに残つた此状箱。上

書は加藤氏へ。湖水の何某。お前は知つてござりますかと差出

す。様子を聞いて政清は。物をもいはず封押切り。詞八十川の

其源はかはる共。心近江のするをみづうみ。フウハレ心地よき秀

こと「心近江」とかけ、末をみ(見)づうみ」とかけたり源と近江にて、近江源氏なることを利かしたる積なるべし(八十川や其源はかはるともにて、多くある源氏の流れの中にて、近江源氏たる由を利かしたらば聊面白きふしあるべけれど作者は和歌に、それほどの心得なかるべし)此歌作者の自詠なるべし、随分苦心して、巧みに作りたる積ならんも「末をみづうみ」などいへる所、已に歌の何物たるを知らざるを見る、秀句などとは以ての外、和歌は散文とは其しらべを異にするゆゑ、近松巢林子竹田出雲の如き人にて、手際よく詠むことは覺束なし、(俳諧狂歌の如きは知らず)まして其他の者に於てをや

句じやよなど。吟ずることなたに聲高く。詞ホ、ウ其歌の心は大内義弘。とくよりは是にて承知せり。政清殿に對面せんと。明智の大將物かげより。欣然として出たまひ。携へ持つたる藁づとの。中なる劔取り出し。詞燒刃にあらはす足下の本心。よく見られよと差出せば。子細有らんと頂戴有り。とつくと詠めて拔放せば。俄に一天照かゞやき。北斗に映ずる劔の光。赫々たる其有さま。政清はつと押いたゞき。詞これぞ北辰尊星より。授かる所の七星丸。それがし年來守護せし名劔。幼君の御味方に成るべき勇士を撰出し。劔を渡たし下されよと。片岡殿へ賴置きしかひ有つて。劔を證據にきたられしはそれなる船頭。誠は備前の住人兒嶋元兵衛政次殿。今日只今幼君の。味方に屬する割符の一腰。慥に落手仕ると。劔を鞘に納むれば。詞異義なく兒嶋元兵衛。眞中にどつかと座し。詞ホ、ヲ適眼力政清殿。片岡

七

七

七

されば古歌を其まゝ引用すれば宛も角、作者の自詠なぞ來ては、お座に出せたものにあらず、又改めなどしたるは、多く金玉の詠を瓦礫にするの失敗に終れり「大内義弘」は島津義弘に當てたる事、總解を見よ「北斗」は北極近くに現はるゝ、食狼、巨文、祿存、文曲、真廉、武曲、破軍の七星(俗に劍星などいふ)の稱にして、和漢共に古來頗る尊崇せし星なり、殊に第七座の破軍星は、斗柄又搖光とも稱し、劍の形を圖して破軍の劍先など稱し武家の最も敬信せし者なり、軍を始め凡ての勝負事、これに逆へば必ず破ると、名劍などには、北斗の形を刻みたるもあり、又靈劍には北斗の光の映するともいへり、

氏に盟約せし。我本名を藁苞に。包みかくせし劍の割符。兒鶉元兵衛政次なり。某味方に屬する上は。先君恩顧の諸侯とかたらし。スハ合戦の時きたらば。近江路に根城をかまへ。美濃信濃路へ出張して。時政が多勢を切所にさゝへ。追詰く泡吹せ。狸親仁が白髮首。引つさげんは瞬く内。我方寸の胸にありと。詞勇みすゝみし勢ひは。軍師とこそはしられけれ。義弘につくと打笑ひ。詞ホ、ホ、こはおこがましき兒島が廣言。國戚たる北條に。双向ふ心底聞捨ならず。併小田家より恩義を請し事なれば。只何事も餘所に見ん。今の一首に八十川や其源とあらはして。主計之助を助けしは。近江源氏に隠れなき。佐々木左衛門高綱ならん。二人の軍師揃ふ上は。最早安堵の加藤氏。我も察祝仕ると。始終をはかる名將の。詞は鉄石うしろ楯。げに大國の主なり。政清きつと空打ながめ。詞アレくく。光りを

「北辰尊星」は北斗のこ  
と、別記を見よ、七星丸と  
稱する刀ありしなるべし、  
未だ取調べざれば追て記す  
べし。

「片岡殿に頼の置きし云々」  
片岡は片桐に當てたる事例  
の如し、清正歸國の節眞田  
後藤の兩人を城中へ招くべ  
き由、片桐にいひ殘し片桐  
又城を立退く時、木村にい  
ひ傳へしなどいへるより  
書けるなるべし、此段及義  
經腰越狀の總解を見よ、  
「兒島元兵衛政次」は後藤又  
兵衛基次にあつ、兒島をこ  
とうとよませ、後藤にかよ  
はしたるなり、備前の住人  
とせるは、兒島（こしま）高  
徳が備後の人なるよりいへ  
るが、後藤が播磨の生れと  
いへるより書けるか、いづ  
れも隣り國なり、後藤が大

うしなふ將星の。今まで地下に落ざるは。北辰尊星感應あり。  
百日の満願に。佐々木兒島の兩大將。味方にくはへし今月今  
日。アラ悦ばしや嬉しやと。いふ息ざしも心のたるみ。忽ちか  
はる其面色。見るに葉末がまた恠り。扱は噂に違ひなき。お身  
の惱か悲しやと。すがり歎けば。ヤアおろかく。詞時政がた  
くみはしりながら。いなまば違勅におとさん方便。元より命は  
天にあり。とはいひながらお通のかた。斯なる果は御存じなく。  
歸國のみぎり幼君を。われにいたかせくれぐも。おたのみあ  
りし其時は。勿躰なしともいたはしとも。百萬軍の強敵を。搦  
ひしぎし政清が。五躰をつらぬき。肉をさくよりつらかりし。  
其心を休めんと。百日の今日まで。胸をくるしめ身をくるしめ。  
祈りくし甲斐有つて。念願とゞきしわが身躰。此樓にとゞむ  
べし。詞三左衛門の落命も。時節とあきらめしがらみ殿。葉末

阪方となりし事は此段及義  
経腰越狀の總解を見よ、

「狸親仁」は時政即ち家

康のこと、彼れは煮ても焼  
ても喰へぬ親仁ゆゑかかれ

にくむ者、かく稱せしもの  
ゝ如し、かゝる語は、當時

淨曲以外に見るべからず

「方寸」は胸中の意「方  
寸にあり」にてよけれど、

句調の爲め、かく書けるな  
るべし、

「國威」は皇室の外威を

いふ、二代將軍秀忠（家康  
の子）の女、後水尾天皇の

中宮となりしよりいふか  
又同將軍の女、秀頼の室と

なれるより、大やうに書け  
るか、

「小田家」は織田家にあ

てしなるべし、

「佐々木左衛門高綱」は  
眞田左衛門幸村に當てたる

も共にさまをかへ。都のせがれが先途を見よ。さるにても嫁離

絹。さぞやせがれを待わびて。くさ葉のかけを行なやみ。まよ

はんことの不便やと。百連の明鏡を。てらすがごとき兩がんに

血汐をそぐばかりなり。歎きをとぐめ兒島元兵衛。此うへは

葉末殿しがらみ殿。此政次がつき添て。子息の安否を尋ねし上

佐々木にてうじて治國の計策。日本はおろか唐高らい。双向ふ

奴ばらみなごろし。幼君四海太平を。其樓に安座して。見ぶつ

あれよ加藤殿と。つゝ立あがれば大内義弘。詞ホ、チいさまし

ゝ兒島政次。しかし天うんいたらずば。幼君の御供して。我本

國へ來られよと。残す詞は義弘が。妻と妻へも末々を。いさめ

て直に歸國の船路。女心の二人連れ。こなたも法の蓮葉に。至

らせたまへ南無妙法蓮經くく。となふる功德は先の世に。

頓てぞめぐり愛別離苦。會者定離とは聞ながら。かへらぬ事を

事例の如し、眞田が大阪方となりし事、此段及以上各段の總解を見よ、

「安堵の加藤氏」 とかけたり、いやらし、

「察祝」 は察して悦びをいふことなるべし、

「光りを失ふ將星の云々」 惑應の様を書けるなるべし、「光りを失ふ」は星は隕つ秋風五丈の原の口か、將星は北斗なるべし、

「いなまば達勅に落さんてだて」 勅使より賜ふ酒に、毒を仕込み飲されしやう作れるなぞ、何事も總解を見よ、

「命は天にあり」 史記高祖本紀に「命在天雖一扁鵲何益」、

「御通の方」 は淀君にあてたるなるべし、淀君が清正に、秀頼の事を頼みしなどいへるより、書けるなるべし、

「か身體此機闇にとどむべし」 前にいへる木像の事より書く、委しくは總解を見よ、

「さぞや悴を待わびて云々」 鬼將軍ともいはるゝ英雄に、此涯りなき恩愛の情を吐かしめたるも面白く、句も亦珍無類、

「連の明鏡」 連にても通ざるにあられど練と書きたる方正しかるべし、よく練り鍛へて作れる明鏡、白氏文集に百練鏡の詩あり、別に載す、

「諜じて」 はしめし合して、

「天運いたらすば幼君の御伴して云々」 大阪落城の砌、眞田後藤の兩人、秀頼の供して、薩摩へ落ち、島津義弘之をかくまひしといふより書く、總解を見よ、

操かへし。おさらばさらばの聲ばかり。後に名ごりは升がたを  
出づる本城外曲輪。注連引はへし樓に。端座合掌古今の英雄。  
見上る空に星象光。てらす威とくぞありがたき。

「頓てぞめぐり愛別離苦」とかけ「會者定離」とつゞけたり、愛別離苦は愛する者に、生き別れを死に別れをする苦みにて、四苦の一、會者定離は會ふ者必ず離るゝといふ意、いづれも佛教の語、前にいへり、  
「かへらぬ事をくりかへし」 味ひあり、  
「名残りば升がた」 とかけたり、樹形は、城の一と二との門の間にある、郭の狭く方形をなせる所にて、武者溜ともいふ、  
「端坐合掌古今の英雄」 英雄將に入定せんとす、其状見るが如し、  
「見上ぐる空に星象光」 北斗の惑應をいふ、星象光に清正公を含め「てらす威徳」とつゞけたり、

## 淨瑠璃通解第四篇別記

さい さいは采。又采配又采幣など書く。武用弁略に其制法及圖を載せたり。ついで見るべし。貞丈雜記に「さい(又さいはいともいふ)」といふ物。古はこれなし。源平の戦の比より。室町殿の代に至るまでも。これなし。然る間。源平盛衰記。平家物語。保元物語。平治物語。東鑑。太平記等には見えず。前九年後三年等の繪卷物にも見えず。甲陽軍鑑に源賴義朝臣。朱ざいを新羅三郎に給はる由。見えたれども偽なり。又高氏卿佛家の拂子にかたどり。作られしといふも又偽なり。信すべからず。ざいは武田信玄の家にて。作り始めしなるべし。上古の法式といふ事あるべからず。鷹匠の家にて。山鷹(クマタカ)の(こと)をつかふ道具に。ざいと名づけて。竿の先に細く裁ちたる紙を。圓くゆひ付けて。それをふりて。鷹をつかふなり。この鷹の道具より。思ひつきて。軍のざいを作りたるなるべし。

御奏聞の處。三月二十六日。御勅使日野輝資飛鳥井大納言殿。爲勅詔。悉くも被成御院宣。則南都大衆致頂拜御請申す。翌日三月二十七日。信長公奈良の多門に至つて云々。三月二十八日辰刻。御藏開候へ訖。彼名香。長さ六尺の長持に納り有之。則ち多門へ被持參。御成之間於舞臺懸御目。任本法一寸八分被切捕云々。一年東山殿足利義政被召置候以來。

將軍家御望之旁數多雖有之唯ならぬ事候の間不相叶云々野史本記に續王代一覽を引き六月慶長七年内大臣家康遺本多正純伐東大寺黃熟香參議右大辨藤原光豐左少辨藤原總光右少辨藤原資俊菴焉今上天皇も奈良へ御臨幸の砌御切りあそばされしとかや大なるもの長さ五尺一寸重量二十三貫目餘小なるもの長さ一尺ばかりと普通には此香名もと黃熟香と呼びしを聖武天皇東大寺の三字をかくして蘭奢待と名づけ給ひしといへど本草別集に谷響集に蘭奢待はこれ胡國褒稱云々朱子語錄曰王導嘗謂胡僧蘭奢胡語之褒譽也といへれどそれにては待の字へ何とつゞけて心得べきか憶ふに蘭奢蘭若は一音にて空靜にして諸總務を離れたる處にて寺と稱す待は遇なり俟なり閑靜の處にあしらふべき心にて名づけたるにやといへり。

割小札 貞丈雜記鎧の札は割小札本なり割小札はいため莖にて札を一つ宛作りて編み連ぬるなり或は薄きたひがねを札に作りて革の札と一枚ませにするこれを子鐵といふ古書にこがねませたる鎧といふは此事なり古代の鎧皆割小札なり續小札は割小札にせず一枚にして豎にうね筋をつけて割小札を重ねあみたる體に見せてこしらへたるなり實は一枚なり小札を一枚づゝわらぬゆゑ續小札といふ略儀なり近代の鎧皆これなりとしるし札の圖を載せたり又武用辨略に札の頭の形にて矢筈

頭丁子頭など種々の名ある由をしるせり。これも圖を載せたり。

龍 鱗虫の長といへる想像の動物。三停九似とて。角は鹿。頭は駝。眼は鬼。頂は蛇。腹は蜃。鱗は魚。其數八十二。爪は鷹。掌は虎。其指三本。耳は牛に似たり。其喉の下に。一尺ばかりの逆の鱗ありて。物これに觸るれば怒りて之を殺す。故に天子の怒り給ふを逆鱗といふ。韓非子に見ゆ。飛龍。應龍。蛟龍。虬龍。青龍。白龍。黑龍。黃龍。赤龍等。其種類頗る多し。雲氣に乗じ。陰陽に養はれ。或は明に或は幽に。雲を起し雨を致し。水に潛み天に上り。大なる時は宇宙に徜徉し。小なる時は拳石の中にかくるといふ靈物。

口合 海草に「ある人燒木にせんと。大なる木を置けるに。隣の人斧をもち來て。割とるを見て咎めければ。かのもこのたへて。

わがよきに人のわる木があらばこそ人の割木は我がわる木なり

といひけり。歌のとりなしはをかしけれども。むさくなり云々。これ口合なり。

生は難く死は易し 史記趙世家趙朔客曰公孫杵臼。杵臼謂朔友人程嬰曰。胡不死。程嬰曰。朔之婦有遺腹。若幸男吾奉之。即女也。吾徐死耳。居無何。而朔婦免身。生男。屠岸賈聞之。索於宮中。夫人置兒絝中。祝曰。趙宗滅乎若號。即不滅若無聲。及索兒。竟無聲。已脫。程嬰謂公孫杵臼曰。今一索不得。後必且復索之。奈何。公孫杵臼曰。立孤與死孰難。程嬰曰。死易立孤難耳。公

孫杵曰。趙氏先君遇子厚。子彊爲其難者。吾爲其易。請先者死。乃二人謂取他人嬰兒。負之衣以文葆。匿山中。程嬰出。謬謂諸將軍曰。嬰不肖。不能立趙孤。誰能與我千金。吾告趙氏孤處。諸將皆喜許之。發師隨程嬰。收公孫杵曰。杵曰。謬曰。小人哉程嬰。昔下宮之難。不能死。與我謀匿趙子孤兒。今又賣我。縱不能立。而忍賣之乎。抱兒呼曰。天乎命乎。趙氏孤兒何罪。請活之。獨殺杵曰。可也。諸將不許。遂殺杵。曰。與孤兒云々。

伯夷叔齊 史記列傳傳曰。伯夷叔齊。孤竹君之二子也。父欲立叔齊。及父卒。叔齊讓伯夷。伯夷曰。父命也。遂逃去。叔齊亦不肯立。而逃之。國人立其中子。於是伯夷叔齊聞西伯昌善養老。盡往歸焉。及至西。伯卒。武王戴木主。號爲文王。東伐紂。伯夷叔齊叩馬而諫曰。父死不葬。爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君。可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰。此義人也。扶而去之。武王已平殷亂。天下宗周。而伯夷叔齊恥之。義不食周粟。隱於首陽山。采薇而食之。及餓且死。作歌。其辭曰。登彼西山兮。采其薇矣。以暴易暴兮。不知其非矣。神嚴虞夏。忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣。遂餓死於首陽山。

北辰尊星 北斗星なり。妙見尊星。王ともいふ。神呪經に。北辰菩薩。名曰妙見菩薩。今欲說神呪。擁護諸國土。處於閻浮提。所作甚奇特。故名曰妙見。衆星中之最勝。神仙中之仙。菩薩中之大將。

百連の明鏡。百連はもと百鍊なるべし。白氏文集に「百鍊鎔範非常規。日辰處所靈且祇。江心波上舟中鑄。五月五日々々午時。瓊粉金膏磨瑩已。化爲一片秋潭水。鏡成將獻蓬萊宮。楊州長吏手自封。人間臣妾不合照。背有九五飛天龍。人々呼爲天子鏡。我有一言聞太宗。太宗常以人爲鏡。鑒古鑒今不鑒容。四海安危居掌內。百王治亂懸心中。乃知天子別有鏡。不是楊州百鍊鏡。」

淨瑠璃通解第四編終

明治三十七年二月一日印刷  
明治三十七年二月四日發行

淨瑠璃通解第四編

定價金參拾五錢

著者 山本信吉

發行者 大橋新太郎  
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博進社工場  
東京市小石川區久堅町百八番地  
合資會社



發兌元

東京市日本橋區本町

博文館

# 博文館發兌戲曲書類目錄

## 謠曲及能狂言

大和田建樹君著

增補謠曲

### 目次

- 第一 總論 歌舞の起原 猿樂の起原 能の大成 能の作者 外五章
- 第二 高松 八島 江口 道成寺 越前 萬成 熊野 外四章
- 第三 白樂天 楊貴妃 倭寇 增風 難波 放下 外九章
- 第四 養老 敦盛 井筒 關孝小町 石橋 加茂 木曾 外三章
- 第五 龍田 兼平 芭蕉 菅原 葵上 禪師 曾我 佐保 外三章
- 第六 玉井 橋本 慶 榎垣 東岸居士 國柄 江島 外三章
- 第七 五井 大佛 供養 女即花 定家 鍾植 繪馬 外三章
- 第八 磯邊 惡源太 朝顔 佐々木 鍾引 紅葉 鶴岡 外十三
- 第九 鷗羽

大和田建樹君著

### 謠曲文粹

其文は金玉其曲は金繼誰か謠曲を一讀して三嘆せざるものあり。大和田先生其文中に就き、粹の粹なるものを抜き、之を四季戀雜の六種に類別して一々に題を設け、文の妙處に批圍けて味ふべく、謠曲の國別を示されたり。讀者若し夫れ首卷に一覽せば更に便益を得給ふこと多からん。

大和田建樹君著

### 能

全一册洋並綴 正價貳拾五錢  
大判二七六頁 郵稅六錢

幸田露伴君校訂

## 狂言全集

上卷					中卷					下卷									
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)					
烏帽子折	波福	かみひろくわい	あいくすり	あいくすり	伊文字	羯鼓	粟田口	粟田口	粟田口	素履	目成	目成	目成	目成	八對馬	茶盃	餅塗	棒塗	老松
きんし	かみひろくわい	あいくすり	あいくすり	あいくすり	武藏	伊文字	羯鼓	粟田口	粟田口	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	布施	た馬	人取	身取	煮論
七落	宗論	二石	山伏	山伏	文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	米市	止動	止動	止動	止動
八拾	秋大名	太刀	太刀	太刀	文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	市音	市音	市音	市音	市音
錢	錢	錢	錢	錢	文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘
					文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	雙	雙	雙	雙	雙
					文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	僧	僧	僧	僧	僧
					文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	伏	伏	伏	伏	伏
					文	文	文	文	文	磁石	入間野	入間野	入間野	入間野	王	王	王	王	王

上、中巻既刊 下巻近刊

全三册和上綴 正價一册五拾錢  
中判凡三百頁 郵稅一拾錢



淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

義太夫百番

全一册洋布上綴 正價壹拾貳圓  
小判六十六頁 郵稅拾貳圓

水谷不倒君校訂

近松時代淨瑠璃

全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇〇八頁 郵稅拾六拾錢

水谷不倒君校訂

近松世話淨瑠璃

全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇四頁 郵稅拾六拾錢

水谷不倒君校訂

並木宗輔淨瑠璃集

全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇四頁 郵稅拾六拾錢

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇一頁 郵稅拾六拾錢

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全二册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇九〇頁 郵稅拾六拾錢

百鳥會折我  
長源氏女帽腹子  
輝者女職人切  
明二天皇繪草景紙  
心用我八卦八景  
おとろ月宮心  
二兵衛今野守鑑  
百合若大臣野守鑑

古野部記補  
天歌加神女  
曾朝會國稽留  
傾城朝我三會  
非傾朝我三會  
四卷津國女夫池  
信女中川青庚申

近松二牛淨瑠璃集  
全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇九〇頁 郵稅拾六拾錢

並木宗輔淨瑠璃集  
全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇四頁 郵稅拾六拾錢

紀海音淨瑠璃集  
全一册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇一頁 郵稅拾六拾錢

續近松淨瑠璃集  
全二册背皮上綴 正價六拾錢  
中判一〇九〇頁 郵稅拾六拾錢







# 淨 瑠 璃 通 解

## 第 壹 編

① 壇浦兜軍記  
 ② 伊賀越道中双六  
 ③ 伊賀越道中双六  
 ④ 伊賀越道中双六  
 ⑤ 伊賀越道中双六  
 ⑥ 伊賀越道中双六  
 ⑦ 伊賀越道中双六  
 ⑧ 伊賀越道中双六  
 ⑨ 伊賀越道中双六  
 ⑩ 伊賀越道中双六  
 ⑪ 伊賀越道中双六  
 ⑫ 伊賀越道中双六  
 ⑬ 伊賀越道中双六  
 ⑭ 伊賀越道中双六  
 ⑮ 伊賀越道中双六  
 ⑯ 伊賀越道中双六  
 ⑰ 伊賀越道中双六  
 ⑱ 伊賀越道中双六  
 ⑲ 伊賀越道中双六  
 ⑳ 伊賀越道中双六  
 ㉑ 伊賀越道中双六  
 ㉒ 伊賀越道中双六  
 ㉓ 伊賀越道中双六  
 ㉔ 伊賀越道中双六  
 ㉕ 伊賀越道中双六  
 ㉖ 伊賀越道中双六  
 ㉗ 伊賀越道中双六  
 ㉘ 伊賀越道中双六  
 ㉙ 伊賀越道中双六  
 ㉚ 伊賀越道中双六  
 ㉛ 伊賀越道中双六  
 ㉜ 伊賀越道中双六  
 ㉝ 伊賀越道中双六  
 ㉞ 伊賀越道中双六  
 ㉟ 伊賀越道中双六  
 ㊱ 伊賀越道中双六  
 ㊲ 伊賀越道中双六  
 ㊳ 伊賀越道中双六  
 ㊴ 伊賀越道中双六  
 ㊵ 伊賀越道中双六  
 ㊶ 伊賀越道中双六  
 ㊷ 伊賀越道中双六  
 ㊸ 伊賀越道中双六  
 ㊹ 伊賀越道中双六  
 ㊺ 伊賀越道中双六  
 ㊻ 伊賀越道中双六  
 ㊼ 伊賀越道中双六  
 ㊽ 伊賀越道中双六  
 ㊾ 伊賀越道中双六  
 ㊿ 伊賀越道中双六

## 第 貳 編

① 菅原傳授手習鑑  
 ② 菅原傳授手習鑑  
 ③ 菅原傳授手習鑑  
 ④ 菅原傳授手習鑑  
 ⑤ 菅原傳授手習鑑  
 ⑥ 菅原傳授手習鑑  
 ⑦ 菅原傳授手習鑑  
 ⑧ 菅原傳授手習鑑  
 ⑨ 菅原傳授手習鑑  
 ⑩ 菅原傳授手習鑑  
 ⑪ 菅原傳授手習鑑  
 ⑫ 菅原傳授手習鑑  
 ⑬ 菅原傳授手習鑑  
 ⑭ 菅原傳授手習鑑  
 ⑮ 菅原傳授手習鑑  
 ⑯ 菅原傳授手習鑑  
 ⑰ 菅原傳授手習鑑  
 ⑱ 菅原傳授手習鑑  
 ⑲ 菅原傳授手習鑑  
 ⑳ 菅原傳授手習鑑  
 ㉑ 菅原傳授手習鑑  
 ㉒ 菅原傳授手習鑑  
 ㉓ 菅原傳授手習鑑  
 ㉔ 菅原傳授手習鑑  
 ㉕ 菅原傳授手習鑑  
 ㉖ 菅原傳授手習鑑  
 ㉗ 菅原傳授手習鑑  
 ㉘ 菅原傳授手習鑑  
 ㉙ 菅原傳授手習鑑  
 ㉚ 菅原傳授手習鑑  
 ㉛ 菅原傳授手習鑑  
 ㉜ 菅原傳授手習鑑  
 ㉝ 菅原傳授手習鑑  
 ㉞ 菅原傳授手習鑑  
 ㉟ 菅原傳授手習鑑  
 ㊱ 菅原傳授手習鑑  
 ㊲ 菅原傳授手習鑑  
 ㊳ 菅原傳授手習鑑  
 ㊴ 菅原傳授手習鑑  
 ㊵ 菅原傳授手習鑑  
 ㊶ 菅原傳授手習鑑  
 ㊷ 菅原傳授手習鑑  
 ㊸ 菅原傳授手習鑑  
 ㊹ 菅原傳授手習鑑  
 ㊺ 菅原傳授手習鑑  
 ㊻ 菅原傳授手習鑑  
 ㊼ 菅原傳授手習鑑  
 ㊽ 菅原傳授手習鑑  
 ㊾ 菅原傳授手習鑑  
 ㊿ 菅原傳授手習鑑

## 第 參 編

① 桂川連理橋  
 ② 源平布引瀧  
 ③ 源平布引瀧  
 ④ 源平布引瀧  
 ⑤ 源平布引瀧  
 ⑥ 源平布引瀧  
 ⑦ 源平布引瀧  
 ⑧ 源平布引瀧  
 ⑨ 源平布引瀧  
 ⑩ 源平布引瀧  
 ⑪ 源平布引瀧  
 ⑫ 源平布引瀧  
 ⑬ 源平布引瀧  
 ⑭ 源平布引瀧  
 ⑮ 源平布引瀧  
 ⑯ 源平布引瀧  
 ⑰ 源平布引瀧  
 ⑱ 源平布引瀧  
 ⑲ 源平布引瀧  
 ⑳ 源平布引瀧  
 ㉑ 源平布引瀧  
 ㉒ 源平布引瀧  
 ㉓ 源平布引瀧  
 ㉔ 源平布引瀧  
 ㉕ 源平布引瀧  
 ㉖ 源平布引瀧  
 ㉗ 源平布引瀧  
 ㉘ 源平布引瀧  
 ㉙ 源平布引瀧  
 ㉚ 源平布引瀧  
 ㉛ 源平布引瀧  
 ㉜ 源平布引瀧  
 ㉝ 源平布引瀧  
 ㉞ 源平布引瀧  
 ㉟ 源平布引瀧  
 ㊱ 源平布引瀧  
 ㊲ 源平布引瀧  
 ㊳ 源平布引瀧  
 ㊴ 源平布引瀧  
 ㊵ 源平布引瀧  
 ㊶ 源平布引瀧  
 ㊷ 源平布引瀧  
 ㊸ 源平布引瀧  
 ㊹ 源平布引瀧  
 ㊺ 源平布引瀧  
 ㊻ 源平布引瀧  
 ㊼ 源平布引瀧  
 ㊽ 源平布引瀧  
 ㊾ 源平布引瀧  
 ㊿ 源平布引瀧

## 第 肆 編

① 近江源氏先陣箱  
 ② 近江源氏先陣箱  
 ③ 近江源氏先陣箱  
 ④ 近江源氏先陣箱  
 ⑤ 近江源氏先陣箱  
 ⑥ 近江源氏先陣箱  
 ⑦ 近江源氏先陣箱  
 ⑧ 近江源氏先陣箱  
 ⑨ 近江源氏先陣箱  
 ⑩ 近江源氏先陣箱  
 ⑪ 近江源氏先陣箱  
 ⑫ 近江源氏先陣箱  
 ⑬ 近江源氏先陣箱  
 ⑭ 近江源氏先陣箱  
 ⑮ 近江源氏先陣箱  
 ⑯ 近江源氏先陣箱  
 ⑰ 近江源氏先陣箱  
 ⑱ 近江源氏先陣箱  
 ⑲ 近江源氏先陣箱  
 ⑳ 近江源氏先陣箱  
 ㉑ 近江源氏先陣箱  
 ㉒ 近江源氏先陣箱  
 ㉓ 近江源氏先陣箱  
 ㉔ 近江源氏先陣箱  
 ㉕ 近江源氏先陣箱  
 ㉖ 近江源氏先陣箱  
 ㉗ 近江源氏先陣箱  
 ㉘ 近江源氏先陣箱  
 ㉙ 近江源氏先陣箱  
 ㉚ 近江源氏先陣箱  
 ㉛ 近江源氏先陣箱  
 ㉜ 近江源氏先陣箱  
 ㉝ 近江源氏先陣箱  
 ㉞ 近江源氏先陣箱  
 ㉟ 近江源氏先陣箱  
 ㊱ 近江源氏先陣箱  
 ㊲ 近江源氏先陣箱  
 ㊳ 近江源氏先陣箱  
 ㊴ 近江源氏先陣箱  
 ㊵ 近江源氏先陣箱  
 ㊶ 近江源氏先陣箱  
 ㊷ 近江源氏先陣箱  
 ㊸ 近江源氏先陣箱  
 ㊹ 近江源氏先陣箱  
 ㊺ 近江源氏先陣箱  
 ㊻ 近江源氏先陣箱  
 ㊼ 近江源氏先陣箱  
 ㊽ 近江源氏先陣箱  
 ㊾ 近江源氏先陣箱  
 ㊿ 近江源氏先陣箱

## 第 伍 編

① 與州安達原  
 ② 與州安達原  
 ③ 與州安達原  
 ④ 與州安達原  
 ⑤ 與州安達原  
 ⑥ 與州安達原  
 ⑦ 與州安達原  
 ⑧ 與州安達原  
 ⑨ 與州安達原  
 ⑩ 與州安達原  
 ⑪ 與州安達原  
 ⑫ 與州安達原  
 ⑬ 與州安達原  
 ⑭ 與州安達原  
 ⑮ 與州安達原  
 ⑯ 與州安達原  
 ⑰ 與州安達原  
 ⑱ 與州安達原  
 ⑲ 與州安達原  
 ⑳ 與州安達原  
 ㉑ 與州安達原  
 ㉒ 與州安達原  
 ㉓ 與州安達原  
 ㉔ 與州安達原  
 ㉕ 與州安達原  
 ㉖ 與州安達原  
 ㉗ 與州安達原  
 ㉘ 與州安達原  
 ㉙ 與州安達原  
 ㉚ 與州安達原  
 ㉛ 與州安達原  
 ㉜ 與州安達原  
 ㉝ 與州安達原  
 ㉞ 與州安達原  
 ㉟ 與州安達原  
 ㊱ 與州安達原  
 ㊲ 與州安達原  
 ㊳ 與州安達原  
 ㊴ 與州安達原  
 ㊵ 與州安達原  
 ㊶ 與州安達原  
 ㊷ 與州安達原  
 ㊸ 與州安達原  
 ㊹ 與州安達原  
 ㊺ 與州安達原  
 ㊻ 與州安達原  
 ㊼ 與州安達原  
 ㊽ 與州安達原  
 ㊾ 與州安達原  
 ㊿ 與州安達原

## 第 陸 編

① 三十三間堂棟由來  
 ② 攝州合那津  
 ③ 加賀見山舊錦繪  
 ④ 加賀見山舊錦繪  
 ⑤ 加賀見山舊錦繪  
 ⑥ 加賀見山舊錦繪  
 ⑦ 加賀見山舊錦繪  
 ⑧ 加賀見山舊錦繪  
 ⑨ 加賀見山舊錦繪  
 ⑩ 加賀見山舊錦繪  
 ⑪ 加賀見山舊錦繪  
 ⑫ 加賀見山舊錦繪  
 ⑬ 加賀見山舊錦繪  
 ⑭ 加賀見山舊錦繪  
 ⑮ 加賀見山舊錦繪  
 ⑯ 加賀見山舊錦繪  
 ⑰ 加賀見山舊錦繪  
 ⑱ 加賀見山舊錦繪  
 ⑲ 加賀見山舊錦繪  
 ⑳ 加賀見山舊錦繪  
 ㉑ 加賀見山舊錦繪  
 ㉒ 加賀見山舊錦繪  
 ㉓ 加賀見山舊錦繪  
 ㉔ 加賀見山舊錦繪  
 ㉕ 加賀見山舊錦繪  
 ㉖ 加賀見山舊錦繪  
 ㉗ 加賀見山舊錦繪  
 ㉘ 加賀見山舊錦繪  
 ㉙ 加賀見山舊錦繪  
 ㉚ 加賀見山舊錦繪  
 ㉛ 加賀見山舊錦繪  
 ㉜ 加賀見山舊錦繪  
 ㉝ 加賀見山舊錦繪  
 ㉞ 加賀見山舊錦繪  
 ㉟ 加賀見山舊錦繪  
 ㊱ 加賀見山舊錦繪  
 ㊲ 加賀見山舊錦繪  
 ㊳ 加賀見山舊錦繪  
 ㊴ 加賀見山舊錦繪  
 ㊵ 加賀見山舊錦繪  
 ㊶ 加賀見山舊錦繪  
 ㊷ 加賀見山舊錦繪  
 ㊸ 加賀見山舊錦繪  
 ㊹ 加賀見山舊錦繪  
 ㊺ 加賀見山舊錦繪  
 ㊻ 加賀見山舊錦繪  
 ㊼ 加賀見山舊錦繪  
 ㊽ 加賀見山舊錦繪  
 ㊾ 加賀見山舊錦繪  
 ㊿ 加賀見山舊錦繪

國民新聞評(玉略)  
 淨瑠璃の文章上の註解を施したるものにして、各浄瑠璃の由來、并に其人物の考證を試みたるなど、我邦の淨瑠璃を新に紹介するに當つて、既に近松物の出でし外はこの書を以て、最も忠實なる者となすを得べし、我が淨瑠璃愛好者は之れを讀み、之れを語るを、知れ共其脩辭を解するもの少なく、而かも益々流行せんとするに當つて、この著あるは、先づ其愛好者の爲め、次いで徳川文學研究の爲め、と謂つて可なり。

一 册 正 價 金 參 拾 五 錢 郵 稅 六 錢  
 ● 六 册 貳 圓 十 二 參 圓 八 錢 外 要 郵 稅 ●

